史跡 斎宮跡

令和４年度発掘調査概報

２０２４年３月

斎　宮　歴　史　博　物　館

第 203 次（２区）調査区遠景（北西から）

第 203 次（２区）調査区全景（北西から）

第 203 次（２区）調査区全景（北から）

SB11622 柱穴３ 柱抜取痕跡検出状況（北から）

序

日本のみならず世界で大流行した新型コロナウイルス感染症は、令和４年度は流行３年目となり、日本社会においても感染予防に対する意識が根付いてきました。そのような中、史跡斎宮跡では「さいくう平安の杜」でのプロジェクションマッピングや、博物館エントランスでのデジタルアート展示など、感染対策を取りながら様々なイベントが実施され、多くの人たちが史跡を訪れ、楽しんでいただきました。

コロナ禍にあっても、史跡斎宮跡の発掘調査は継続して実施し、令和３年度までに飛鳥時代の斎宮中枢域の様相が明らかとなり、県内外の皆さまに注目されることとなりました。これもひとえに、地域の皆様の応援・ご協力があったからこそと改めて感謝いたします。

さて、今回報告する第 203 次発掘調査は、奈良時代の斎宮にかかる実態を解明するため、史跡西部の中垣内地区で行ったものです。調査の結果、奈良時代正方位区画内の構造の把握について大きな成果をあげる事ができました。この調査で得られた成果は、地元明和町をはじめ、ひろく県民の皆様や斎宮跡を訪れる皆様に還元できますよう、積極的に情報発信してまいります。

今後も斎宮歴史博物館は、全国で唯一無二の遺跡となる斎宮を体感できるサイトミュージアムとして、一層魅力ある活動を続けてまいります。

史跡斎宮跡の保存および調査研究・整備活用にあたり、貴重なご意見やご指導を頂きました文化庁、斎宮跡調査研究指導委員ほか多くの方々や、発掘調査にあたり様々なご配慮・ご協力を頂きました国史跡斎宮跡協議会をはじめとした地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

２０２４（令和６）年３月

斎宮歴史博物館

館　長　　大西　宏明

例　　言

1　本書は、斎宮歴史博物館が令和４年度に国庫補助金を受けて実施した史跡斎宮跡発掘調査（第 203 次調査　１区・２区）の概要をまとめたものである。

2　明和町が調査主体となって実施した、史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の第 202 次調査報告書は、別途明和町が刊行する予定である。

3　遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第Ⅵ座標系を基準とし、方位は旧国土座標による座標北で示している。

4　遺構時期区分の指標となる土器分類と年代観については、一部を除き以下の文献に拠った。

斎宮歴史博物館 2018「斎宮跡の土器編年の再検討」『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ　柳原区画の調査　出土遺物編』

5　斎宮跡の時期区分については土器編年に基づき、期と段階を用いて「斎宮跡Ⅱ期第１段階」等と表記するが、本文中ではこれを簡略的に「斎宮Ⅱ－１期」と表現している。

6　遺構表示記号は、文化庁文化財部記念物課 2010『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』に準拠し、遺構の種類から次のように表記している。

SA：塀・柱列　SB：掘立柱建物　SD：溝　SE：井戸　SK：土坑　SZ：周溝墓　SP：柱穴・ピット

7　遺物実測図は基本的に実物の４分の１で行っている。遺物写真は縮尺不同である。

8　土層および出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』（2004 年度版）に拠る。施釉陶器の色調については一部、大日本インキ化学工業株式会社発行『日本の伝統色』第５版（1989 年）を用いて補っている。

9　発掘調査にあたっては、以下の方のご指導、ご協力を賜った。

塩川哲朗　（敬称略）

10　図面・写真等の調査資料及び出土遺物は、斎宮歴史博物館で保管している。

11　発掘調査は川部浩司（１区）、山中由紀子（２区）が行った。また、本書の執筆・編集は川部・山中・小原雄也が担当し、現地調査及び資料整理については、大川勝宏・八木光代・大和谷周子・中西宏美の補助を得た。空中写真撮影は、明和町斎宮跡・文化観光課の協力を得て実施した。

目　次

Ⅰ　前言 …… 1
Ⅱ　第 203 次調査（１区） …… 7
Ⅲ　第 203 次調査（２区） …… 17

挿 図 目 次

第Ⅰ－１図　史跡斎宮跡位置図 …… 4
第Ⅰ－２図　令和４年度発掘調査位置図 …… 5
第Ⅰ－３図　史跡斎宮跡における大地区表示図 …… 6
第Ⅱ－１図　第 203 次調査（１区）グリッド図 …… 7
第Ⅱ－２図　第 203 次調査　調査区位置図 …… 8
第Ⅱ－３図　第 203 次調査（１区）　遺構平面図・土層断面図 …… 9
第Ⅱ－４図　第 203 次調査（１区）　出土遺物実測図１ …… 11
第Ⅱ－５図　第 203 次調査（１区）　出土遺物実測図２ …… 12
第Ⅱ－６図　第 203 次調査（１区）　出土遺物実測図３ …… 12
第Ⅱ－７図　斜方位区画の西第三堂の変遷図 …… 13
第Ⅱ－８図　飛鳥時代の斎王宮殿域の遺構配置図 …… 14
第Ⅱ－９図　奈良時代の斎王宮殿域の遺構配置図 …… 15
第Ⅲ－１図　第 203 次調査（２区）グリッド図 …… 17
第Ⅲ－２図　第 203 次調査（２区）　遺構平面図 …… 18
第Ⅲ－３図　第 203 次調査（２区）　調査区土層断面図 …… 19
第Ⅲ－４図　第 203 次調査（２区）　弥生時代遺構分布図 …… 20
第Ⅲ－５図　ＳＺ 11623 土器出土状況図 …… 21
第Ⅲ－６図　第 203 次調査（２区）　古墳～飛鳥時代遺構分布図 …… 22
第Ⅲ－７図　ＳＫ 11613　平面・土層断面図 …… 23
第Ⅲ－８図　第 203 次調査（２区）　奈良時代遺構分布図 …… 24
第Ⅲ－９図　第 203 次調査（２区）　平安時代前期遺構分布図 …… 24
第Ⅲ－ 10 図　SA11629　平面図 …… 25
第Ⅲ－ 11 図　SB11620・SB 11621　平面・土層断面図 …… 26
第Ⅲ－ 12 図　SB11622　平面・土層断面図 …… 27
第Ⅲ－ 13 図　第 203 次調査（２区）　平安時代末～鎌倉時代遺構分布図 …… 28
第Ⅲ－ 14 図　第 203 次調査（２区）　出土遺物実測図１ …… 29
第Ⅲ－ 15 図　第 203 次調査（２区）　出土遺物実測図２ …… 30
第Ⅲ－ 16 図　第 203 次調査（２区）　出土遺物実測図３ …… 31
第Ⅲ－ 17 図　第 203 次調査（２区）　出土遺物実測図４ …… 33
第Ⅲ－ 18 図　第 203 次調査（２区）　出土遺物実測図５ …… 34
第Ⅲ－ 19 図　調査区北西・北東部の掘立柱塀・掘立柱建物　平面図 …… 39
第Ⅲ－ 20 図　中垣内地区における正方位区画 …… 40

表目次

第Ⅰ－１表　令和４年度史跡斎宮跡の現状変更等許可申請一覧･･････････････････････････････････････　３
第Ⅰ－２表　令和４年度発掘調査一覧･･　３
第Ⅱ－１表　第203次調査（１区）　建物等一覧･･ 10
第Ⅱ－２表　第203次調査（１区）　土坑・溝一覧･･ 10
第Ⅱ－３表　第203次調査（１区）　遺物観察表･･ 12
第Ⅲ－１表　第203次調査（２区）　遺構一覧･･ 42
第Ⅲ－２表　第203次調査（２区）　掘立柱塀・掘立柱建物一覧･･････････････････････････････････ 42
第Ⅲ－３表　第203次調査（２区）　遺物観察表１･･ 43
第Ⅲ－４表　第203次調査（２区）　遺物観察表２･･ 44
第Ⅲ－５表　第203次調査（２区）　遺物観察表３･･ 45
第Ⅲ－６表　第203次調査（２区）　遺物観察表４･･ 46

写真図版目次

巻頭図版１　第203次調査（２区）区遠景／第203次調査（２区）区全景
巻頭図版２　第203次調査（２区）区全景／ＳＢ11622柱穴３　柱抜取痕跡検出状況
写真図版１　第203次調査（１区）　斜方位区画南西角の柱穴／斜方位区画の塀南辺SA11510・11511／
斜方位区画の西第三堂SB6292・SB11505／１区東追加区①・②／
西正方位区画の塀北辺SA11633･･ 16
写真図版２　ＳＺ11623弥生土器（３）出土状況／ＳＺ11623弥生土器（２）出土状況／
ＳＺ11623土層断面／ＳＫ11614／ＳＫ11613半裁状況・土層断面････････････････････････････････ 47
写真図版３　ＳＡ11630・ＳＤ11612／ＳＡ11630／ＳＢ11620・ＳＢ11621････････････････････････ 48
写真図版４　ＳＢ11620・ＳＢ11621 柱穴２土層断面／s14 pit ３土層断面／
ＳＢ11622柱穴３土層断面／ＳＢ11622柱穴２土層断面／
ＳＤ11612土層断面／ＳＥ11625土層断面／ＳＤ11615･･ 49
写真図版５　第203次調査（２区）　出土遺物･･ 50

Ⅰ　前　　言

1　調査の経緯と概要

（1）史跡斎宮跡にかかる経緯と経過

斎宮跡の発見の契機は、高度経済成長期に斎宮段丘面の西縁部で大規模な宅地造成計画がなされ、その開発事業に先立って実施された昭和45年の斎宮跡（古里遺跡）の確認調査による。その後の発掘調査では、大型の建物を含む多くの掘立柱建物、井戸、土坑、奈良時代と鎌倉時代の大溝、蹄脚硯や大型赤彩土馬、緑釉陶器等が発見され、斎宮関連の重要遺跡と認識された。昭和48年度から文化庁の補助事業として確認調査を重ね、昭和54年３月27日に国史跡に指定され、東西約２㎞、南北約700ｍに及ぶ137haの史跡範囲が把握されるに至った。管理団体は、明和町である。

三重県は、史跡指定に伴い斎宮跡調査事務所を設置して発掘調査にあたり、平成元年度からは新たに開館した斎宮歴史博物館によって、史跡の実態解明のための計画的な学術調査を継続的に実施している。

斎宮跡の発掘調査では、史跡東部に所在する平安時代の方格街区と斎宮中枢部の解明が進展した。平成27年度には、柳原区画で平安時代前期の斎宮寮庁を対象に、史跡整備の一環として正殿・西脇殿・東脇殿の復元建物を建設し、史跡公園「さいくう平安の杜」を公開活用されている。

明和町は、「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」に基づき、平成23年度から「明和町歴史的風致維持向上計画」の策定に取組み、平成24年６月６日に国の認定を受けた。同計画に基づき、下園東区画周辺において来訪者の案内・交流を目的とした施設整備を計画し、平成24年度に発掘調査を行い、平成27年度から工事に着手、平成29年３月に「いつきのみや地域交流センター」が竣工した。平成27年４月24日には、「祈る皇女斎王のみやこ　斎宮」が日本遺産に認定された。

（2）史跡斎宮跡の発掘調査

斎宮跡の発掘調査は、昭和45年の確認調査（第１次）を皮切りに、史跡内容確認の計画的な学術調査、現状変更等に伴う調査が積み重ねられ、令和２年度には50年目の節目を迎えた。これまでは、史跡東部に位置し、平安時代の斎宮の中心地である、方格街区内部の発掘調査に重点を置き、具体的な構造の解明に取り組んできた。

これらの成果は、発掘調査概報として毎年刊行しているが、正式な発掘調査報告書『斎宮跡発掘調査報告』は、斎王の宮殿「内院」（報告Ⅰ）、柳原区画の「斎宮寮庁」（報告Ⅱ）、下園東区画の「寮庫」（報告Ⅲ）、西加座南区画の「神殿」（報告Ⅳの一部）、飛鳥時代の斎宮中枢域の調査（報告Ⅴ）を刊行している。今後は、これまで調査を行ってきた方格街区の他の区画とともに、奈良時代の斎宮中枢域にかかる発掘調査の正式報告書を順次刊行していく方針である。

（3）『発掘調査基本方針』の策定

斎宮歴史博物館は平成29年３月、史跡斎宮跡発掘調査の考え方や調査計画をまとめた『史跡斎宮跡発掘調査基本方針』を策定した。当該方針等での史跡内容確認は、初源期（飛鳥～奈良時代）の斎宮の実態解明、方格街区内部構造の解明、衰退期（平安～鎌倉時代）の斎宮の実態解明、斎宮に関わる居住、生産・流通、墓域等の解明の４項目を課題に挙げた。今日的かつ当面の重点目標として、史跡西部での飛鳥～奈良時代斎宮中枢域の実態解明調査を掲げている。特に史跡西部の中でも中垣内地区は、古代伊勢道が本来の直線道路から北側にわずかに湾曲する部分を含み、古代伊勢道から南側に派生する道路がみられるなど、古代伊勢道敷設以前の重要施設が集中していたと想定されている。

これまで、平面方位で北から東に約33°の傾きをもつ飛鳥時代の掘立柱塀による方形区画と区画内部の建物群、その西側に総柱建物群を確認している。さらに奈良時代になると、平面方位を正方位へと変

えた掘立柱塀による方形区画の存在が確認されている。

（４）史跡斎宮跡の公開事業

斎宮歴史博物館では、史跡への来訪者増加や魅力の向上のために、発掘調査現場の積極的な公開活用、発掘調査成果の情報発信を行っている。令和４年度は新型コロナウイルス感染症の流行が続いていたが、その対策が取られて３年目に入ろうという段階であったため、適切な感染対策が社会的に浸透しており、公開に当たって見学者側においても感染対策に理解を得られていた。また、公開に関わるイベントにおいても技術が発展しており、手探りながら新たな公開手法を取り入れ、調査成果の公開を進めた。

発掘調査現場の公開について具体的には、発掘調査見学者への随時公開・説明、ホームページを通じた情報発信とともに、現地説明会を実施した。第203次（２区）調査の随時公開の見学者はのべ317名、現地説明会（令和５年２月18日（土）10時30分～12時）は95名であった。

斎宮跡の発掘調査開始当初から実施している子ども１日体験発掘教室はこれまでと同様のプログラムでは感染症対策上、プログラムの変更或いは実施に工夫が必要であり、その対応策が困難であることから令和２年度から休止しており、令和４年度においても実施しなかった。

その他の発掘調査成果公開として、令和５年３月18日（土）13時から、発掘成果報告会「奈良時代の斎宮解明へ」を斎宮歴史博物館講堂において実施、52名の参加を得た。

（５）調査体制

史跡斎宮跡の調査研究･整備活用に関する業務は、斎宮歴史博物館調査研究課が担当した。当該報告に関わる組織は以下の体制で行った。

令和４年度

大川勝宏・山中由紀子・川部浩司・小原雄也

令和５年度

山中由紀子・川部浩司・大川勝宏・小原雄也

２　斎宮跡調査研究指導委員会

斎宮跡の調査・整備について指導・助言を得るため、令和５年２月16日（木）に斎宮跡調査研究指導委員会を開催し、第203次（２区）調査の調査成果や明和町の整備事業について指導及び助言を得た。指導委員の方々は下記のとおりである。

〔指導委員〕

浅野　聡　（三重大学大学院教授）
稲葉信子　（筑波大学名誉教授）
小澤　毅　（三重大学教授）
京樂真帆子（滋賀県立大学教授）
金田章裕　（京都大学名誉教授）
黒田龍二　（神戸大学名誉教授）
仁藤智子　（国士舘大学教授）
増渕　徹　（京都橘大学教授）
本中　眞　（奈良文化財研究所長）
本橋裕美　（愛知県立大学准教授）
渡辺　寛　（皇學館大学名誉教授）
綿貫友子　（神戸大学大学院教授）

（五十音順・敬称略）

３　令和４年度発掘調査一覧

文化財保護法第125条第１項の規定による史跡現状変更等許可申請のうち、令和４年度は56件（国許可10件、県許可46件）があった。このうち、当該許可申請の許可条件に基づく史跡斎宮跡の発掘調査及び立会いを要した案件については、その内訳を第Ｉ－１表、発掘調査を実施した内容は第Ｉ－２表にまとめた。

明和町主体の第202次調査については、『史跡斎宮跡 令和４年度 現状変更緊急発掘調査報告』として、令和５年度に明和町が刊行する予定である。

現状変更等許可申請の内容	申請及び許可件数	対応別件数
個人･民間企業による申請	37	発掘調査 3、立会 21
明和町による地域環境整備に伴う申請	24	発掘調査 1、立会 23
明和町等による史跡環境整備及び維持管理に伴う申請	5	発掘調査 2、立会 3
三重県による計画的発掘調査のための申請	2	発掘調査 2

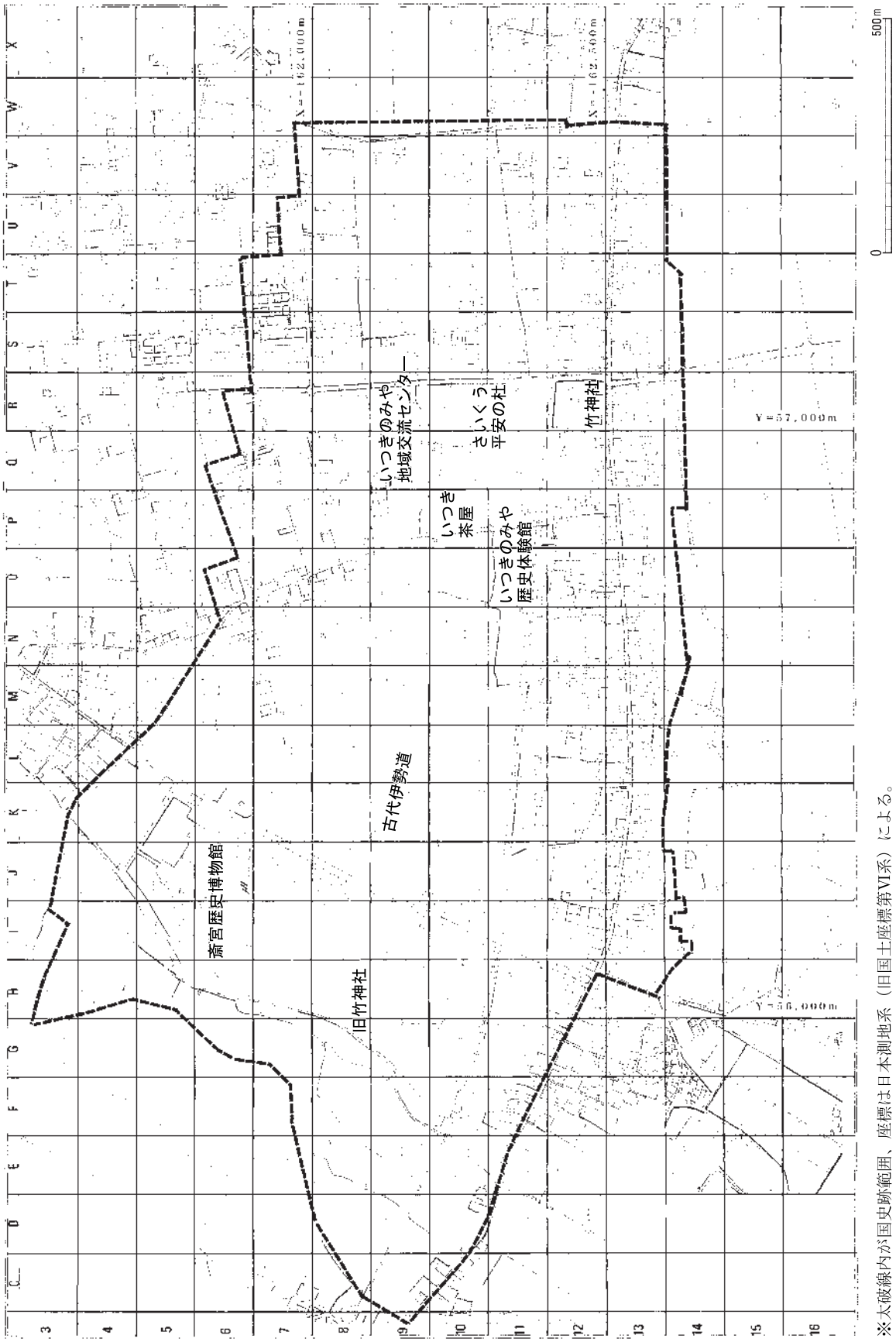
第Ⅰ－１表　令和４年度史跡斎宮跡の現状変更等許可申請一覧

調査次数	地区	調査面積（㎡）	調査期間	調査場所	現状変更申請者	現状変更申請理由	保存管理の土地利用区分
203（2区）	G10	200	R4.10.7～R5.3.17	明和町大字竹川字中垣内	三重県	計画発掘調査	第二種保存地区
202-1	K4	510.9	R4.4.6～R4.9.1	明和町大字竹川字古里	民間企業	盛土造成工事	第三種保存地区
202-2	N13	2.6	R4.6.3	明和町大字斎宮字牛葉	個人	住宅建築	第四種保存地区
202-3	L12・13	642.5	R4.10.3～R5.1.18	明和町大字斎宮字牛葉	明和町	発掘調査	第三種保存地区
202-4	R13	2.4	R4.11.7	明和町大字斎宮字中西	個人	住宅建築	第四種保存地区
202-5	L7	487.1	R5.1.19～R5.3.22	明和町大字斎宮字塚山	個人	資材置場設置	第三種保存地区
202-6	M12	266.9	R5.1.26～R5.3.2	明和町大字斎宮字西加座	明和町	排水路改修	第一・二・三種保存地区

第Ⅰ－２表　令和４年度発掘調査一覧

第Ⅰ－１図　史跡斎宮跡位置図（1：500,000・国土地理院 1:25,000「松阪」「明野」を改変）

第Ⅰ－２図　令和４年度発掘調査位置図（1：10,000）



※太破線内が国史跡範囲、座標は日本測地系（旧国土座標第Ⅵ系）による。

第Ⅰ－３図　史跡斎宮跡における大地区表示図（2002 年策定）

Ⅱ　第203次調査（１区）

（６ＡＦ10中垣内地区）

１　はじめに

1970年に始まった斎宮跡（古里遺跡）の発掘調査は、2023年で54年目の積み重ねがあり、約800箇所の調査地点を数える成果が得られている。

史跡西部の斎宮段丘面（明野原台地）西縁部には、東西に敷設される古代伊勢道を基点とした南・北派生道路沿いに飛鳥・奈良時代の掘立柱建物や竪穴建物など、広範な遺構形成が確認されている。特に一本柱列の区画塀による方形区画は複数箇所で確認され、斎宮中枢域としての空間整備が認められる。史跡東部で奈良時代末に内院、平安時代には方格街区が造営される以前の飛鳥・奈良時代の中枢域が所在するエリアとなる。

斎宮中枢域としての方形区画は、飛鳥時代の「斜方位区画」、奈良時代の東西二つが並ぶ「東正方位区画」・「西正方位区画」、平安時代にも方形区画が認められ、段丘崖付近の概ね同一の地点において造営される特徴がある。

2017年に斎宮歴史博物館が策定した『史跡斎宮跡発掘調査基本方針』では、初現期（飛鳥～奈良時代）の斎宮の実態解明を重点調査（第１期計画調査）に掲げ、2016～2021年度に本調査、2022年度に補足調査を実施してきた。こうした飛鳥時代の斎宮中枢域の調査については、2022年度末に正報告書としてすでに刊行している[(1)]。

正報告書では、飛鳥時代の方形区画（斜方位区画）を「斎王宮殿域」として斎王の居所および執務・儀礼空間の可能性を指摘したところである。本章は、正報告書に収録できなかった2022年度の補足調査（第203次調査（１区））の詳細報告となる。

さて、第203次調査（１区）は、飛鳥時代の斎宮跡の実態解明にかかる補足調査として実施した。調査地は、史跡西部の中垣内地区に位置し、近鉄山田線の線路と町道の間の狭隘な場所にあたる。

今回は飛鳥時代の斜方位区画内部の建物配置を明らかにすることを主眼とし、特に区画南西角の様相をはじめ西第三堂の構造と規模の把握を目的としている。調査は断続的に実施したことで、便宜的に「東」・「中央」・「西」の３つの調査区を主とし、東区の拡張区として追加区①・②を設けた。

２　地形環境と地層

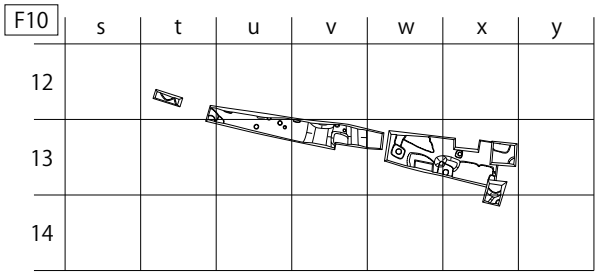
史跡斎宮跡は、紀伊山地に端を発する櫛田川（祓川）・宮川の下流域に挟まれた明野原台地の西方に位置する。後背の玉城丘陵・大仏山丘陵を基点として、そこから北へ段丘高位面（明野段丘面）、段丘中位面（斎宮段丘面）の順に地形は下降し、東西に広がる沖積低地（海岸平野・氾濫平野・三角州・後背低地）を介して、伊勢湾へと連なる。史跡斎宮跡は、段丘中位面（斎宮段丘面）に立地する。史跡西部の段丘西縁部を最高所（標高14.5ｍ程度）として、全体に東北東に向けて緩やかに下へ傾斜し、史跡の東部では標高９ｍ程度となる。傾斜角度は１°に満たない程度の平坦な地盤を形成している。

第203次調査（１区）の現地表面は、13.7～14.5ｍの標高を測り、遺物包含層上面の標高は13.4～13.9ｍ、遺構検出面（地山面）の標高は13.3～13.7ｍである。段階的に設けた調査区の情報は以下のとおりである。

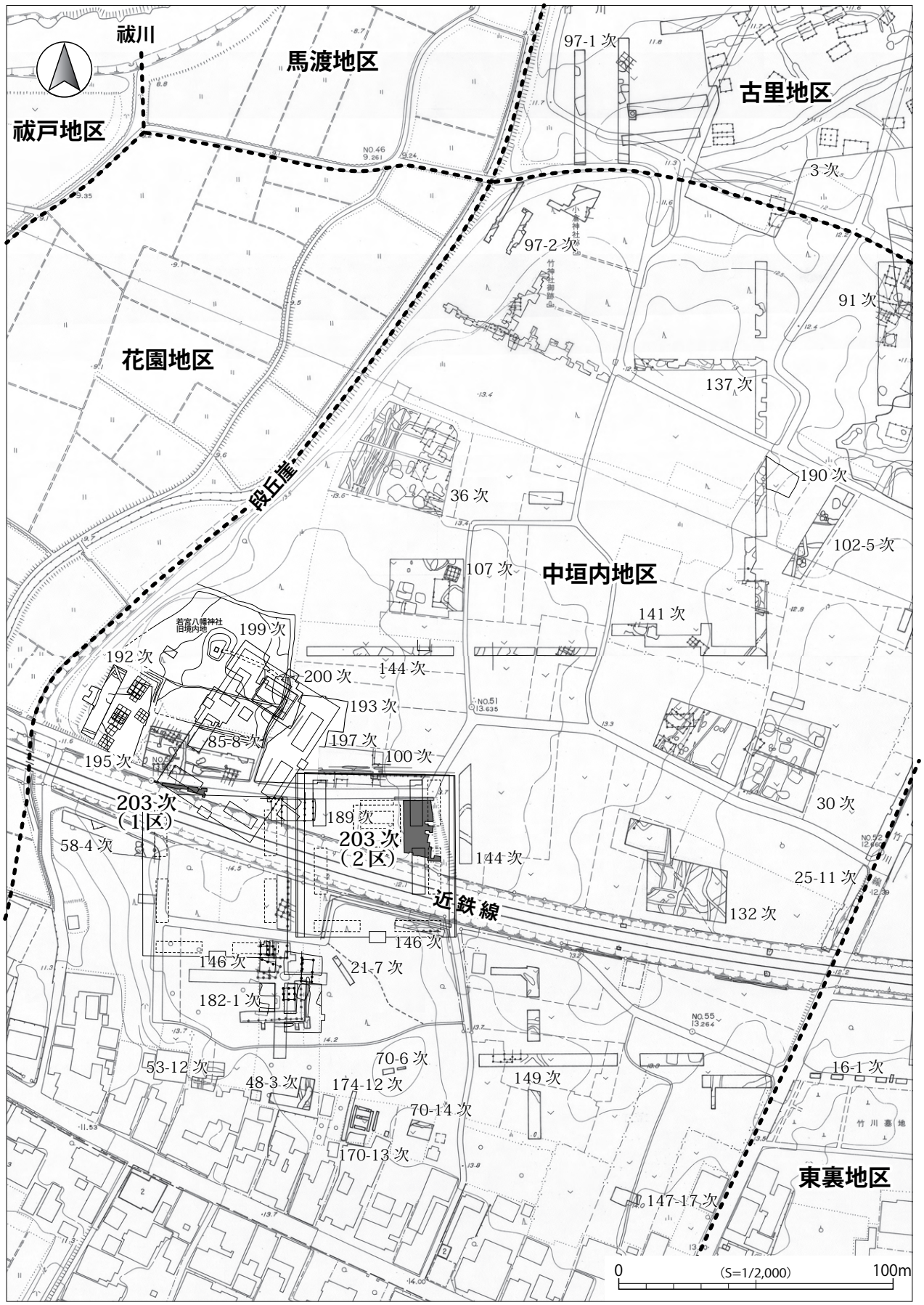
１区西　東西約1.5ｍ、南北約0.5ｍ。地表面（標高約13.9ｍ）から深さ約0.5ｍ（標高13.4ｍ付近）で遺物包含層と遺構面、深さ約0.6ｍ（標高13.3ｍ付近）で地山面に至る。

１区中央　東西約9.3ｍ、南北は西端で約0.9ｍ、中央付近で約1.4ｍ、東端で約1.0ｍ。地表面（標高13.9～14.1ｍ）から深さ約0.3ｍ（標高13.7ｍ付近）で遺物包含層と遺構面、深さ約0.4ｍ（標高13.6ｍ付近）で地山面に至る。

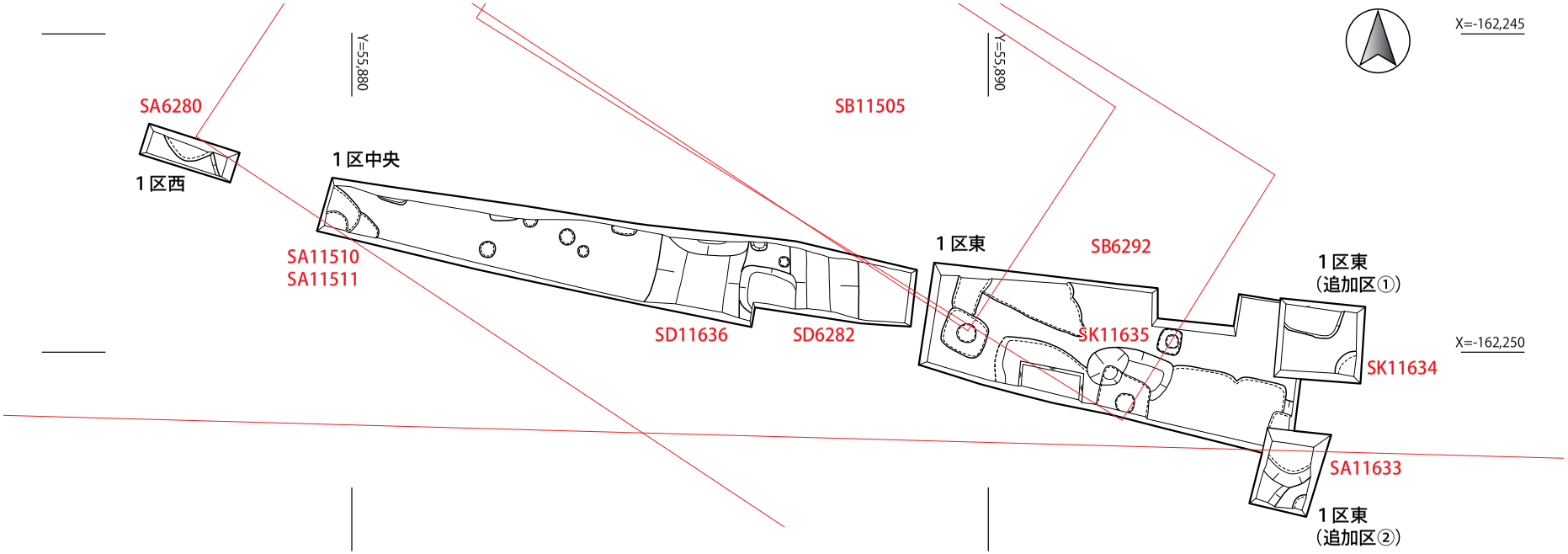
１区東　東西約6.0ｍ、南北は西端で約1.6ｍ、東端で約2.4ｍ。地表面（標高14.1～14.2ｍ）から深さ0.3～0.4ｍ（標高13.8～13.9ｍ）で遺物包含層と遺構面、深さ約0.5ｍ（標高13.7ｍ）で地山面に至る。

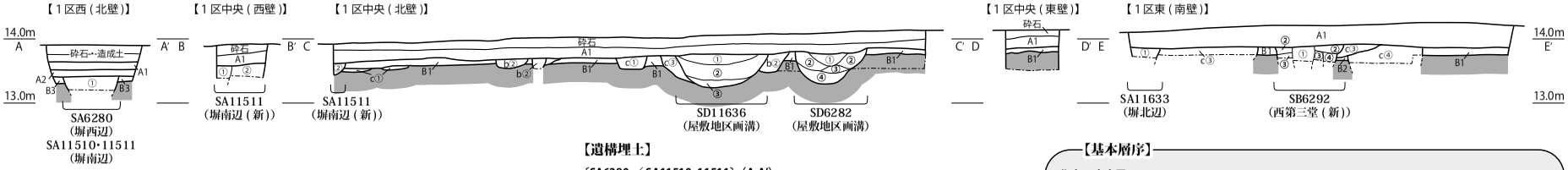


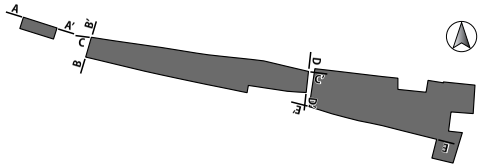
第Ⅱ－１図　第203次調査（１区）グリッド図（1：400）



第Ⅱ－２図　第 203 次調査　調査区位置図（1：2,000）







0　（S=1/100）　5m

【遺構埋土】

〔SA6280／SA11510･11511〕（A-A′）
① 10YR3/3 暗褐色 シルト

〔SA11511（塀南辺（新））〕（B-B′/C-C′）
① 10YR4/1 褐灰色 シルトに 10YR8/2 灰白色 シルトが混じる〔柱抜取穴〕
② 10YR3/1 黒褐色 シルト〔柱掘方〕

〔SD6282〕（C-C′）
① 10YR5/1 褐灰色 シルトに 10YR8/2 灰白色 シルトが混じる
② 10YR5/1 褐灰色 シルト
③ 10YR4/1 褐灰色 シルト
④ 10YR5/1 褐灰色 シルトに 10YR7/4 にぶい黄橙色 シルトが混じる

〔SD11636〕（C-C′）
① 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト
② 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト（砂礫混じる）
③ 10YR5/1 褐灰色 シルト

〔SB6292〕（E-E′）
① 2.5Y8/3 浅黄色 シルト
② 10YR4/2 灰黄褐色 シルト
③ 2.5YR7/1 灰白色 シルト
④ 10YR3/3 暗褐色 シルト

〔SA11633〕（E-E′）
① 10YR4/1 褐灰色 シルトに 10YR8/2 灰白色 シルトが混じる〔柱抜取穴〕

【基本層序】

作土・客土層
A1（作土）　5YR4/2 灰褐色 細粒砂～シルト
A2（客土①）　5YR5/4 にぶい赤褐色 細粒砂～シルト
A3（客土②）　5YR4/3 にぶい赤褐色 細粒砂～シルトに礫含む
A4（客土③）　7.5YR5/4 にぶい褐色 シルトと 7.5YR3/3 暗褐色 シルト（偽礫）による混淆土

遺物包含層
B1（包含層①）　7.5YR3/4 暗褐色 シルトに C 層偽礫・炭化粒が 10% 含む
B2（包含層②）　7.5YR3/4 暗褐色 シルトに C 層偽礫・炭化粒が 30% 含む
B3（包含層③）　7.5YR3/3 暗褐色 シルトに 7.5YR2/2 黒褐色 と C 層の偽礫・炭化粒 10% 含む

地山層
C（地山①）　10YR4/3 にぶい黄褐色 極細粒砂～シルト
D（地山②）　段丘礫主体（C 層含む）
■ 土層図中の基盤層

遺構埋土
a（新相）　7.5YR5/3 にぶい褐色 細粒砂～シルトと 7.5YR5/6 明褐色 シルト（偽礫）の混淆土
b①（新相）　10YR4/3 にぶい黄褐色 細粒砂～シルトに 7.5YR3/3 暗褐色 シルト（偽礫）30% 含む
b②（新相）　7.5YR5/4 にぶい褐色 細粒砂～シルトに 7.5YR6/6 橙色 シルト（偽礫）30% 含む
b③（新相）　7.5YR6/6 橙色 細粒砂～シルトに 7.5YR5/4 にぶい褐色 シルト（偽礫）10% 含む
c①（古相）　7.5YR4/3 褐色 極細粒砂～シルトに 5YR5/6 明赤褐色 シルト（偽礫）5% 含む
c②（古相）　7.5YR4/4 褐色 細粒砂～シルトに 5YR5/6 明赤褐色 シルト（偽礫）10% 含む
c③（古相）　7.5YR5/4 にぶい褐色 シルトに 7.5YR3/3 暗褐色 シルト（偽礫）5% 含む
c④（古相）　7.5YR3/3 暗褐色 シルトに 7.5YR2/2 黒褐色 シルト（偽礫）10% 含む

１区東（追加区①・②） ①東西約1.4ｍ、南北1.2ｍ。②東西約1.0ｍ、南北1.2ｍ。地表面（標高約14.1ｍ）から深さ約0.3ｍ（標高約13.8ｍ）で遺物包含層と遺構面、深さ約0.4ｍ（標高13.7ｍ）で地山面に至る。

地層の把握は、第192・195・199・200次調査での観察所見としつつ、第85-8・193・197次調査で得られた地層の認識を参考とした。基本層序は上から表土（A1層）あるいは砕石層（A2層）、暗灰黄色シルト（耕作土層もしくは整地土層：A3層）、暗褐色シルトもしくは黒褐色シルト（遺物包含層:B層）、地山（C層）からなる。古代・中世の遺構はB層上面から掘り込まれているが、便宜上C層上面で遺構検出を行った。

3　遺構

斎宮跡に関連する古代の検出遺構は、建物柱穴・土坑である。出土遺物はB層中のものが大半であり、弥生土器や７～８世紀とみられる土師器杯・須恵器杯蓋などの破片が出土している。土坑からは完形品をふくむ９世紀前葉～中葉（斎宮Ⅱ-2～Ⅱ-3期）の土師器杯・皿が折り重なって出土した。

重要遺構は１区西、１区中央の西端、１区東で検出した飛鳥時代と奈良時代の建物柱穴である。柱掘方の埋土は黒褐色シルトで、柱痕跡が確認されるもの、それを穿つ明褐色シルトを埋土とする小穴が認められるものがあり、いずれも一辺0.7ｍ以上の平面形が隅丸方形を呈する。柱痕跡や柱抜取穴の存在から掘立柱塀あるいは掘立柱建物の柱穴と想定した。

斎宮跡関連以外の遺構として、鎌倉時代以降の区画溝などがある。なお、第85-8・197次調査などの隣接地で検出された弥生・古墳時代の遺構は、当該調査区では未確認となる。

（1）飛鳥時代の遺構

７世紀後半～８世紀初頭（斎宮Ⅰ-1期）の一本柱列の区画塀や掘立柱建物の柱穴を検出した。これらの柱穴は、飛鳥時代の斎宮中枢域と想定される方形区画（約33°東偏する斜方位区画）を構成する遺構である。検出した柱穴は、区画塀の西辺(SA6280)と南辺（SA11510・11511)、外周建物の脇殿のなかでも西第三堂（SB11505・6292）となる。

SA6280とSA11510・11511は１区西と１区中央（t12･t13･u12･u13)、SB11505・6292は１区東(w13･x13）で検出した。個々の遺構は以下で詳述するとともに、第Ⅱ-3図・第Ⅱ-1・2表にまとめた。

なお、斜方位区画を構成する区画塀や掘立柱建物などの詳細は、既刊の正報告書や概報[(2)]を参照されたい。

SA6280〔区画塀西辺〕 １区西では、斜方位区画の塀南西角の柱穴を検出した。区画塀の西辺(SA6280)と南辺（SA11510・11511）を結んだ南西角の柱穴である。区画塀西辺をみると第85-8・199・200次調査で確認されたその延長線上に相当する。

第199・200次調査の所見から、柱掘方の平面形は隅丸方形を呈し、直径0.8～1.0ｍを測る。柱掘方埋土は黒褐色シルトを主体とする。第85-8・199・200次調査では、布掘り柱掘方（いわゆる溝持ち構造か）が確認され、深さ0.5～0.9ｍ、柱痕跡の直径は約0.2ｍを測ることが判明している。また、布掘り柱掘方は埋め戻され、その上部から壺掘り柱掘方により柱穴を設置しているようである。柱間は2.3ｍを測り、柱穴の抜取穴の状況から概ね同じ位置に１回の建替えを認める。塀北辺SA11300・11120と塀東辺SA11310の構造と異にする特徴があり、こうした工法の違いは西第一・二堂の側柱西筋から塀への転換によるものであろう。この間には、西門SB11501が設けられる。

遺構名	基部構造	建物形式	平面形式	桁行間数 柱間	桁行総長	梁行間数 柱間	梁行総長	平面積	備考	遺構の性格
SA 6280	掘立	一本柱塀	－	1間 2.2～2.4m	57.8m	－	－	－	西辺(飛鳥) Ⅱ期･建替後	遮蔽
SA 11510	掘立	一本柱塀	－	1間 2.3m	38.2m	－	－	－	南辺(飛鳥) Ⅰ期･建替前	
SA 11511	掘立	一本柱塀	－	1間 2.3m	40.8m	－	－	－	南辺(飛鳥) Ⅱ期･建替後	
SA 11633	掘立	一本柱塀	－	1間 2.3m	52.5m	－	－	－	北辺(奈良)	
SB 11505	掘立	側柱	無廂	5間 2.34m	11.7m	2間 2.1m	4.2m	49.1㎡	Ⅰ期･建替前	西第三堂(古)
SB 6292	掘立	床束	無廂	5間 2.34m	11.7m	2間 2.2m	4.4m	51.4㎡	Ⅱ期･建替後	西第三堂(新)

第Ⅱ－１表　第203次調査（１区）　建物等一覧

遺構名	調査時 遺構名	グリッド	時期	出土遺物
SK 11634	ピット	x13	9世紀前～中葉	土師器
SK 11635	土坑1	w13,x13	12世紀後葉～13世紀前葉	土師器･陶器
SD 6282	SD6282(東)	v13	13世紀後葉～	土師器
SD 11636	SD6282(西)	v13	13世紀後葉～	土師器

第Ⅱ－２表　第203次調査（１区）　土坑・溝一覧

第199・200次調査では、SA11510の柱掘方・柱抜取穴から須恵器杯Ｂ、土師器杯Ｇが出土している。廃絶時期の上限は飛鳥Ｖに位置付けられ、７世紀末～８世紀初頭に属するとみられる。今回の第203次調査（１区）では遺物の出土はみられなかった。

SA11510・11511〔区画塀南辺〕　１区中央の西端で重複する２つの柱穴を検出した。斜方位区画の掘立柱塀南辺（SA11510・11511）である。南西角の柱穴とそれから東へ１つ目の柱穴のみの検出であり、後者は柱穴２基の重複を認めるため１回の建替えが推定される。飛鳥斎宮Ⅰ期遺構をSA11510、Ⅱ期遺構をSA11511と遺構番号を付与した。１区西で確認した南西角の柱穴は建替えを伴わない特徴があり、北西角の柱穴とともに方形区画造営の基点であった可能性が考えられる。

SB6292〔西第三堂（新）〕　１区東で検出した桁行５間×梁行２間（11.7ｍ×4.4ｍ）の東西棟の掘立柱建物である。SB11505の建替え後の建物で、飛鳥斎宮Ⅱ期遺構に相当する。SB11505から南側柱の位置は変えず、東へ約2.4ｍずらした位置に建替えられる。梁行が0.2ｍ長くなる分は北へ広げている。東妻柱中央の両脇には束柱が設置されている。

SB11505〔西第三堂（古）〕　１区東で検出した桁行５間×梁行２間（11.7ｍ×4.2ｍ）の東西棟の掘立柱建物である。西側妻柱には連結塀が取り付くとみられる。

（２）奈良時代の遺構

１区東（追加区②）で西正方位区画の塀北辺の柱穴を検出した。第189次調査で確認された塀北辺の延長線上に相当する。概報[3]ではSA9472と記されたが、第146・182-1・189次調査で確認された塀東辺とし、今回の塀北辺についてはSA11633と新たに遺構番号を付与した。

SA11633〔区画塀北辺〕　１区東追加区②で検出した掘立柱塀の柱穴である。平面形は直径約1.2ｍの隅丸方形を呈する。深さは地山面から約0.3ｍを測る。黒褐色シルトを埋土とする柱掘方に明褐色シルトの入る柱抜取穴が上部より穿たれる。土師器片の出土はあったが、図化できるものはなかった。

（３）平安時代前期の遺構

１区東追加区①では、９世紀前葉～中葉（斎宮Ⅱ-2～Ⅱ-3期）の土坑SK11634を検出した。

SK11634〔土器溜まり〕　平面形の全容は不明であるが、おそらく直径0.6ｍ程度の円形と推測される。深さは地山面から約0.15ｍを測り、明黄褐色シルトを埋土とする。完形品をふくむ土師器杯・皿が折り重なって出土した（第Ⅱ-4図）。

（４）平安時代末～鎌倉時代前期の遺構

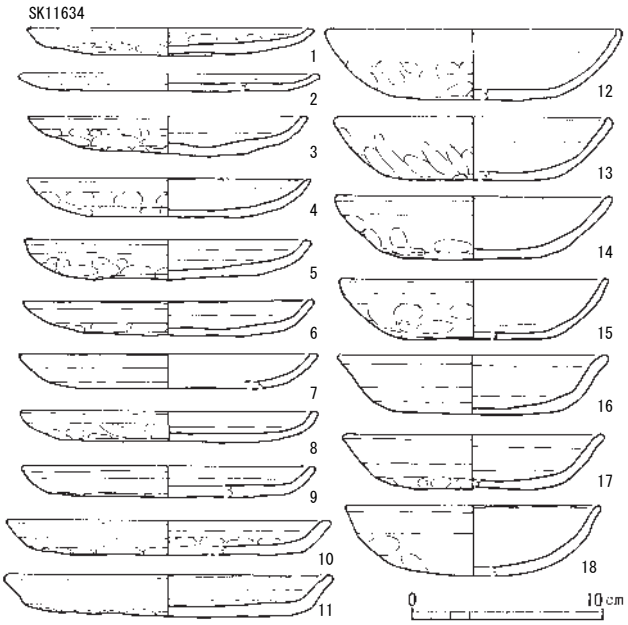
１区西では、12世紀後葉～13世紀前葉（斎宮Ⅳ-1期）の土坑SK11635、13世紀後葉（斎宮Ⅳ-3）の溝SD11636を検出した。なお、鎌倉時代以降の遺構は、周辺の調査区でも数多く確認されている。

SK11635〔陶器甕埋設土坑〕　平面形は直径約0.7ｍの不整円形を呈し、深さは約0.2ｍを測る。明黄褐シルトを埋土とする。土坑からは常滑産陶器甕が出土した（第Ⅱ-5図）。出土状況から陶器甕の底部から胴部下半までを土坑底に据えて埋置していたと推定される。

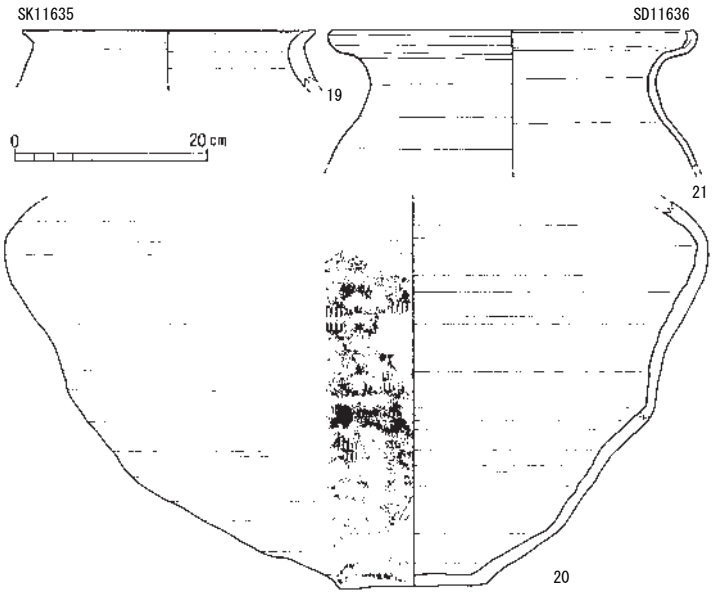
SD11636〔屋敷地区画溝〕　１区中央東端で検出した幅約1.1ｍの南北方向の溝は、第85-8次調査のSD6282の延伸部分である。その西隣に併走する幅約1.4ｍの溝SD11636は、第85-8次調査のSD6282より分岐する溝である。13世紀後葉以降の所産で、屋敷地などの土地区画や排水機能をもつ溝と推定される。土師器鍋（南伊勢系）の口縁部～胴部片が出土した（第Ⅱ-5図）。

4　遺物

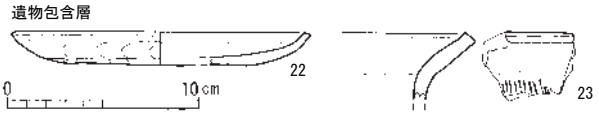
遺物整理用コンテナ５箱分の遺物が出土し、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、近世陶磁があった。遺構番号順で時代ごとに詳述する（第Ⅱ-4～6図）。



第Ⅱ－４図　第203次調査（１区）　出土遺物実測図１（1：4）



第Ⅱ－５図　第 203 次調査（１区）
出土遺物実測図２（1：8）



第Ⅱ－６図　第 203 次調査（１区）
出土遺物実測図３（1：4）

（１）平安時代の遺物（第Ⅱ -4 図）

SK11634 出土遺物（１～18）　１～11 は土師器皿、12 ～ 18 は土師器杯Ｇである。皿は器高２㎝以内で、口径 15 ㎝前後と 17 ㎝前後の２種がある。杯Ｇは口径14㎝前後、器高４㎝以内にいずれも収まる。９世紀前葉～中葉（斎宮Ⅱ -2 ～Ⅱ -3 期）に属する。

（２）鎌倉時代の遺物（第Ⅱ -5 図）

SK11635 出土遺物（19 ～ 21）　19 は常滑産陶器甕の口縁部、20 は 19 と同一個体と考えられる胴部～底部片である。胴部最大径付近の外面には帯状連続施文した押印文を施す。19 の口縁部形態と 20 の胴部形状から 12 世紀後葉～ 13 世紀前葉の所産とみられる。21 は南伊勢系土師器鍋の口縁部～胴部片である。13 世紀後葉の所産とみられる。

（３）遺物包含層（第Ⅱ -6 図）

遺物包含層出土遺物（22・23）　22 は土師器皿、23 は土師器甕である。22 はおそらく SK11634 からの出土と推測される。

番号	器種	器形	調査次数	地区 遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	土師器	皿	203(1区)	1区東(追加区①) SK11634	口径 14.6 器高 1.4	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ・オサエ	密	良	橙5YR7/6	口縁部9/12		002-02
2	土師器	皿	203(1区)	1区東(追加区①) SK11634	口径 15.4 器高 0.9	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部2/12		003-03
3	土師器	皿	203(1区)	1区東(追加区①) SK11634	口径 14.6 器高 2.0	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ・オサエ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部10/12	内・外面:黒色物付着	001-03
4	土師器	皿	203(1区)	1区東(追加区①) SK11634	口径 14.8 器高 2.0	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部3/12		002-08
5	土師器	皿	203(1区)	1区東(追加区①) SK11634	口径 15.0 器高 2.1	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙5YR7/6	完形	内・外面:黒色物付着	001-01
6	土師器	皿	203(1区)	1区東(追加区①) SK11634	口径 15.2 器高 1.9	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ・オサエ	密	良	橙5YR7/6	口縁部9/12		002-01
7	土師器	皿	203(1区)	1区東(追加区①) SK11634	口径 15.2 残存高 1.8	外面:ヨコナデ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙5YR7/6	口縁部2/12		002-03
8	土師器	皿	203(1区)	1区東(追加区①) SK11634	口径 15.6 器高 1.6	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙5YR7/6	口縁部10/12		001-08
9	土師器	皿	203(1区)	1区東(追加区①) SK11634	口径 15.2 器高 1.6	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部3/12		003-02
10	土師器	皿	203(1区)	1区東(追加区①) SK11634	口径 16.6 器高 1.8	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ・オサエ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部6/12		001-04
11	土師器	皿	203(1区)	1区東(追加区①) SK11634	口径 16.8 器高 2.2	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙5YR7/6	口縁部9/12	内・外面:黒色物付着	001-05
12	土師器	杯	203(1区)	1区東(追加区①) SK11634	口径 15.2 器高 3.7	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部4/12		002-06
13	土師器	杯	203(1区)	1区東(追加区①) SK11634	口径 14.4 器高 3.3	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部7/12		001-07
14	土師器	杯	203(1区)	1区東(追加区①) SK11634	口径 14.4 器高 3.3	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙5YR7/6	口縁部12/12		001-06
15	土師器	杯	203(1区)	1区東(追加区①) SK11634	口径 13.8 残存高 3.2	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙5YR7/6	口縁部9/12	口縁部:煤付着	002-04
16	土師器	杯	203(1区)	1区東(追加区①) SK11634	口径 14.2 器高 3.1	外面:ヨコナデ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	ほぼ完形	内面:黒色物付着	001-02
17	土師器	杯	203(1区)	1区東(追加区①) SK11634	口径 13.4 残存高 2.9	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ナデ	密	良	橙5YR7/6	口縁部5/12		002-05
18	土師器	椀	203(1区)	1区東(追加区①) SK11634	口径 13.4 器高 3.7	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部4/12	外面:煤付着	002-07
19	陶器	甕	203(1区)	1区東 SK11635	口径 30.0 残存高 6.1	外面:ナデ・施釉 内面:ヨコナデ・施釉	密	良	釉:754栗梅 素地:浅黄橙10YR8/4	口縁部1/12		005-01
20	陶器	甕	203(1区)	1区東 SK11635	底径 15.6 残存高 40.3	外面:ナデ・押印文・施釉 内面:ナデ	密	良	釉:754栗梅 素地:にぶい黄橙10YR7/4	底部12/12		006-01
21	土師器	甕	203(1区)	1区中央 SK11636	口径 37.8 残存高 14.4	外面:ヨコナデ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12	外面:煤付着	004-01
22	土師器	皿	203(1区)	1区東(追加区①) 包含層	口径 15.2 器高 1.7	外面:ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部1/12		002-09
23	土師器	甕	203(1区)	1区東(追加区②) 包含層	残存高 3.5	外面:ヨコナデ・タテハケ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	口縁部1/12		003-01

第Ⅱ－３表　第 203 次調査（１区）　遺物観察表

5　まとめ

（1）飛鳥時代遺構の様相

今回の調査では、飛鳥時代の斜方位区画の南西角と南辺の掘立柱塀、掘立柱建物の柱穴を検出した。塀と建物の柱穴は、一辺約0.7ｍの平面形が隅丸方形を呈し、柱抜取穴が穿たれている。１区中央・東の柱穴の配置をみるとSB6292の一部に復元できる。斜方位区画内の脇殿に相当する殿舎（西第三堂）に比定され、桁行５間×梁行２間（11.7ｍ×4.4ｍ）の東西棟の掘立柱建物と推定される（第Ⅱ-7図）。

これにより、飛鳥時代の斜方位区画内には中心建物（正殿）と外周建物（東・西脇殿各３棟）がロ字型の建物配置をとることが判明した。区画塀の南辺の柱穴２基は重複していることから、建替えによる２段階変遷（飛鳥斎宮Ⅰ期・Ⅱ期）を追認できる。

斜方位区画は、飛鳥斎宮Ⅰ期で東西長約38.2ｍ×南北長約58.4ｍ（唐尺換算で130尺×200尺）、Ⅱ期で東西長約40.8ｍ×南北長約58.4ｍ（140尺×200尺）の規模となる（第Ⅱ-8図）。これを飛鳥時代の斎王宮殿域と想定している。

（2）奈良時代遺構の様相

SA11633を構成する柱穴を検出したことによって、第189次調査で推定された西正方位区画北辺の延伸状況が認められた。第146・182-1・189次調査の区画塀東辺、第146次調査の南辺、第58-4次調査の西辺を復元すると、西正方位区画は東西長約52.5ｍ×南北長約58.5ｍ（唐尺換算で180尺×200尺）の規模をもつ（第Ⅱ-9図）。これを奈良時代の斎王宮殿域と想定している。

（3）平安時代遺構の様相

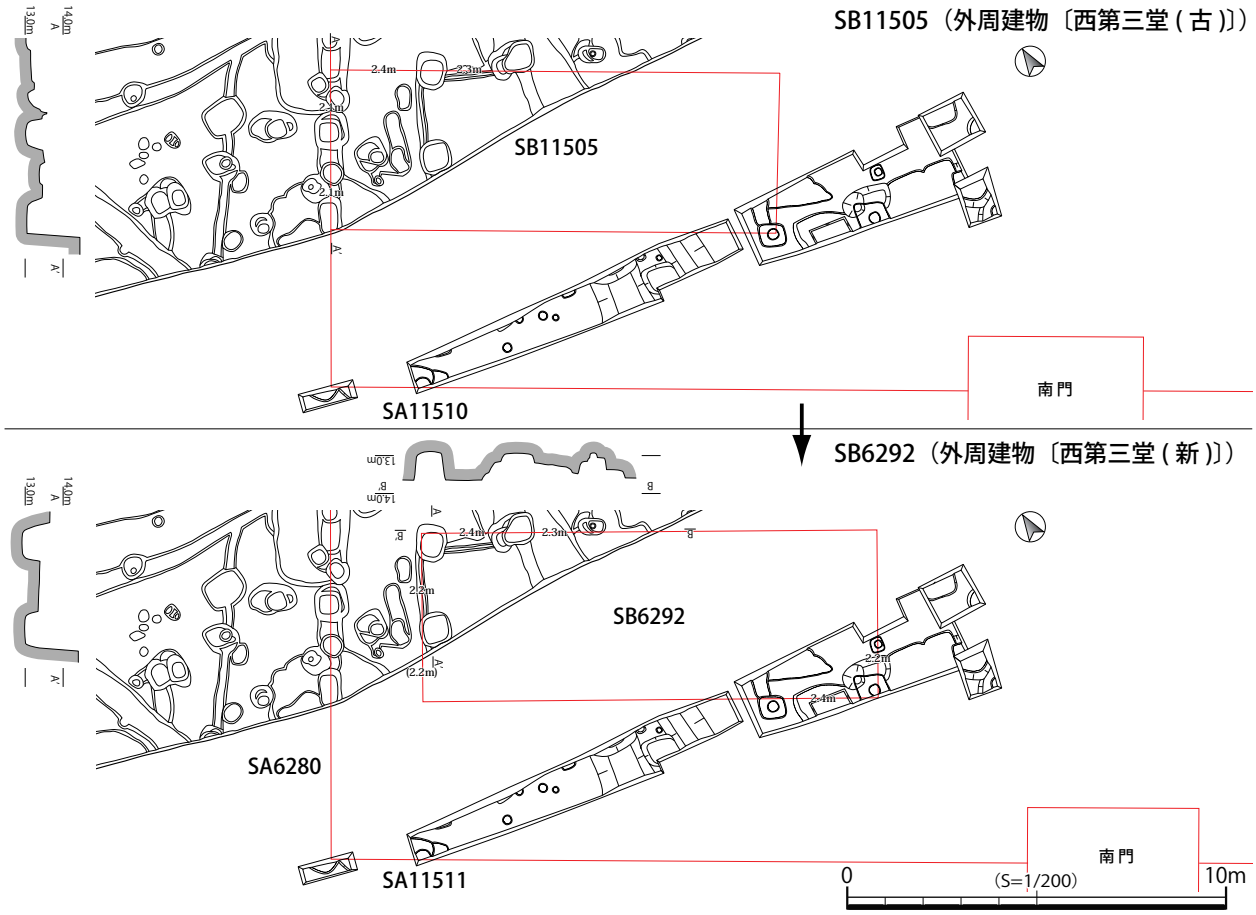
SK11634出土土器は、奈良時代の西正方位区画が廃絶した後の土地利用を示す資料となる。平安時代の方形区画と概ね同様の時期の所産であり、この施設に関連した遺構・遺物とみられる。

註

（1）斎宮歴史博物館 2023『斎宮跡発掘調査報告Ⅴ　飛鳥時代の斎宮中枢域の調査』

（2）斎宮歴史博物館 2018 ～ 2023『史跡斎宮跡　平成28年度～令和３年度発掘調査概報』

（3）斎宮歴史博物館 2018『史跡斎宮跡　平成28年度発掘調査概報』



第Ⅱ－７図　斜方位区画の西第三堂の変遷図（1：200）

第Ⅱ－８図　飛鳥時代の斎王宮殿域の遺構配置図（1：600）

第Ⅱ－９図　奈良時代の斎王宮殿域の遺構配置図（1：600）

写真図版１　第 203 次調査〔１区〕

斜方位区画南西角の柱穴（東から）

斜方位区画の塀南辺 SA11510･11511（西から）

斜方位区画の西第三堂 SB6292･SB11505（西から）

１区東追加区①･②　左：SA11633　右：SK11634（東から）

西正方位区画の塀北辺 SA11633（東から）

Ⅲ　第203次調査（２区）

（６ＡＧ10 中垣内地区）

１　はじめに

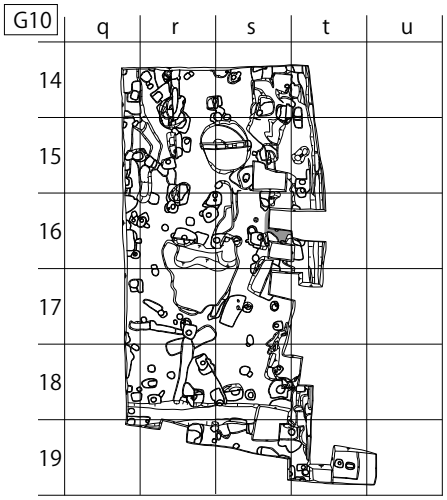
史跡西部の段丘縁辺には、古代伊勢道を基点として南北へ派生する道路が敷設され、その南北道路沿いに飛鳥～奈良時代の掘立柱建物・竪穴建物の分布が確認されている。特に古代伊勢道の南では、掘立柱塀による方形区画が複数箇所で確認されている。

飛鳥時代は、古代伊勢道から南へ派生する直線道路の敷設軸に合わせた方位の掘立柱塀による二段階の方形区画が確認されている。方形区画はN33°Ｅの方位で、東西幅は第Ⅰ期は約38.2ｍ・第Ⅱ期は約40.8ｍ、南北は二段階とも西辺で約57.8ｍ、東辺で約59ｍの規模をもつ。区画内部は北部中央に５間×２間で南北に廂を持つ東西棟の掘立柱建物をはさんで東西に、６間×２間の南北棟掘立柱建物が南北に２棟ずつ並び、その南には東西棟の掘立柱建物が存在すると想定されている。また、方形区画の西側、段丘縁には複数回の建替えを伴う大型総柱建物群を確認しており、方形区画に伴う倉院と位置付けられる。

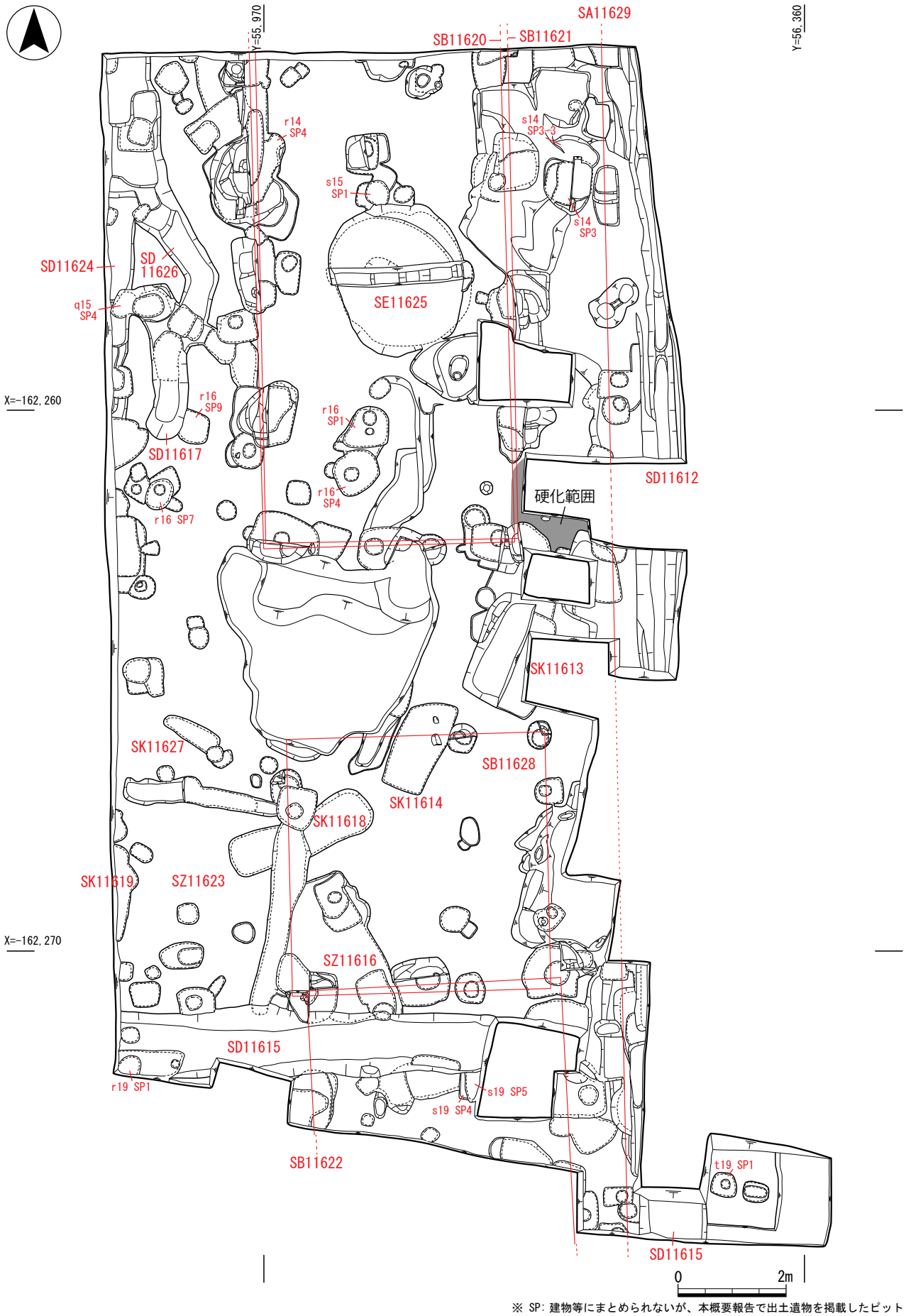
奈良時代には、正方位を志向する掘立柱塀をめぐらす方形の空間整備が施され、その正方位区画が東西に並ぶことからそれぞれ「東正方位区画」「西正方位区画」としている。西正方位区画は昭和60年度第58－４次調査において南北に並ぶ方形土坑、そしてその東側にも柱穴が確認されていた。その後、第58－４次調査地の南において平成17年度第146次調査を実施、前調査で確認した西側の柱穴の続きに対応する柱穴が確認された。また、第146次調査では東部にも調査区を設定して調査を実施、南北方向の掘立柱列の柱穴とその柱列が西へ折れることを確認、方形区画の南東角に当たることがわかった。その後、平成28年度第189次調査において、第146次調査東部の調査区で確認した南北方向掘立柱列の延長と、その柱列と組み合う東西方向の掘立柱列を確認したことからこの地点が方形区画の北東角に当たり、この西正方位区画は南北58.5ｍの規模を測ることが確定された。

それに対して東正方位区画は、平成５年第100次調査において東西方向の重複する掘立柱列が確認され、正方位を志向することから奈良時代以降の区画の存在が想定された。その後平成16年第144次調査ではその100次調査の東側を掘削、柱列の延長を確認したが、100次調査で想定された４条の柱列と対応する柱が確認できないことから、３条の柱列が復元された。第146次調査では、第144次調査の南、近鉄線南沿いを調査したところ東西方向の柱列を確認、南北55.5ｍの区画が存在が想定された。その後前述の第189次調査において２条の柱列を確認、これが東正方位区画の西辺であり、第100次調査で確認していた柱穴と合わせて柱列の内部に南北棟の掘立柱建物の存在を明らかにした。第100次調査の西接した範囲を対象とした令和元年度第197次調査では、第100次調査の東西方向の柱列の延長を確認、また、区画の北西角を確認し、東正方位区画の掘立柱列による区画は２回の建替えを経て、３段階であることを明らかにした。

第203次（２区）調査地は、史跡西部の中垣内地区に所在する。斎宮段丘面（段丘中位面）の段丘崖から東へ約130ｍの地点に位置し、発掘調査前は畑

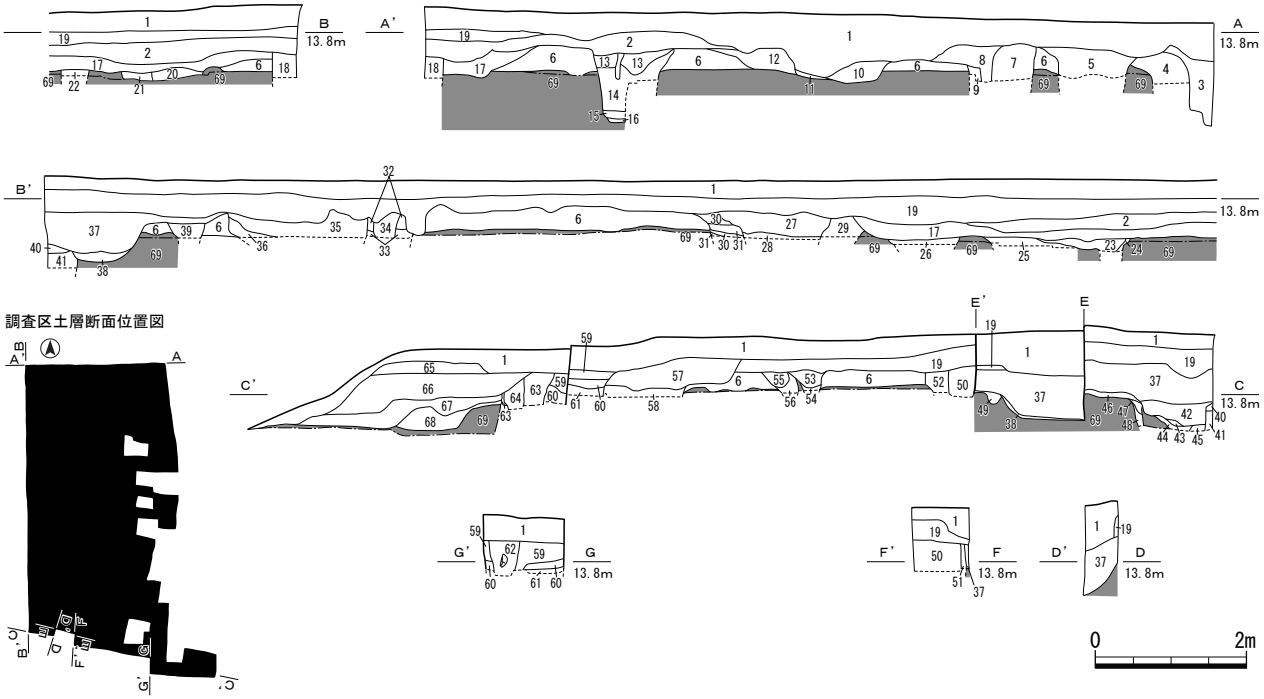


第Ⅲ－１図　第203次調査（２区）グリッド図



※ SP: 建物等にまとめられないが、本概要報告で出土遺物を掲載したピット

第Ⅲ－２図　第 203 次調査（２区）遺構平面図（1：100）



〈土層注記〉

1　アスファルト舗装下の栗石含む　【表土】
2　10YR3/4暗褐色シルトに円礫（径～5.0cm）が層状に入る　【SD11624】
3　10YR3/4暗褐色シルトに円礫（径～10cm）が３層上面から10cm下までの間に多く含む　【SD11612】
4　10YR3/3暗褐色シルト　【t14 SP1】
5　10YR3/3暗褐色シルトに2.5Y5/3黄褐色シルトブロック（径～5.0cm）を20%、7.5YR5/4にぶい褐色シルトブロック（径～3.0cm）を20%、10YR2/2黒褐色シルトブロック（径～1.0cm）を10%含む　【s14 SP4】
6　10YR2/1黒色シルト　【遺物包含層】
7　10YR3/3暗褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルトブロック（径～1.5cm）を20%、2.5Y6/4にぶい黄色シルトブロック（径～3.0cm）を20%、7.5YR5/6明褐色シルトブロック（径～2.0cm）を10%含む
8　10YR3/3暗褐色シルトに土師器細片を５%含む。７層ほどブロックの混じりなし　【s14 SP6 柱抜取】
9　10YR2/2黒褐色シルトに10YR3/4暗褐色シルトブロック（径～2.0cm）を５%含む　【s14 SP11】
10　10YR2/3黒褐色シルトに10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック（径～2.0cm）を５%含む
11　10YR3/3暗褐色シルトに10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック（径～2.0cm）を５%含む　【s14 SP７】
12　10YR3/4暗褐色シルト　【平安までの遺構か】
13　10YR3/3暗褐色シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルト・10YR6/8明黄褐色シルト（地山由来）・10YR2/2黒褐色シルトをそれぞれ径～1.0cm大の粒状で30%含む
14　10YR3/3暗褐色シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルト・10YR6/8明黄褐色シルト（地山由来）・10YR2/2黒褐色シルトをそれぞれブロック状（径～3.0cm）で30%含む　【SB11621 柱穴１ 柱抜取】
15　10YR3/4暗褐色シルトに10YR6/8明黄褐色シルトブロック（径～5.0cm）を40%含む　【SB11621 柱穴１ 掘方】
16　10YR3/4暗褐色シルト
17　10YR3/3暗褐色シルト　【SD11624】
18　10YR2/3黒褐色シルト
19　10YR3/4暗褐色シルト
20　10YR3/3暗褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルトブロック（径～5.0cm）を20%、7.5YR5/6明褐色シルト粒（径～0.5cm）を10%含む
21　10YR3/3暗褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルトブロック（径～3.0cm）を10%、7.5YR5/6明褐色シルト粒（径～0.5cm）を５%含む　【SD11624下の土坑状落ち込み】
22　10YR2/3黒褐色シルトに7.5YR5/6明褐色シルト粒（径～0.5cm）を５%含む　【q15ピット】
23　10YR3/3暗褐色シルトに円礫（径～10cm）を10%含む　【q15 SP１】
24　10YR3/4暗褐色シルト　【q15 SP４】
25　10YR3/3暗褐色シルトに10YR4/4褐色シルトブロック（径～2.0cm）を１%含む　【q15 SP２】
26　10YR2/3黒褐色シルト　【q16 SP５】
27　10YR3/3暗褐色シルトに2.5Y5/4黄褐色シルト粒（径～1.0cm）を５%含む
28　2.5Y5/4黄褐色シルト　【q16 SP３ 柱抜取】
29　10YR3/3暗褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルト粒（径～0.5cm）を５%、7.5YR5/6明褐色シルト粒（径～0.3cm）を５%含む　【q16 SP３北ピット】
30　10YR3/3暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック（径～2.0cm）を10%含む
31　10YR2/3黒褐色シルト　【q16 SP３ 掘方】
32　10YR2/3黒褐色シルト
33　10YR2/3黒褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック（径～2.0cm）を20%含む　【q17 SP１ 掘方】
34　10YR3/3暗褐色シルト　【q17 SP１ 柱痕跡】
35　10YR2/2黒褐色シルト
36　10YR3/4暗褐色シルトに10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック（径～3.0cm）を20%含む　【SK11619】
37　10YR3/4暗褐色シルトに円礫（径～10cm）を１%含む
38　10YR3/4暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック（径～5.0cm）を20%含む　【SD11615】
39　10YR2/3暗褐色シルトに礫（径～0.5cm）を５%含む　【r18 SP４】
40　10YR2/2黒褐色シルト
41　10YR3/4暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック（径～1.5cm）を20%含む　【r19 SP１ 掘方】
42　10YR2/3黒褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック（径～2.0cm）を５%、10YR3/4暗褐色シルトブロック（径～2.0cm）を５%含む
43　10YR5/6黄褐色シルトに10YR3/4暗褐色シルトを50%含む　【r19 SP１ 柱抜取か】
44　10YR2/3黒褐色シルト
45　10YR2/3黒褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック（径～3.0cm）を20%含む
46　10YR3/2黒褐色シルトに10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック（径～2.0cm）を５%含む
47　10YR3/3暗褐色シルトに10YR4/4褐色シルトブロック（径～1.5cm）を５%含む
48　10YR2/1黒色シルト　【ピットか】
49　10YR3/4暗褐色シルト
50　10YR3/3暗褐色シルトに2.5Y5/3黄褐色シルトブロック（径～2.0cm）を10%含む　【SB11622柱穴１ 柱抜取】
51　10YR3/3暗褐色シルト
52　10YR3/4暗褐色シルトに10YR6/6明黄褐色シルトブロック（径～2.0cm）を20%含む　【SB11622柱穴１ 掘方】
53　10YR3/4暗褐色シルトに2.5Y6/4にぶい黄色シルトブロック（径～5.0cm）を10%含む
54　10YR2/3黒褐色シルトに10YR3/4暗褐色シルトブロック（径～3.0cm）を５%含む
55　10YR3/4暗褐色シルトに7.5YR5/6明褐色シルトブロック（径～5.0cm）が層状に入る
56　10YR2/3黒褐色シルト　【s19ピット】
57　10YR3/3暗褐色シルトに2.5Y6/4にぶい黄色シルトブロック（径～2.0cm）を10%含む
58　10YR3/3暗褐色シルトに2.5Y6/4にぶい黄色シルト粒（径～0.5cm）を10%、10YR5/6黄褐色シルト粒（径～0.5cm）を10%含む　【s19 SP１・SP２】
59　10YR3/3暗褐色シルトに10YR6/6明黄褐色シルトブロック（径～5.0cm）を10%含む
60　10YR2/3黒褐色シルト
61　10YR3/4暗褐色シルトに7.5YR5/6明褐色シルトブロック（径～3.0cm）を５%含む　【SB11622柱穴６ 掘方】
62　10YR3/4暗褐色シルト　【SB11622 柱穴６ 柱抜取】
63　10YR3/4暗褐色シルトに黄色粒10%、白色粒10%含む　【t19 SP４ 掘方】
64　10YR3/4暗褐色シルト　【t19 SP４ 柱痕跡】
65　10YR5/6褐色シルト
66　10YR2/3黒褐色シルト　【線路に伴う置き土か 硬く転圧される】
67　10YR3/4暗褐色シルトに円礫（径～10cm）を50%含む
68　10YR3/4暗褐色シルト　【SD11615】
69　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　【地山】

第Ⅲ－３図　第 203 次調査（２区）　調査区土層断面図（1：100）

地として土地利用されている。第144次調査地の町道を挟んだ南、近鉄線までの範囲を調査地として、東正方位区画の東西規模と、区画内部構造を明らかにすることを目的として調査を実施した。

これらの調査成果を受けて、東正方位区画の東西規模及び内部構造を明らかにすることを目的として第203次調査（２区）を実施した。調査期間は令和４年10月７日～令和５年３月17日、調査面積は200㎡であった。

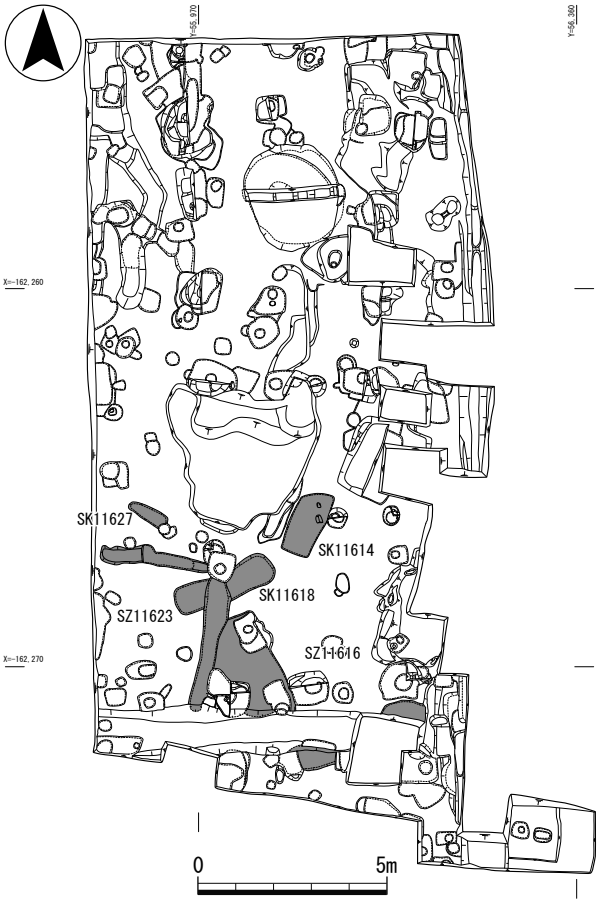
2　地形環境と地層

史跡斎宮跡は、紀伊山地に端を発する櫛田川（祓川）・宮川の下流域に挟まれた明野原台地の西方に位置する。後背の玉城丘陵・大仏山丘陵を基点として、そこから北へ段丘高位面（明野段丘面）、段丘中位面（斎宮段丘面）の順に地形は下降し、東西に広がる沖積低地（海岸平野・氾濫平野・三角州・後背低地）を介して、伊勢湾へと連なる。史跡斎宮跡は、段丘中位面（斎宮段丘面）に立地し、史跡西域の段丘南西部を最高所（標高14.５m程度）として、全体に東北東に向けて緩やかに下へ傾斜し、史跡の東域では標高９m程度となる。傾斜角度は１°にも達しないほどの平坦な地盤を形成している。

第203次（２区）調査地は段丘西縁に位置し、現況が畑地の平坦面で、約14mの標高を測る。基本層序は上から、耕作土、遺物包含層、地山となり、地山面までの深度は北端で約0.8m、南端で約0.7m、西端で約0.7m、東端で約0.6mを測る。調査区東側には昭和30年頃まで住民の通行に利用された赤道が走り、特に調査区南東部の拡張部分においては、その赤道上に堆積する腐植土を除去するとすぐに地山面に達する。遺構の大半は遺物包含層の上面から掘り込んでいるが、遺物包含層と遺構埋土の砕屑物構成・色調が似ており、遺物包含層面での遺構検出は困難のため、地山直上で遺構精査を行った。

3　遺構

調査の結果、弥生・飛鳥・奈良・平安時代、平安末～鎌倉時代、近世の各種遺構を検出した。以下、



第Ⅲ－４図　第203次調査（２区）
弥生時代遺構分布図（1：200）

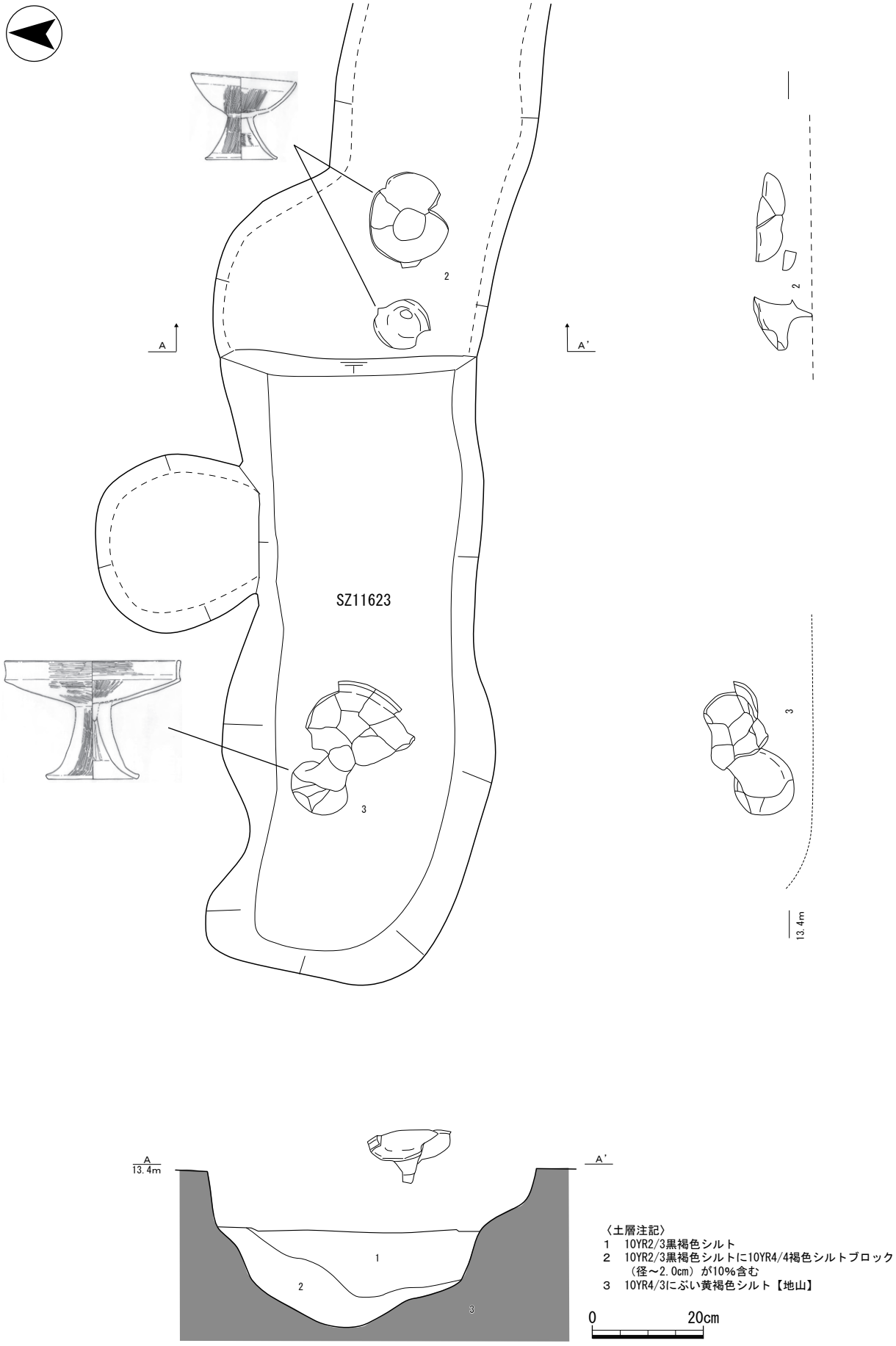
検出遺構について時代毎に概観するが、遺構の全体・詳細は第Ⅲ－１・２表にまとめている。

（1）弥生時代

弥生時代中期中葉～後葉の方形周溝墓１基・土坑２基、後期後葉の方形周溝墓１基を確認した。

ＳＺ11616　調査区南部で確認した。墳墓中央に後世のＳＤ11615が掘削されているため全容は不明確であるが、西周溝と南周溝の一部を確認している。墓主軸はＮ25°Ｗである。墓規模は周溝芯々間で南北約4.2m以上・東西約４m以上である。検出面からの深さは、ＳＤ11615の溝北肩部で確認して0.32mである。周溝幅は、西周溝は最大部で1.94m、南周溝は0.7m以上である。出土遺物は弥生土器の細片が僅かに見られるが、図化できるものはない。

ＳＺ11623　調査区南西部で確認した。西周溝は調査区内では確認できていない。墓主軸はＮ８°Ｅである。南周溝は確認できず、ＳＤ11615に重複すると思われる。また、東周溝はＳＺ11616の西周溝に



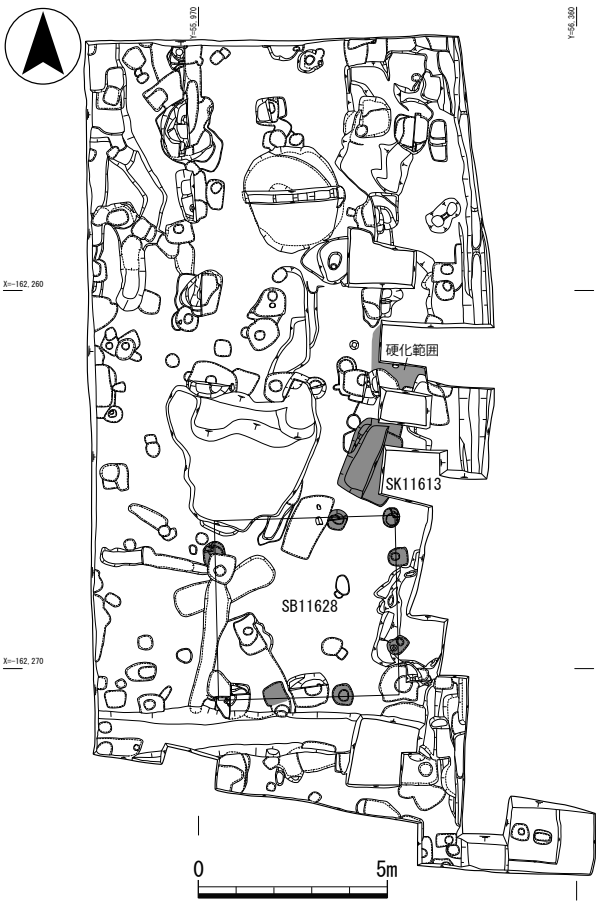
第Ⅲ－５図　ＳＺ11623 土器出土状況図（1：10）

重複し、平面観察からＳＺ11623東周溝が後に掘削されたものと判断した。墓規模は周溝芯々間で南北4.2ｍ以上、東西2.8ｍ以上である。検出面からの深さは周溝北辺中央付近で0.23ｍである。北周溝で弥生土器高杯（２・３）が約60㎝離れ、溝底面から約10㎝上面で出土した。（第Ⅲ－５図）

ＳＫ11614　調査区中央付近で確認した。長軸1.75ｍ・短軸9.0ｍ、完掘していないが、検出面からの深さは６㎝以上を測る隅丸長方形の土坑である。主軸はＮ21°Ｅである。遺構精査段階から長さ10㎝と20㎝程の石を確認している。出土遺物には弥生土器鉢と思われる口縁部片（４）が出土している。

ＳＫ11618　調査区南部、ＳＺ11623東周溝に重複する土坑である。規模は、長軸2.75ｍ・短軸0.85ｍで、完掘していないが検出面からの深さは６㎝以上である。長軸方向はＮ66°Ｅである。出土遺物は弥生土器細片が僅かに出土する。

ＳＫ11627　調査区南西部で確認した土坑である。長軸1.1ｍ・短軸0.4ｍで、検出面からの深さは13㎝程度と浅い。長軸方向はＮ60°Ｗほどである。出土遺物には弥生土器壺（５）がある。



第Ⅲ－６図　第203次調査（２区）
古墳時代～飛鳥時代遺構分布図（1：200）

（２）飛鳥時代

土坑１基、掘立柱建物１棟を確認した。

ＳＫ11613（第Ⅲ－７図）　調査区中央東部で確認した隅丸長方形の土坑である。一部が立木のため掘削できていない。規模は、長軸2.2ｍ・短軸約1.4ｍ、検出面からの深さは0.6ｍを測る断面箱型状を呈する。主軸は長軸方向で見るとＮ22°Ｅである。土層断面の観察から、掘削後に埋没した後、再度掘り直しをしているようであるが、この遺構の用途は不明である。

遺構検出中に須恵器杯蓋（６）が出土したが最終埋土からの出土であり、これよりも下がる段階の遺構である可能性はぬぐえないが、その他須恵器壺口縁部（７）や細片のため図化していない遺物などに飛鳥時代より新しい時期の遺物が含まれないことから、おおよそこの段階とみてよいのではないか。

ＳＢ11628（第Ⅲ－６図）　調査区中央付近で確認した掘立柱建物である。西側柱列が確認できず、南北方向柱列も北側柱列と南側柱列の柱位置が相対しないが、東西３間（4.8ｍ）×南北３間（4.3ｍ）、面積20.64㎡の規模に復元できる。建物主軸はＮ１°Ｗとほぼ北を志向する。北東隅柱から反時計回りに柱穴１、２と番号を付した。北西隅柱とその東側の柱は近代以降の掘削が及び、南西・南東隅柱もＳＢ11622の掘削により確認できなかった。さらに西側に柱が伸びる可能性も検討したが、対応する柱が調査区内では確認できなかったことから、西柱列は遺構の重複部分にあると想定し、３間×３間として復元した。建物の時期は、南西・南東隅柱が奈良時代の建物であるＳＢ11622の柱穴と重複していることから、これよりも古い段階の建物と考えられる。出土遺物は、柱穴７出土の須恵器杯（24）が飛鳥Ⅲ併行期の遺物であるが、取り上げ時に掘方もしくは柱痕跡からの出土か確認していないが、先ほどのＳＢ11622との重複関係も考えあわせ、ＳＢ11628の年代は遡っても7世紀中～後半、下っても８世紀初めと言える。

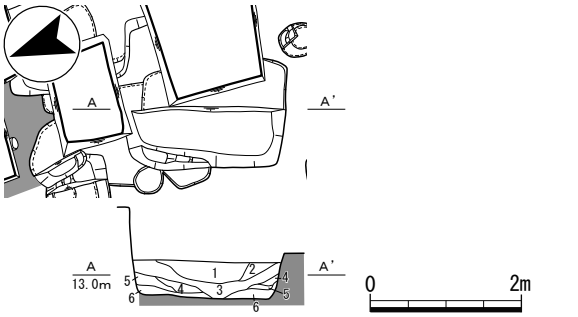
（３）奈良時代～平安時代前期

南北棟の掘立柱建物２棟（うち１棟は建て替えあり）、南北方向の掘立柱塀１条以上を確認した。このうち建て替えを伴う掘立柱建物は、建て替えが平安時代前期となる可能性がある。

ＳＢ11620・11621（第Ⅲ－11図）　調査区北部で確認した南北棟の掘立柱建物である。一度の建て替えが行われたことが、柱穴３・４・６・７・９の土層断面、柱穴10の平面観察で確認できる。いずれの段階の掘立柱建物においても北側柱列は当調査区内には確認できず、第144次調査で確認された柱穴がそれに対応すると見られる。しかしながら、第144次調査では平面での柱穴の重複状況が確認できないため、当調査で確認した２段階の掘立柱建物いずれの段階の北側柱列か、もしくは２段階ともほぼ同位置で北側柱列が位置したかは判断できない。仮に、第144次調査の柱列が２段階ともに対応するとし、当調査で確認した部分の柱間を当てはめると現町道下に３カ所分の柱があると考えられる。

最初の建物はＳＢ11620で、８間（約15.6ｍ）×２間（4.4ｍ）、面積68.64㎡に復元できる。建物主軸方向はＮ２°Ｗである。柱穴２において柱掘方の一部（第Ⅲ－11図Ｂ－Ｂ´）を、柱掘方の形状は柱穴３（西側柱）・柱穴10（東側柱）は方形を志向するようであるが、それ以外は第二段階のＳＢ11621により不明である。柱抜取は、平面観察であるが柱穴８においては行われていると判断できる。柱間は2.2～2.9ｍで等間ではない。柱穴12は柱穴２・柱穴10の中間に位置する柱穴であり、これを梁柱としても復元できるが、その底面深さが他の柱穴よりも浅いことから、ＳＢ11620段階の間仕切り柱と復元する。ＳＢ11620の時期は、図化した柱穴５掘方出土の須恵器杯蓋（17）や同じく柱穴５の柱痕跡出土の土師器甕（18）から飛鳥時代以降の建築、奈良時代以降の廃絶といえ、間仕切り柱とした柱穴12出土の土師器杯（19）の年代とも齟齬はない。

ＳＢ11621は南北８間（15.25ｍ）・東西２間（4.4ｍ）、面積67.1㎡に復元できる。建物主軸方向はＮ１°Ｗである。柱穴はおおよそ隅丸方形を志向するようである。いずれの柱穴も柱抜取が行われている。柱間は2.0～2.2ｍで等間ではない。ＳＢ11620と同



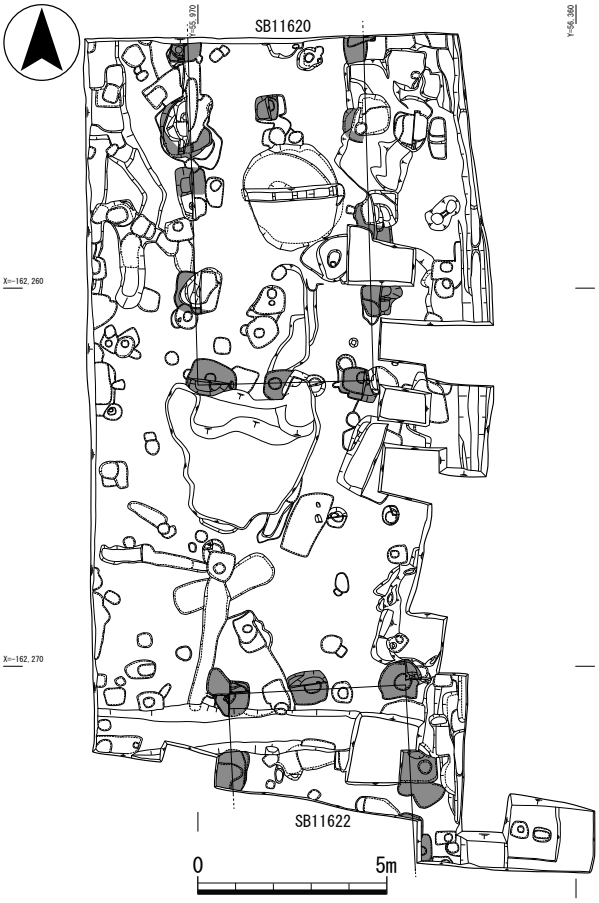
〈土層注記〉
1　10YR3/4暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック（径～2.0cm）が２%、10YR2/2黒褐色シルト粒（径～0.5cm）が５%、炭化物が１%含む
2　10YR3/4暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック（径～2.0cm）が20%、10YR2/2黒褐色シルト粒（径～0.5cm）が５%含む
3　10YR3/4暗褐色シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック（径～2.0cm）が20%、10YR2/2黒褐色シルト粒（径～1.0cm）が10%含む
【掘り直し後の埋土か】
4　10YR2/3黒褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルトブロック（径～2.0cm）が５%、10YR5/4にぶい黄褐色シルト粒（径～0.5cm）が５%含む
5　10YR3/4暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック（径～1.5cm）が20%、10YR2/2黒褐色シルト粒（径～1.0cm）が３%含む
6　10YR3/3暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルト粒（径～0.5cm）が５%、10YR2/2黒褐色シルトブロック（径～1.5cm）が１%含む
【当初の埋土】

第Ⅲ－７図　SK11613　平面・土層断面図（1：100）

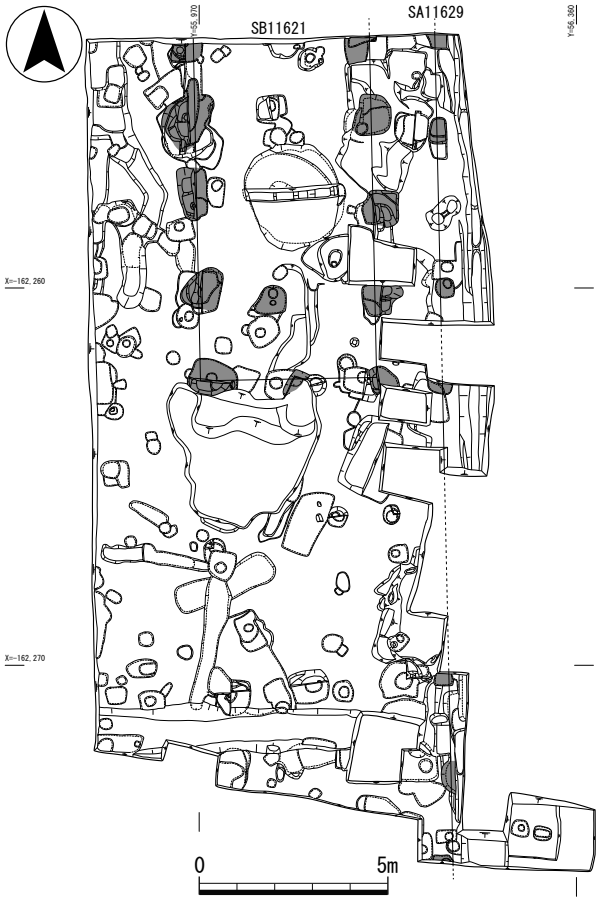
様、柱穴２・柱穴10の中間に位置する柱穴13について、ＳＢ11621段階の間仕切り柱と復元する。ＳＢ11621の所属時期は、柱穴４掘方出土の土師器杯（12・13）から遅くとも斎宮Ⅱ－３期、９世紀後半代と考えられる。ちなみに、この土師器杯は遺構精査時からその出土を確認し、取り上げ時においても出土地点を把握できている。その他、柱穴４柱抜取部出土の灰釉陶器壺口縁部（16）についても９世紀後半代の時期を与えられると考えられ、この建物が平安時代前期の建築・廃絶を表すものと言える。ちなみに、前述の間仕切り柱とした柱穴13からは図化していないが土師器杯あるいは皿の口縁部片が出土しており、その時期は斎宮Ⅱ－２期に求められる。

ＳＢ11621の柱抜取痕は、にぶい黄色（あるいは黄褐色）シルト土がブロック状もしくは同様の土で充填される。

ＳＢ11622（第Ⅲ－12図）　調査区南部に位置する掘立柱建物で、その南部は調査区外へ延びる。調査区内で確認できる規模は、南北２間以上（4.8ｍ以上）×２間（4.6ｍ）、面積22.1㎡以上である。建物主軸方向はＮ４°Ｗである。柱穴は６カ所確認できるが、その全体形状がうかがえる梁方向の柱穴３カ所はいずれもおおよそ隅丸方形の柱掘方である。柱間は柱穴の全容が確認できる梁行で2.3ｍの等間となる。そして６カ所全ての柱穴において柱抜取痕が確



第Ⅲ－８図　第 203 次調査（２区）
奈良時代遺構分布図（1：200）



第Ⅲ－９図　第 203 次調査（２区）
平安時代前期遺構分布図（1：200）

認でき、北西隅の柱穴２は北西方向に倒し、そのすぐ南の柱穴１は大半が調査区外に広がるが柱抜取は西側に倒して行っていると考えられる。柱穴５は南東方向に引き倒している。また柱穴３・柱穴４は引き倒すのではなく、ほぼ真上に抜き取ったことがうかがえる。柱穴６も調査区土層断面観察および平面観察により、ほぼ真上に抜き取ったと考えられる。ＳＢ11622は柱の重複は見られないことから建て替えは行われなかったと考えられる。出土土器は、図化した柱穴２掘方出土の弥生土器甕（20）や柱穴１出土の須恵器杯蓋（21）、柱穴５出土の土師器杯（22）のように、斎宮Ｉ－３期までに収まる。細片のため図化できなかったものについて観察すると特に掘方出土のものはおおよそ斎宮Ｉ－２期、８世紀前半代までのもので、柱抜取痕出土の土器は細片ではあるが少なくとも斎宮Ｉ－３期、８世紀中～後半代が最も新しいものであるので、ＳＢ11622の建築時期は８世紀前半～中頃と言える。

柱抜取痕にはにぶい黄色（あるいは黄褐色）シルト土がブロック状に入る特徴がある。また、北西隅柱である柱穴２には拳大の円礫が多く充填される。

ＳＡ11629　南北方向の掘立柱塀である。調査区の東部で確認したが、立木を避けながらの調査となり、また北半部は近代以降の掘削により大きく削平されているため、部分的な確認となっている。柱掘方の形状は不整円形である。柱直径は平面検出で確認したのみであるが、柱穴３・南端の柱穴６から0.25～0.3㎝程度と考えられる。柱穴２は上面を近代以降の掘削により大きく削平されており、平面検出で確認した柱掘方を一段掘り下げた時点で地山面に達した。その他で確認した柱穴は半截等床面までの掘削はしておらず、柱穴２の状況からＳＡ11629の柱穴床面標高は12.8ｍ程度と言える。柱穴２の南、柱穴３との間は近代以降の掘削で大きく削平され、その削平面標高が12.74ｍとなるため、掘立柱塀柱穴があったとしても削平されていると考えられる。柱間は、柱穴１と２で約2.3ｍ、柱穴３と４で約2.5ｍである。この柱間を参考に削平あるいは立木によ

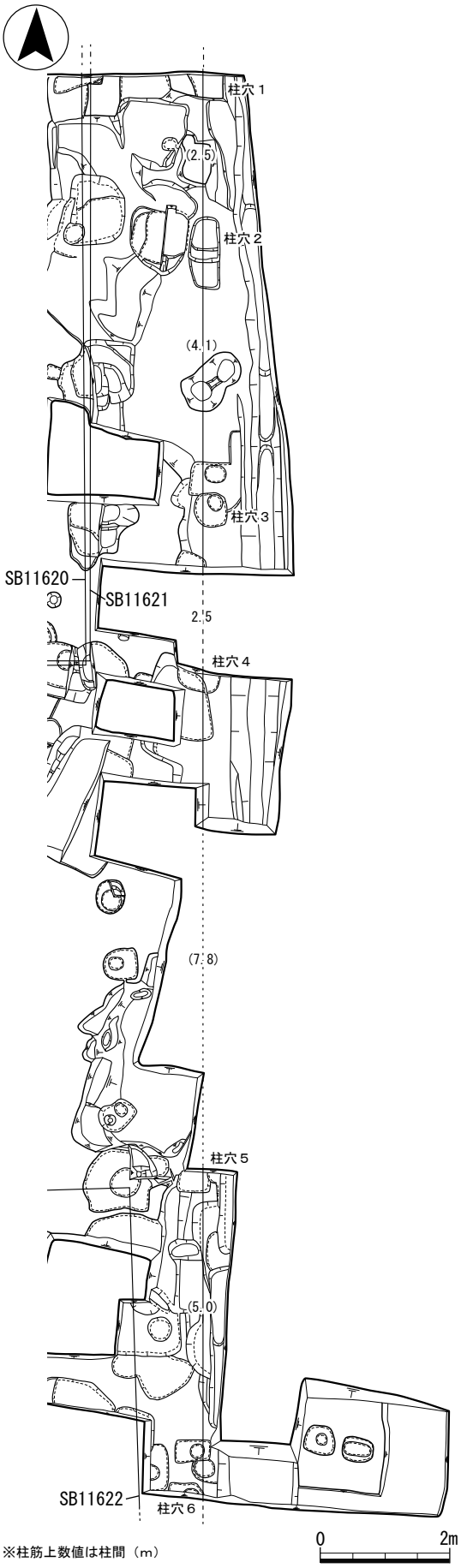
り未掘削部の柱穴の存在を推定すると、柱穴２と柱穴３の間に１カ所、柱穴５と柱穴６との間に１カ所の柱穴が推定できる。

問題は柱穴４と柱穴５の間であるが、7.8ｍの距離があり、柱間を2.4ｍとして復元すると3.0ｍの柱間が一カ所残る。飛鳥時代区画の調査では、区画を構成する掘立柱塀の西・東辺それぞれ一カ所ずつ門が設置されており、その部分の柱間は約３ｍである。ＳＡ11629についても門が付随した可能性があるが、飛鳥時代区画のような四脚門とすればその控え柱が調査区内で確認できるはずであるが、精査の結果、控え柱の推定南側は近代以降の掘削で削平されているものの、若干の窪みがあり、その部分の標高は13.04ｍと掘立柱塀柱穴底標高よりも浅い。北側控え柱の推定地点は立木により未掘削部にあたる。ＳＢ11620とＳＡ11629の柱位置はおおよそ対応しており、飛鳥時代区画においても南北に並ぶ２棟の南北棟掘立柱建物の間に門が設置されていたことから、ＳＡ11629についても門が設置されていた可能性を指摘するにとどめる。

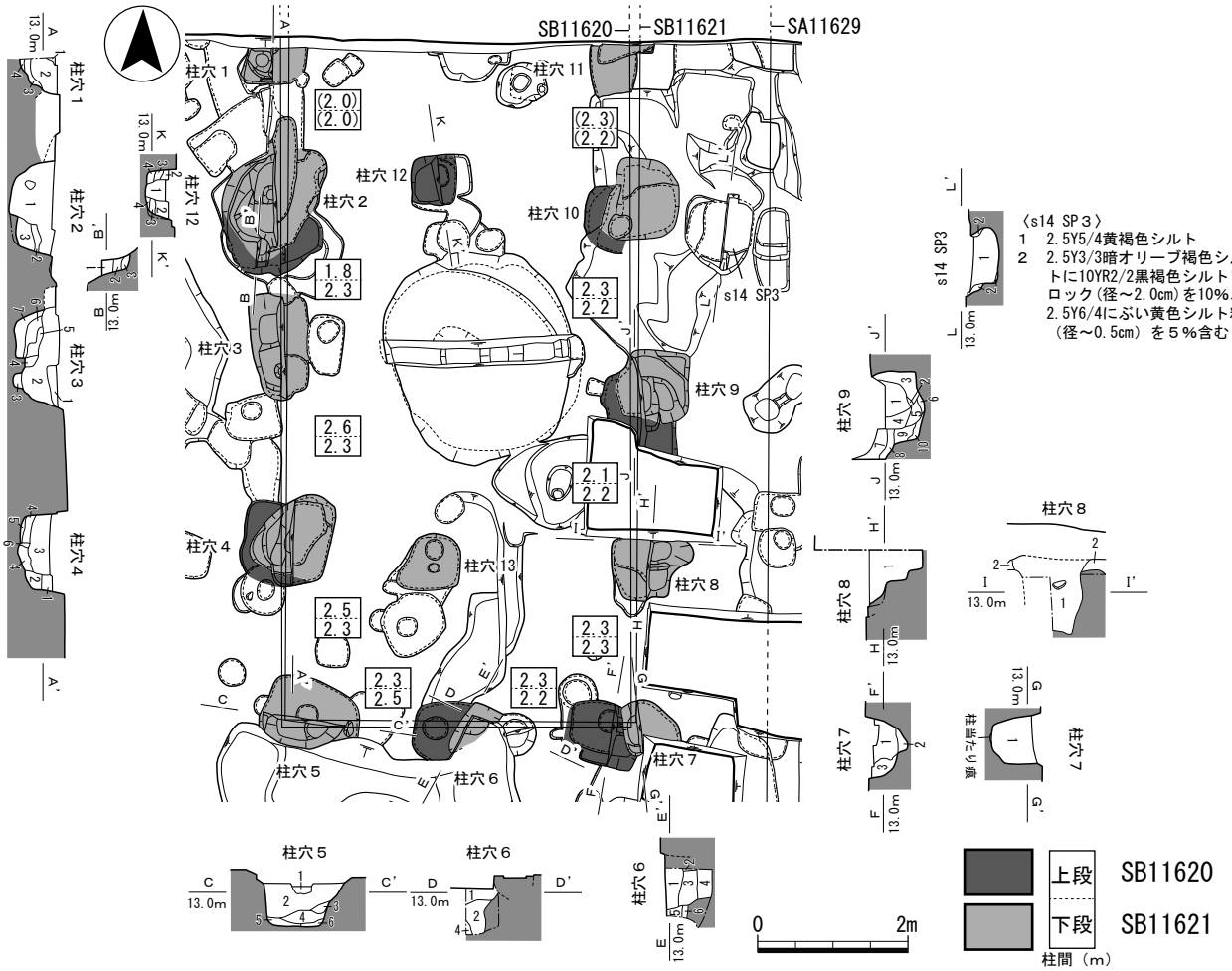
ＳＡ11629について同位置での建て替えの有無は、柱穴の確認場所が少ないため明確には言えないが、柱穴３において柱穴の重複があることから、同位置での建て替えの可能性はある。

また、ＳＡ11629の時期は、８世紀前半～中頃の建築といえるＳＢ11622と近接し過ぎていることや、柱穴２出土の土師器杯（８）の年代から、ＳＢ11621の段階に伴う、斎宮Ⅱ－３期、９世紀後半代と考えたい。

S14 SP ３（第Ⅲ－11図） ＳＢ11620・ＳＢ11621の柱穴10の東にあるピットで、南北0.8ｍ×東西0.85ｍの隅丸方形の平面形状で、検出時からその埋土は、黄褐色シルト土で充填されていた。半截により土層を確認したところ、北・東部は袋状にオーバーハングとなり、両肩部にブロック混じりの暗オリーブ褐色シルト土がわずかに見られるものの、底部まで黄褐色シルト土が充填されていた。この黄褐色シルト土は、ＳＢ11621の柱抜取痕に見られる埋土に酷似するが、それらの柱穴と同様に、このSP ３が掘立柱建物の柱穴とはその断面形状や堆積状況等から考え難い。



第Ⅲ－10図　SA11629　平面図（1：100）



第Ⅲ－11図　SB11620・SB11621　平面・土層断面図（1：100）

（４）平安時代末～鎌倉時代、近世

屋敷地を形成すると思われる溝群がある。また、調査区全域で多数のピットが確認できることから、いくつかは掘立柱建物の柱穴と考えられるが遺構の重複が多く、建物にまとめられなかった。

ＳＤ11612　調査区東端で、調査区を縦断する南北方向の溝で、第16－４次調査においても確認している。延長約18.2ｍ・幅0.75ｍで断面形状は溝肩に若干の犬走り状の平坦面を持つ。調査区内ではやや弧を描いて延びる。調査区北･東壁土層断面から、溝底部から0.6ｍ上で５～15㎝程度の礫が多く堆積し、特に調査区北東隅付近ではある程度埋没した溝に敷き詰めたように見られた。溝の時期は土師器皿（53）・鍋（54）、陶器椀（55）・鉢（56）から13世紀代と考えられる。

ＳＤ11615　調査区南部、東西方向に延びる溝である。延長6.8ｍ・幅1.1～1.2ｍ、検出面からの深さは約0.45ｍ、断面形状は箱型を呈する。調査区南東部、東部に拡張した部分で確認した南北方向の溝は、溝幅や断面形状が類似することからＳＤ11615が南へ屈曲した延長部分と推定する。底面の標高は東西方向の西端で12.96ｍ、東端で13.06ｍと10㎝程西へ傾斜する。ちなみに南北方向部の南端では標高12.88ｍである。溝の出土遺物は、図化したものは弥生時代鉢（57）や磨製石斧片（58）、古代の所産である土師器杯（59）や須恵器杯（60）などであるが、精査時に確認した他遺構との重複状況から、これら弥生時代～古代の遺物は重複する遺構の混入遺物であり、ＳＤ11615掘削時には包含層遺物として取り上げたほぼ完形である陶器椀（159･160）、土師器鍋（161）の存在からＳＤ11612と同様、13世紀代の溝と考えられ、ＳＤ11612と組み合って屋敷地を区画した溝と言えるだろう。

ＳＤ11624　調査区西端で確認した南北方向の溝である。調査区内での規模は、延長平面検出では7.8ｍであるが、調査区西壁土層断面では8.1ｍの規模

〈SB11620・SB11621　土層注記〉

〈柱穴１（r14 SP6）〉
1　10YR3/3暗褐色シルトに第２層と同じブロック(径～1.0cm)を30%含む
2　10YR3/3暗褐色シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルト・10YR6/8明黄褐色シルト（地山由来）・10YR2/2黒褐色シルトをそれぞれブロック状（径～3.0cm）に30%含む　【SB11621 柱抜取】
3　10YR3/4暗褐色シルトに10YR6/8明黄褐色シルトブロック(径～5.0cm)を40%含む
4　10YR3/4暗褐色シルト　【SB11621 掘方】

〈柱穴２（r14 SP5・r15 SP6）〉
1　10YR3/4暗褐色シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルト・10YR6/8明黄褐色シルト（地山由来）・10YR2/2黒褐色シルトをそれぞれブロック状（径～1.0cm）に30%含む　【SB11621 柱抜取】
2　10YR3./3暗褐色シルトに10YR4/6褐色シルトブロック（径～2.0cm）が層状に40%入る
3　10YR3/4暗褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルトと10YR4/6褐色シルトがブロック状（径～3.0cm）で層状に30%入る　【SB11621 掘方】

〈柱穴２（Ｂ-Ｂ´）〉
1　10YR2/3黒褐色シルトに10YR6/8明黄褐色シルトブロック(径～2.0cm)を10%含む
2　10YR2/3黒褐色シルトに2.5Y6/4にぶい黄色粒（径～0.5cm）を５%含む
3　10YR3/4暗褐色シルトに10YR6/8明黄褐色シルトブロック(径～1.0cm)を２%含む　【SB11620 掘方】

〈柱穴３（r15 SP3・SP4）〉
1　10YR3/3暗褐色シルトに2.5Y5/4黄褐色シルト粒(径～1.0cm)を10%、10YR2/2黒褐色シルト粒（径～0.5cm）を２%含む
2　10YR3/4暗褐色シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルト・10YR6/8明黄褐色シルト（地山由来）・10YR2/2黒褐色シルトがそれぞれブロック状（径～1.0cm）に30%含む　【SB11621 柱抜取】
3　10YR3/3暗褐色シルト
4　10YR3/3暗褐色シルトに10YR4/4褐色シルトブロック（径～2.0cm）を20%、10YR2/2黒褐色シルトブロック（径～1.0cm）を５%含む
5　10YR3/3暗褐色シルトに10YR2/1黒色シルトブロック（径～5.0cm）を10%、10YR5/6黄褐色シルトブロック（径～2.0cm）を２%含む
6　10YR3/3暗褐色シルトと10YR4/4褐色シルトが50%ずつ混交
7　10YR3/4暗褐色シルトに10YR4/4褐色シルトブロック（径～3.0cm）を30%含む　【SB11621 掘方】

〈柱穴４（r15 SP12・r16 SP6)〉
1　10YR3/4 暗褐色シルトに 2.5Y6/4 にぶい黄色シルトブロック（径～2.0 cm）を 30%、10YR2/2 黒褐色シルト粒（径～ 1.0 cm）を３%含む
2　10YR3/4 暗褐色シルトに 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト粒（径～ 1.0 cm）を 10%、10YR2/2 黒褐色シルト・10YR4/6 褐色シルト粒（径～ 0.5 cm）を２%含む　【SB11620 柱抜取】
3　10YR3/4 暗褐色シルトに 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト粒（径～ 1.0 cm）を 30%、10YR2/2 黒褐色シルト粒（径～ 0.5 cm）を 10%、10YR4/6 褐色シルト粒を５%含む　【SB11621 柱抜取】
4　10YR3/4 暗褐色シルトに 10YR4/4 褐色シルトブロック（径～ 3.0 cm）を 30%含む
5　10YR3/4 暗褐色シルトに 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト粒（径～ 0.5 cm）を 10%、10YR2/2 黒褐色シルト粒（径～ 1.0 cm）を２%含む　【SB11621 掘方】
6　10YR3/4 暗褐色シルト　【SB11621 柱痕跡】

〈柱穴５（r16 SP3)〉
1　10YR3/4 暗褐色シルト
2　10YR3/4 暗褐色シルトに 10YR5/6 黄褐色シルトブロック（径～ 3.0 cm）を３%、10YR2/3 黒褐色シルトブロック（径～ 2.0 cm）を 10%、2.5Y6/3 にぶい黄色シルトブロック（径～ 2.0 cm）を 10%含む
3　10YR4/4 褐色シルトに 10YR5/6 黄褐色シルトブロック（径～ 2.0 cm）を 40%、10YR2/3 黒褐色シルトが層状に 30%含む
4　10YR3/4 暗褐色シルトに 10YR4/4 褐色シルトブロック（径～ 1.0 cm）を 10%、2.5Y6/3 にぶい黄色シルトブロック（径～ 1.0 cm）を１%含む　【SB11621 柱抜取】
5　10YR3/4 暗褐色シルトに 2.5Y6/3 にぶい黄色シルトブロック（径～ 2.0 cm）を１%含む　【SB11620 掘方】
6　10YR3/4 暗褐色シルトに 10YR5/6 黄褐色シルトブロック（径～ 2.0 cm）を７%、10YR2/2 黒褐色シルト粒（径～ 0.5 cm）を 10%含む　【SB11620 柱痕跡】

〈柱穴６（s16 SP7)〉
1　10YR3/3 暗褐色シルトに 2.5Y6/3 にぶい黄色シルトブロック（径～ 2.0 cm）を 10%、10YR5/6 黄褐色シルトブロック（径～ 1.0 cm）を７%含む
2　10YR3/3 暗褐色シルトに 2.5Y6/3 にぶい黄色シルトブロック（径～ 2.0 cm）を１%含む　【SB11621 柱抜取】
3　10YR3/3 暗褐色シルトに 10YR5/6 黄褐色シルト粒（径～ 0.5 cm）を 10%含む
4　10YR2/3 黒褐色シルトに 10YR5/6 黄褐色シルトブロック（径～ 2.0 cm）を５%、10YR2/2 黒褐色シルト粒（径～ 1.0 cm）を 10%含む　【SB11621 掘方】
5　10YR3/4 暗褐色シルトに 2.5Y6/3 にぶい黄色シルトブロック（径～ 1.0 cm）を５%含む
6　10YR2/4 暗褐色シルトに 10YR5/6 黄褐色シルトブロック（径～ 2.0 cm）を 10%含む　【SB11620 掘方】

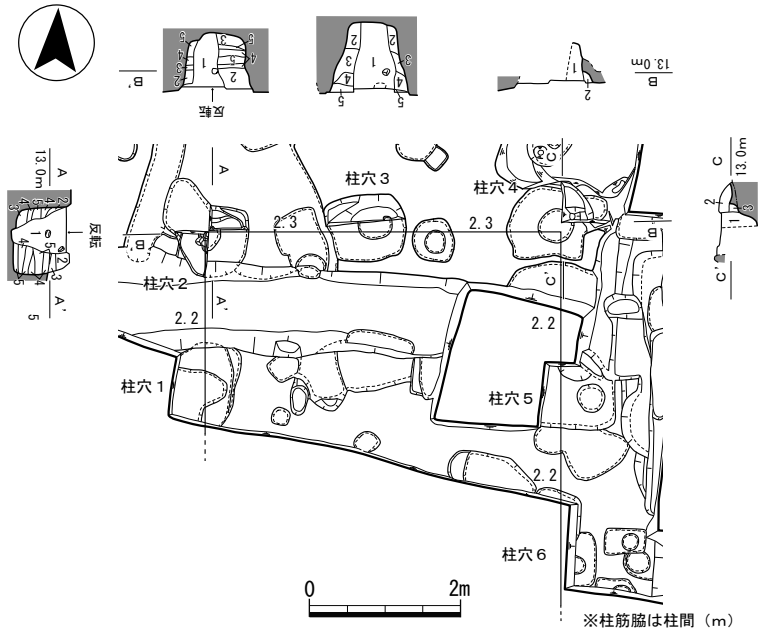
〈柱穴７（s16 SP3）（Ｆ-Ｆ´)〉
1　10YR3/4 暗褐色シルトに 10YR2/2 黒褐色粒（径～ 0.5 cm）を３%、2.5Y6/3 にぶい黄色シルト粒（径～ 0.5 cm）を 10%、10YR5/6 黄褐色シルト粒（径～ 0.5 cm）を５%含む
2　10YR3/4 暗褐色シルトに 10YR5/6 黄褐色シルトブロック（径～ 3.0 cm）を３%　【SB11620 柱抜取】
3　10YR3/4 暗褐色シルトに 10YR4/6 褐色シルトブロック（径～ 2.0 cm）を 20%含む　【SB11620 掘方】

〈柱穴７（s16 SP5）（Ｇ-Ｇ´)〉
1　10YR3/4 暗褐色シルトに 10YR2/2 黒褐色シルトブロック（径～ 2.0 cm）を 15%、2.5Y6/3 にぶい黄色シルトブロック（径～ 3.0 cm）を５%含む　【SB11621 柱抜取】

〈柱穴８（s16 SP6)〉
1　10YR3/3 暗褐色シルトに 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト粒（径～ 0.5 cm）を５%、10YR5/6 黄褐色シルト粒（径～ 0.5 cm）を５%含む　【SB11621 柱抜取】
2　10YR3/4 暗褐色シルトに 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック（径～ 2.0 cm）を１%含む　【遺物包含層】

〈柱穴９（s15 SP3)〉
1　10YR3/3 暗褐色シルトに 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト粒（径～ 1.0 cm）を 15%、10YR2/2 黒褐色シルト粒（径～ 1.0 cm）を５%、10YR5/6 黄褐色シルト粒（径～ 5.0 cm）を１%含む
2　10YR2/3 黒褐色シルト
3　10YR3/3 暗褐色シルトに 10YR4/4 褐色シルトブロック（径～ 2.0 cm）を 10%、2.5Y6/4 にぶい黄色シルト粒（径～ 1.0 cm）を 10%含む　【SB11621 柱抜取】
4　10YR2/2 黒褐色シルトに 2.5Y5/4 黄褐色シルトブロック（径～ 5.0 cm）を 15%、10YR4/4 褐色シルトブロック（径～ 2.0 cm）を５%含む
5　10YR2/2 黒褐色シルトに 2.5Y5/4 黄褐色シルト粒（径～ 0.5 cm）を 10%含む
6　10YR3/3 暗褐色シルトに 10YR4/4 褐色シルト粒（径～ 0.5 cm）を５%、10YR2/2 黒褐色シルトブロック（径～ 1.0 cm）を 10%含む　【SB11621 掘方】
7　10YR2/2 黒褐色シルト
8　10YR3/4 暗褐色シルトに 10YR2/2 黒褐色シルトブロック（径～ 1.0 cm）を５%、10YR4/4 褐色シルトブロック（径～ 2.0 cm）を７%含む
9　10YR3/4 暗褐色シルトに 10YR6/6 暗黄褐色シルトブロック（径～ 2.0 cm）を５%含む
10　10YR2/2 黒褐色シルトに 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック（径～ 2.0 cm）を 10%含む　【SB11620 掘方】

〈柱穴 12（s14 SP1)〉
1　10YR3/3 暗褐色シルトに 2.5Y6/4 にぶい黄色シルトブロック（径～ 1.0 cm）・10YR2/2 黒褐色シルトブロックをそれぞれ２%含む　【SB11620 柱痕跡】
2　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルトに 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト粒（径～ 0.5 cm）を５%含む
3　10YR3/4 暗褐色シルトに 10YR4/6 褐色シルト粒（径～ 1.0 cm）を２%含む
4　10YR3/3 暗褐色シルトに 10YR4/4 褐色シルトブロック（径～ 2.0 cm）を 10%含む　【SB11620 掘方】



〈柱穴２（r18 SP3）〉
1　10YR3/4暗褐色シルトに2.5Y6/4にぶい黄色シルトブロック（径～3.0cm）を10%（上面に集中）、10YR5/6黄褐色シルトブロック（径～2.0cm）を10%含む　【柱抜取】
2　10YR3/4暗褐色シルトに10YR4/4褐色シルト粒（径～0.5cm）を５%、10YR2/2黒褐色シルト粒（径～0.3cm）を10%含む
3　10YR2/2黒褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック（径～2.0cm）を20%含む
4　10YR2/2黒褐色シルト
5　10YR2/2黒褐色シルトに10YR6/8明黄褐色シルトブロック（径～3.0cm）を30%含む　【掘方】

〈柱穴３（s18 SP2）〉
1　10YR3/4暗褐色シルトに2.5Y6/4にぶい黄色シルトブロック（径～3.0cm）を５%、10YR5/6黄褐色シルトブロック（径～5.0cm）を２%含む　【柱抜取】
2　10YR3/4暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック（径～1.5cm）を５%、10YR2/2黒褐色シルト粒（径～1.0cm）を２%含む
3　10YR3/4暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック（径～5.0cm）を30%含む
4　10YR3/4暗褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルトブロック（径～1.5cm）を５%、10YR5/6黄褐色シルトブロック（径～1.5cm）を２%含む
5　10YR3/4暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック（径～2.0cm）を10%含む　【掘方】

〈柱穴４（s18 SP5）〉
1　10YR3/4暗褐色シルトに2.5Y6/4にぶい黄色シルトブロック（径～1.5cm）が20%含む　【柱抜取】
2　10YR4/3にぶい黄褐色シルトに2.5Y6/4にぶい黄色シルト粒（径～1.0cm）を５%含む
3　10YR3/4暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルト粒（径～1.0cm）を15%含む　【掘方】

第Ⅲ－12図　SB11622　平面・土層断面図（1：100）

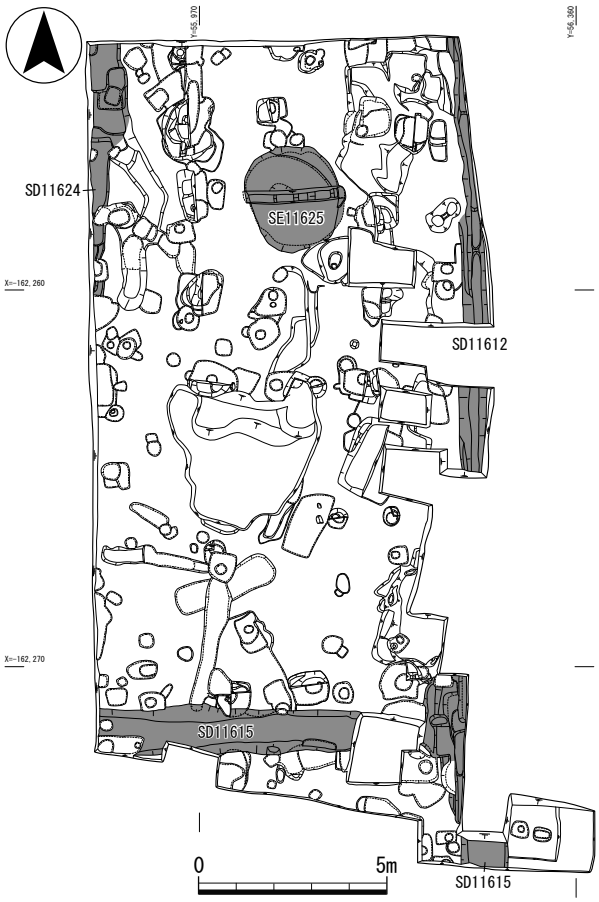
となる。溝幅は平面検出では0.82ｍ以上、調査区北壁土層面では1.4ｍ以上である。深さは遺構検出面からは約10㎝である。遺構検出時より径0.5～1.0㎝程度の礫の混じった埋土を確認しており、調査区土層の観察からも、上層から掘削されている状況が確認できた。出土遺物にはＳＤ11624の下層遺構の混入と思われる平城Ｉ併行期の土師器皿（66）・甕口縁部（65）などがある。

ＳＥ11625　調査区北部で確認した井戸である。遺構検出時から直径10～20㎝程の円礫が多く出土していた。規模は東西2.5ｍ・南北2.77ｍ・検出面からの深さは1.68ｍ（標高11.805ｍ）である。掘削は途中まで半裁し、安全を期して中央のみをトレンチ状に底部まで完掘し土層観察を行った。平面観察においても井戸枠状構造物は確認できず、土層断面においても有機質あるいは石組み状の井戸枠は確認できなかった。木材など有機質の井戸枠が腐食により残存しなかったものと思われ、掘削当初から見られた多くの円礫は、その井戸枠上部に積み重なれた石組みの可能性もある。土層断面から、掘方部は一度掘り直されており、確認できる井戸枠埋土は掘方掘り直し後に埋没したものである。また、当初の掘方部分の底部付近は検出面から約20㎝程オーバーハング状を呈する。出土遺物は、周辺の古代以降の混入遺物もあるが、13世紀～14世紀代の南伊勢系土師器鍋（46・47）や13世紀後半代の陶器椀（48・49）、12世紀後半代の陶器鉢（50）等が出土し、おおよそ13世紀～14世紀の所産の遺構と考えれる。

ＳＤ11626　調査区北西部に位置する、やや屈曲する溝である。他遺構の重複が多くあり全容は不明であるが確認できる規模は、北から1.7ｍで屈曲し、屈曲部から南端までは0.7ｍである。溝幅は0.55～0.65ｍ、完掘しており７㎝程度である。出土遺物には図化していないが古代に属すると思われる土師器などがある。

4　遺物

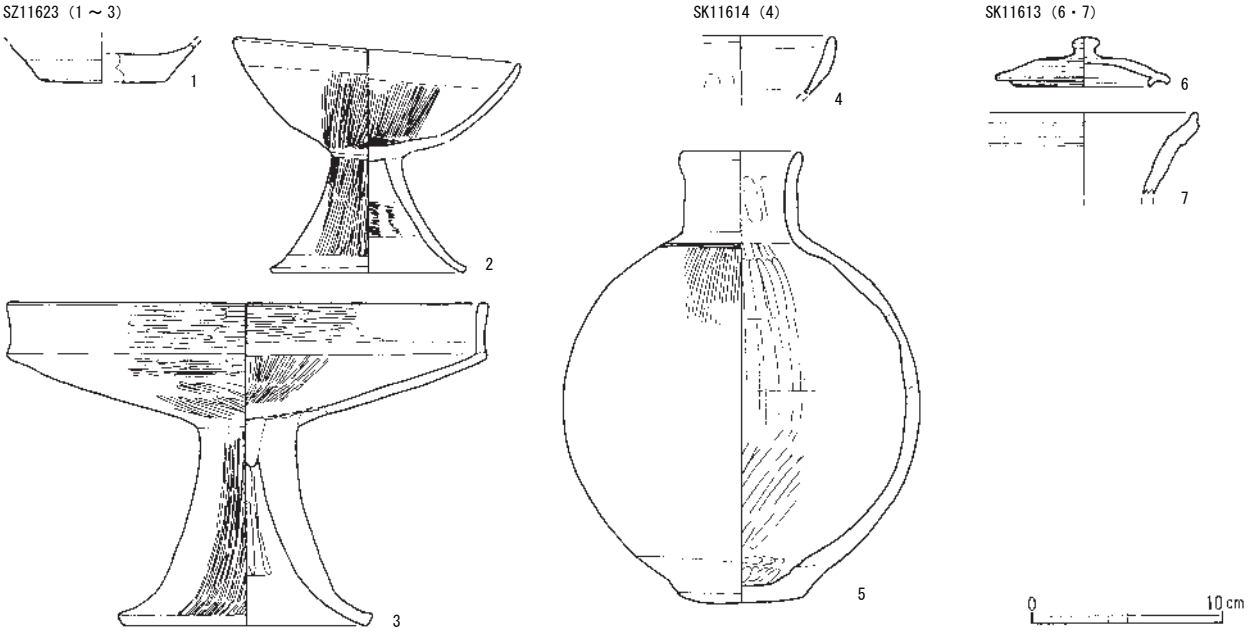
遺物整理用コンテナ47箱分の遺物が出土した。ここからは、遺構についての記述に合わせ、時代毎に分けて遺構毎に、遺物包含層は地区毎（北西ｑ14→南東ｔ19）に分けて詳述する。遺構出土遺物は、本来の遺構の年代とは異なる遺物についても調査区の遺物の状況を示すため、煩雑ではあるがまとめて掲載している。なお、ここでは特徴的な遺物のみ記述する。詳細は第Ⅲ―３～６表をご覧いただきたい。



第Ⅲ－13図　第203次調査（２区）
平安時代末～鎌倉時代遺構分布図（1：200）

（１）弥生時代遺構出土遺物（第Ⅲ－14図）

ＳＺ11623出土遺物（１～３）　１は弥生土器壺底部で、東周溝から出土した。底部から立ち上がるわずかに残る体部の器壁は比較的薄く、小型の壺であろうか。２・３は北周溝から出土した（第Ⅲ－５図）。２の弥生土器高杯ほぼ完形で、椀状の杯部はやや傾く。杯部内外面に縦方向のミガキを、脚部も外面にミガキを施す。３は、くの字に屈曲する杯部を持つ。杯端部の残存状況は悪いが、脚部はほぼ完存する。杯屈曲部は内外面とも横方向のミガキを施し、脚部へとつながる杯部は外面は上部が横方向の、脚部に近い下部は左上がりの斜め方向のミガキを施す。内面は縦方向のミガキである。脚部も外面は縦方向の



第Ⅲ－14図　第203次調査（２区）　出土遺物実測図１（1：4）

ミガキを施す。２・３はいずれも弥生時代後期後葉の所産と考えられる。

ＳＫ11614出土遺物（４）　弥生土器鉢のものと思われる口縁部細片である。全体をナデ・オサエにより成形・調整している。遺構は完掘していないためこの細片が当遺構の時期を示すと積極的には言えないが、埋土の状況等から当該期でよいと考える。

ＳＫ11627出土遺物（５）　弥生土器壺である。口縁部の残存度は低いが、体部から底部はほぼ完存する。体部外面には煤が付着し、調整が不明瞭であるが、肩部には縦方向のミガキを施すようである。頸部から口縁部はナデにより成形・調整し、内面ではユビオサエの痕跡が明瞭である。頸部近くの体部には４本の櫛描直線文を施す。体部内面はユビオサエ・ユビナデ痕が明瞭である。

（２）飛鳥時代遺構出土遺物（第Ⅲ－14・15図）

ＳＫ11613出土遺物（６・７）　６は須恵器杯蓋である。外面に降灰が見られ、正位置で窯詰めされたものである飛鳥Ⅱ型式の所産と考えられる。７は須恵器で、壺口縁部と考えられる。内面に降灰が見られることから正位置で窯詰めされたものと言える。細片のため確定できないが、おおよそ古墳時代のものか。

ＳＢ11628出土遺物（23・24）　23は不明土製品で、全体をナデにより成形する。柱穴２から出土した。図の左側が欠損しており、小型模造品の可能性が考えられる。24は須恵杯で、底部外面はロクロ切り離し後ナデ調整を施し、それに対応する内面に仕上げナデが見られる。柱穴６から出土した。内外面に自然釉が見られることから、蓋等をせずに正位で窯詰めされたと言える。時期は飛鳥Ⅲ併行期、７世紀中葉の所産と考えられる。

（３）奈良時代・平安時代前期遺構出土遺物（第Ⅲ－15図）

ＳＡ11629出土遺物（８～10）　８は土師器皿の口縁部片で、柱穴２から出土した。口縁端部にやや内傾する面を持つ。斎宮Ⅱ－１期、８世紀末～９世紀初頭の所産であろうか。９は土師器甕口縁部で、柱穴６から出土した。口縁端部を上方につまみ上げる。古墳時代のものか。10は鉄製品で断面は方形を呈し、くの字に曲がる。鉄釘と思われる。柱穴５から出土した。

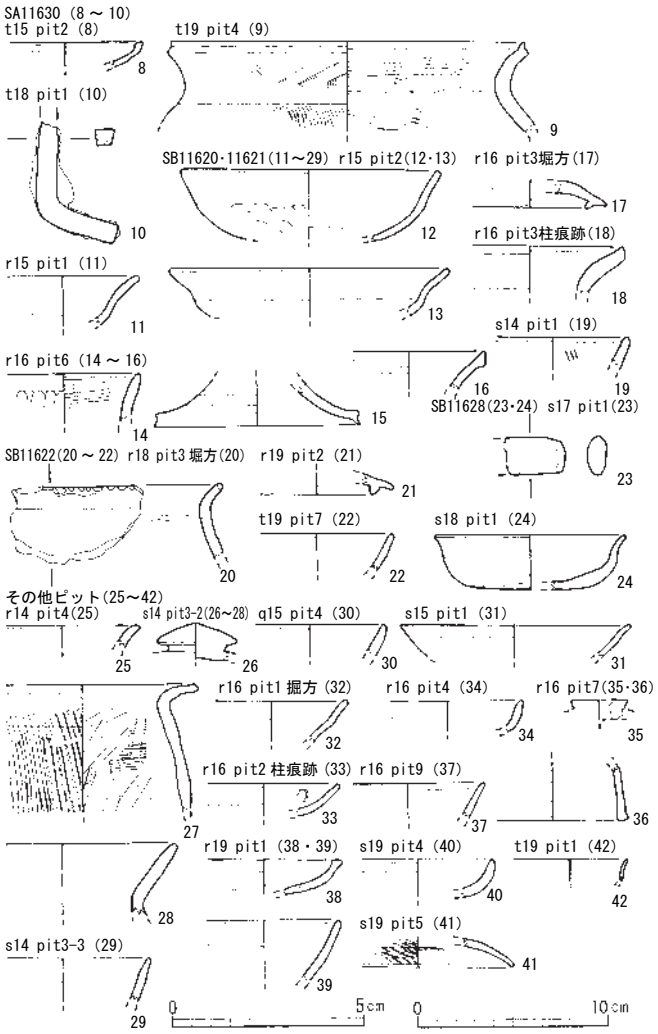
ＳＢ11620・11621出土遺物（11～19・32）　11はＳＢ11621柱穴２の柱抜取痕から出土した土師器杯である。細片であるが、斎宮Ⅱ－３期の所産と考えられる。12・13はＳＢ11621柱穴４の掘方部から出土した土師器杯である。12は口縁部が11や13のように屈曲するものではなく、体部からの角度を保って広がる口縁を持つ。斎宮Ⅱ－２期でよいか。13は11と同様、屈曲しながら開く口縁部を持つ。斎

宮Ⅱ－３期である。14～16はＳＢ11621の柱穴４柱抜取痕から出土しており、14は土師器甕口縁部と思われる。器壁が比較的薄いため、小型の甕と考えられる。これは斎宮Ⅰ－２期までのものか。15は須恵器高杯の脚部片で、焼成不良である。古墳時代後期～斎宮Ⅰ－１期に収まるか。16は灰釉陶器壺口縁部片で、細片のため灰釉がハケヌリかツケガケかは不明である。斎宮Ⅱ－３期の所産と考えられる。17・18はＳＢ11620柱穴５からの出土で、17は掘方部からの、18は柱痕跡部からの出土である。17は須恵器杯蓋で、外面に自然釉が見られることから正位で窯詰めされたと言える。飛鳥Ⅱ期併行期のものと考えられる。18は土師器甕口縁部で全体的に摩滅し調整不明瞭である。奈良時代の範疇に収まるか。

19はＳＢ11620の間仕切り柱と想定した柱穴12から出土した土師器杯片で、内面にヘラミガキが見られる。斎宮Ⅰ－１～２期のものか。また図版では下半部にレイアウトしているが32はこれも間仕切り柱と想定した柱穴13掘方出土の土師器杯である口縁端部でやや屈曲し、斎宮Ⅱ－２期のものか。とすると、柱穴13は二段階目のＳＢ11621に伴う間仕切り柱と言える。

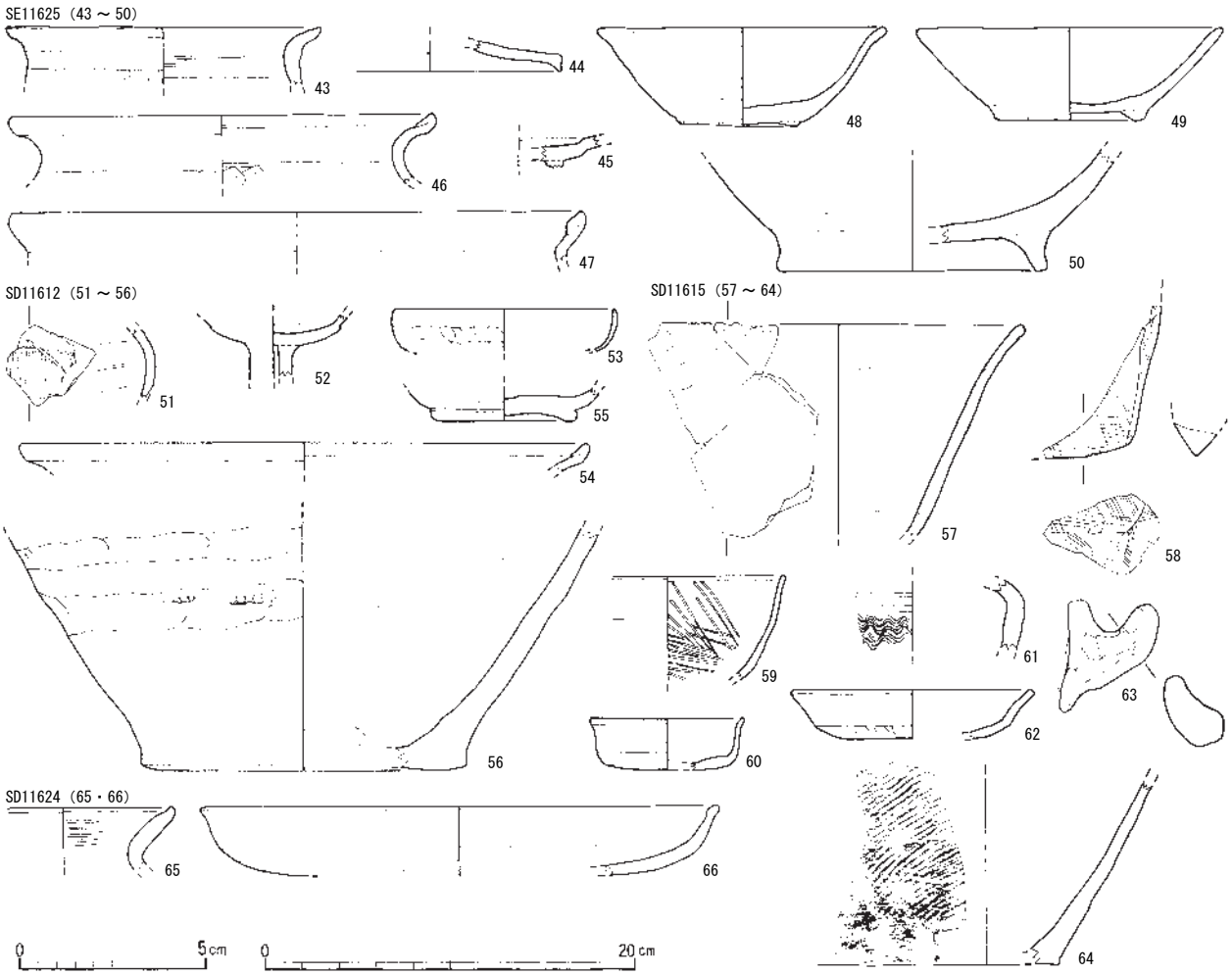
ＳＢ11622出土遺物（20～22） 20は柱穴２掘方埋土から出土した弥生時代中期の弥生土器甕口縁部である。口縁端部に棒状工具による刻みを施す。21は柱穴１から出土した須恵器杯蓋で外面に自然釉が見られ、正位での窯詰めが想定できる。飛鳥Ⅲ期の所産か。22は柱穴５から出土した須恵器杯と思われる。

その他のピット出土遺物（25～31、33～42） この時期に収まるものではないが、ここでピット出土遺物を見ておく。25はＳＢ11620・11621の柱穴２に切り込むr14 SP ４から出土した陶器小皿口縁部である。渥美産の５型式後半、13世紀前半代のものである。26～29は遺構の記述でも触れた黄褐色シルトを充填するr14 SP ４から出土した。26は土師器杯蓋の摘み部である。奈良時代に収まる時期のものか。27は土師器甕で口縁部から体部にかけての外面全体に煤が薄く付着する。口縁部は強くくの字に屈曲し、斎宮Ⅱ－１期の範疇に収まるか。28は須恵器甕口縁部細片である。斎宮Ⅰ－１～２期と



第Ⅲ－15図　第203次調査（２区）
出土遺物実測図２（10は1：2，その他は1：4）

考えられる。29は須恵器杯口縁部細片で比較的大型のものと考えられる。斎宮Ⅰ－１期か。30はＳＤ11624下で検出したq15 SP ４から出土した土師器杯もしくは皿口縁部片である。細片であるが内面にミガキを施すようである。斎宮Ⅰ－１期のものと思われる。31はＳＥ11625の北に位置するs15 SP1出土の土師器杯で、斎宮Ⅱ－２期に収まる。33はr16 SP ２柱痕跡出土の土師器皿で、内面にわずかに螺旋状ミガキが見られる。斎宮Ⅱ－１期のものと思われる。34はr16 SP ４出土の土師器杯口縁部片で、細片であるが斎宮Ⅰ－１期の所産と考えられる。35・36はr16 pit ７から出土したもので、特に35は柱痕跡から出土した土師器杯蓋摘み部である。36は細片のため全体形状が不明であるが、須恵器壺蓋の可能性が考えられる。いずれも斎宮Ⅰ－２期の所産と考えられる。



第Ⅲ－16図　第203次調査（２区）　出土遺物実測図３（58は1：2，その他は1：4）

37はr16 SP ９から出土した須恵器杯で口縁部細片のため時期を絞り切れないが、斎宮Ⅰ－１～３期、８世紀前半代のものか。38・39はＳＤ11615下、調査区南西隅のr19 SP １から出土したもので、38は土師器皿、39は土師器杯である。38はＳＡ11629出土の土師器皿（８）と同器種と考えられ、斎宮Ⅱ－１期に属する。39の土師器杯は外面下半にヘラケズリ、内面にヘラミガキが見られるようであるが調整不明瞭である。斎宮Ⅰ－３期の所産であろうか。40はs19 SP ４出土の土師器皿で、内面にヘラミガキが施されている可能性があるが不明瞭である。斎宮Ⅰ－２～３期のものか。41はs19 SP ５出土の土師器杯蓋で、外面は斜め方向のヘラミガキ後に横方向のヘラミガキを施す。斎宮Ⅰ－２期のものである。42は調査区南東部、東へ拡張した部分で検出したt19 SP １出土の須恵器小型壺の口縁部片と考えられる。器壁が非常に薄く、小型品と思われ、平城京左京五条二坊十四坪調査のＳＥ３に類例を求めた。斎宮Ⅱ－１期の所産である。

（４）平安時代末～鎌倉時代遺構出土遺物（第Ⅲ－16図）

ＳＥ11625出土遺物（43～50）　43～45はいずれも混入遺物である。43は土師器甕、44は比較的大型の須恵器杯蓋で、奈良時代以降のものと考えられる。45は灰釉陶器段皿の底部で、内面の灰釉はハケヌリと思われる。Ｋ14－２窯式、９世紀前半のものである。46・47は南伊勢系土師器鍋で、46は内外面に、47は外面に煤が厚く付着する。46は伊藤編年第１段階、13世紀前半代の所産であるが、47は口縁端部の折り返し内面がやや三角形を呈することから伊藤編年第３段階、14世紀のものである。48・49は陶器椀で、48は体部下半～底部にかけて煤が付着、内面は摩耗している。49は内面に煤が付着し、底部内面が摩耗している。口縁端部に自然釉が顕著である。いずれも底部外面は糸切後ナデ調整、高台部に

籾殻痕が見られ、渥美産６型式、13世紀中～後半の所産である。50は陶器鉢で内面が摩耗する。渥美産で、中野編年Ⅰｂ型式、12世紀後半であろうか[①]。

ＳＤ11612出土遺物（51～56） 51・52は他遺構の混入と考えられる。51は土師器甕体部片で、×状のヘラ記号が見られる。52は須恵器高杯で、杯部内面は降灰が著しく、焼膨れも見られる。飛鳥時代の所産であろうか。53の皿、54の鍋は南伊勢系土師器で、13世紀代の所産である。55は陶器椀底部で、内面が摩耗する。渥美産６型式と考えられる。56は陶器甕底部で、内面は降灰塊や窯崩落土と思われる土塊が多く付着する。外面にスタンプ文が見られる。常滑産であるが、全容が不明のため時期判断は困難ではあるが、スタンプ文が体部下半にも及ぶことから中野編年の５型式までの範疇、12世紀後半～13世紀後半に収まるか。

ＳＤ11615出土遺物（57～64） 遺構の記述でも触れたが、ＳＤ11615からは当遺構より年代が遡る遺物が多く出土し、遺構の重複関係から想定する当該期の遺物は、包含層掘削あるいは遺構精査時に遺構上面で出土する程度である。57は弥生土器甕である。弥生時代中期の所産である。58は磨製石斧の刃部片で、擦痕が表裏面・側面に見られる。側面にわずかに自然面が残る。59は土師器杯で、内面は下方の横方向に近いヘラミガキの後、上方の斜め方向のヘラミガキを施す。60は須恵器杯で、外面に降灰が見られることから逆位で窯詰めされたと言える。59・60とも飛鳥Ⅱ期の所産と思われる。61は須恵器であるが、器壁が厚いことから長頸壺のような大型品の壺と考えられる。外面に波状文が施され、自然釉が見られる。内面は焼膨れが著しい。飛鳥期のものか。62は土師器杯で斎宮Ⅱ－１～２期のものである。63は土師器把手部で、オサエ・ナデにより成形・調整する。64は須恵器甕で、器壁が薄く比較的小型品であると思われる。内面に降灰が見られ、煤が付着している。平安時代の所産か。

（５）遺物包含層出土遺物（第Ⅲ－17・18図）

包含層出土遺物は土師器片が大半であるが、破片カウントなど数量化しての比較ではなく、整理作業時の印象ではあるが、甕などの煮炊具は少なく、杯・皿など供膳具の破片が多い。また、調査区北部においては平安時代前期の供膳具が多く、特に斎宮Ⅱ－２～３期の、強く外反する土師器杯Ａが見られ、その中には図化できていないが、口縁端部に油煙痕を持つ破片が複数点見られる。

ｑ14グリッド出土遺物（67～69） 67は土師器甕で体部外面にわずかにハケメが残る。斎宮Ⅰ－３～Ⅱ－１期か。68は土師器把手で、全体をナデ・オサエにより成形・調整する。上部にわずかに工具当たり痕が残る。69は須恵器皿と追われる。底部はヘラ切り後ロクロナデにより調整する。斎宮Ⅰ－２期の所産と考えられる。

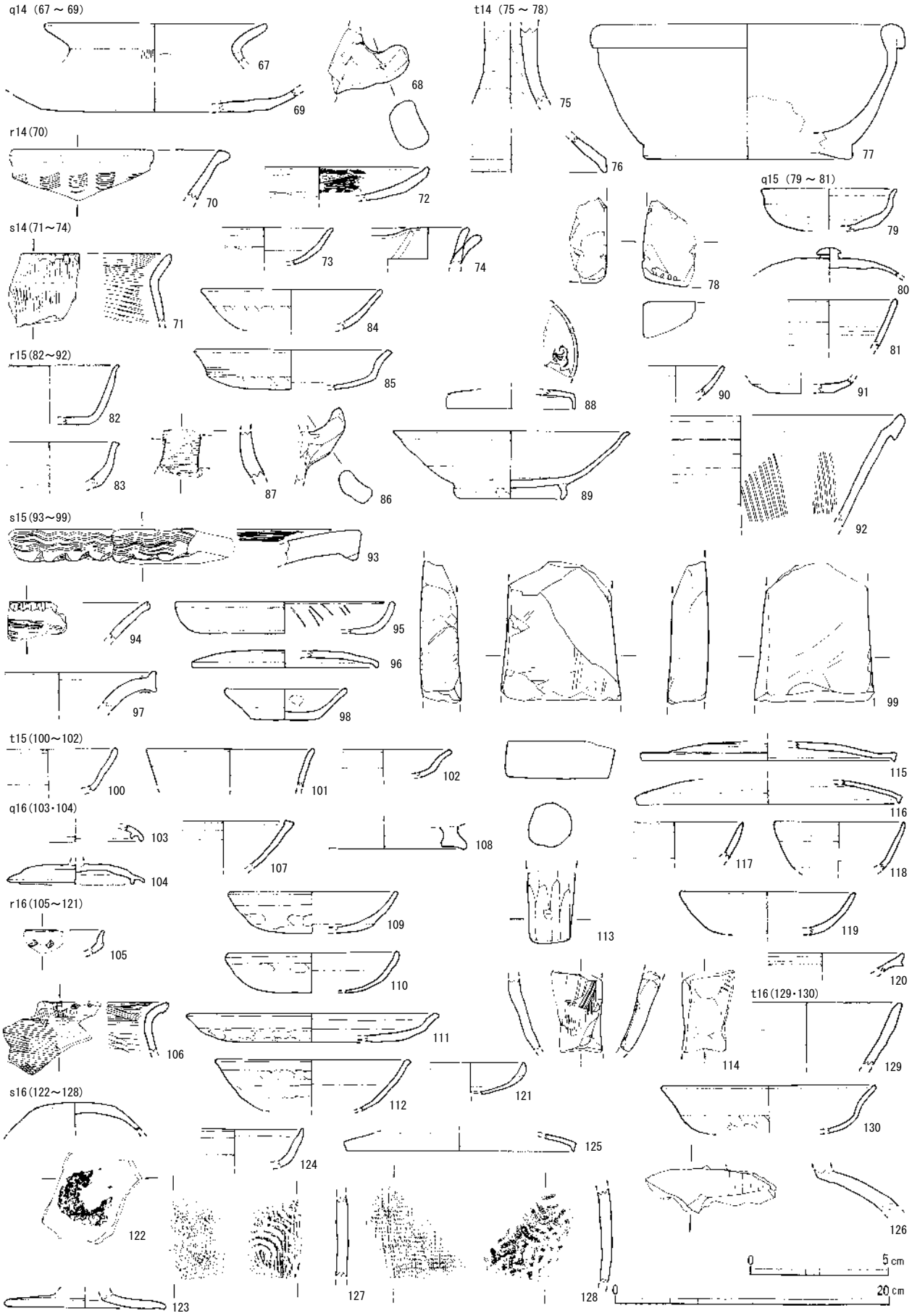
ｒ14グリッド出土遺物（70） 70は須恵器甕口縁部で、大型甕と推定される。外面に崩れた波状文を施し、内外面には自然釉が厚く見られる。７世紀代の所産である。

ｓ14グリッド出土遺物（71～74） 71は弥生土器甕で、口縁部には刻み目を施す。外面はタテハケ、内面はヨコハケにより調整する。外面に煤が付着している。72は土師器盤もしくは高杯と考えられる。内面は細かいハケによる調整が見られる。また、外面には黒斑が確認できる。弥生時代中期のものか。73は土師器杯で斎宮Ⅱ―３期の所産と考えられる。74は陶器鉢口縁部で注口部に当たる。渥美産、12世紀後半代のものと考えられる。

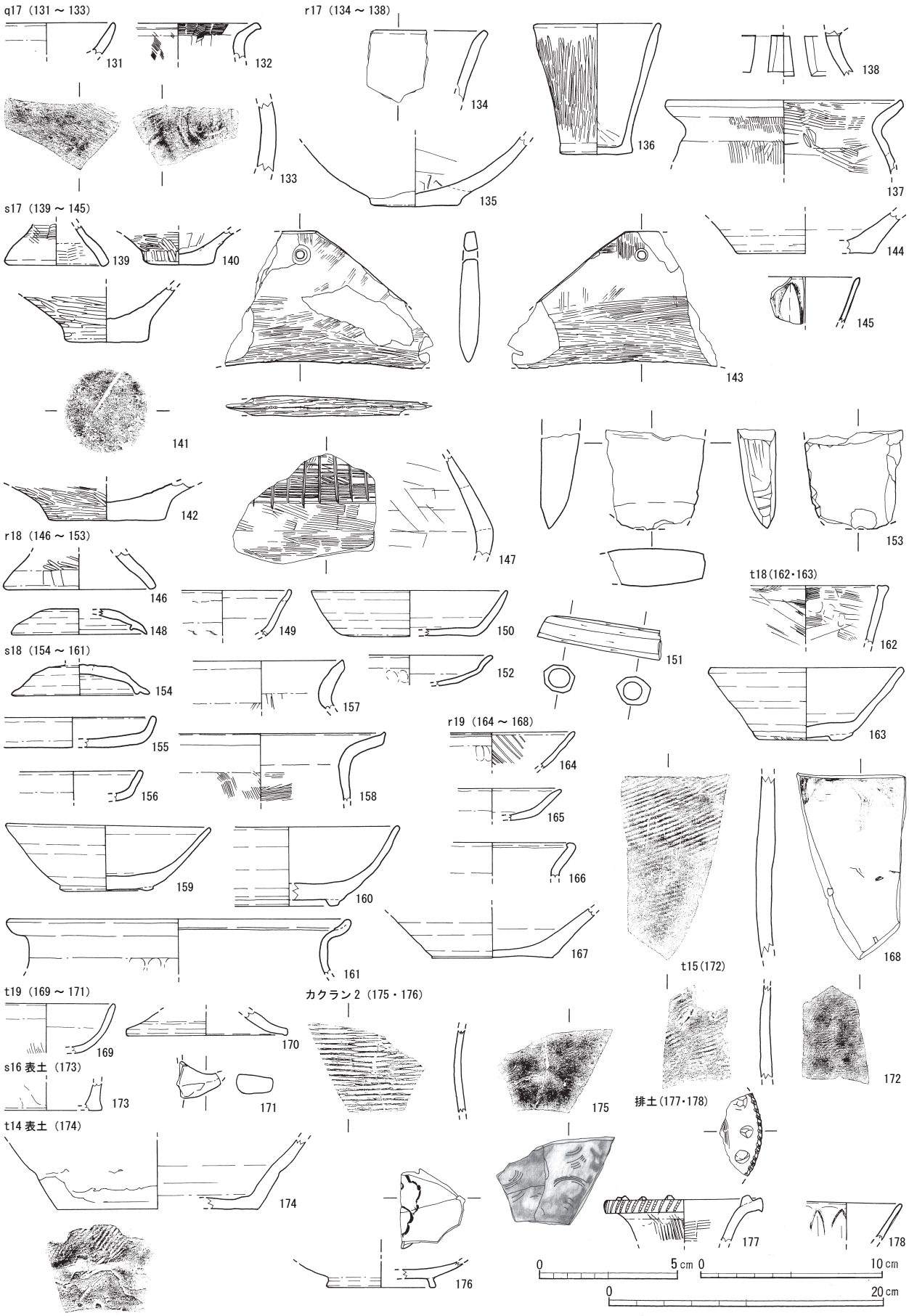
ｔ14グリッド出土遺物（75～78） 75は須恵器壺頸部と考えられ、内外面に自然釉が見られる。76は須恵器壺脚部で、斎宮Ⅰ－１期と考えられる。77は陶器鉢で、内面は底部以外、外面は高台～底部以外に施釉する。19世紀初頭のものか。78は土製品である。角柱状に加工したと思われるものの、残存するのは３面のみで、図の右側面の一部は研磨が見られる。図の右側面と左面との境は面取りが見られる。

ｑ15グリッド出土遺物（79～81） 79の須恵器杯は、外面に降灰が見られ、逆位で窯詰めされたと言える。飛鳥Ⅱ－Ⅲ期の所産である。80の須恵器杯蓋は外面に降灰が見られ正位での窯詰めがなされたものと思われる。斎宮Ⅰ－1期のものである。81は須恵器杯の口縁部で、外面に降灰が見られる。奈良時代の範疇に収まるものか。

ｒ15グリッド出土遺物（82～92） 82は須恵器杯で、



第Ⅲ－17図　第203次調査（２区）　出土遺物実測図４（78・99・113は1：2，その他は1：4）



第Ⅲ－18図　第203次調査（２区）　出土遺物実測図５（153は1：2,143は1：3，その他は1：4）

内面に煤が付着する。斎宮Ⅰ－１期のものか。83は須恵器皿で、口縁端部はやや外反し、端部には外傾する面を持つ。ＳＤ11624出土の66に類似する器種であるが、底部から体部との境に屈曲部を持つ点が異なる。斎宮Ⅰ－２～３期か。84は土師器杯で、底部から口縁部にかけてなだらかに立ち上がり、口縁端部でわずかに外反する。斎宮Ⅱ－３期のものと考えられる。85は土師器杯で、口縁部が大きく外反する。底部と口縁部との境にヨコナデにより沈線が巡る。斎宮Ⅱ－２期の所産である。86は土師器把手であるが、今回の調査で出土した他の把手と異なり、小振りの形状であるため、比較的小型の甑に伴うものの可能性がある。87は須恵器円面硯である。脚部細片で、図の両側に上下に位置をずらした方形透かしが見られる。88は緑釉陶器香炉蓋である。頂部には陰刻花文が施され、９世紀後半の所産と考えられる。89は灰釉陶器椀で、ハケヌリにより施釉する。高台部は所謂三日月状を呈し、Ｋ90－２窯式、９世紀後半の所産である。90･91は白磁皿で、別個体である。90は口縁部片で内外面に施釉が見られ、外面の口縁端部近くに沈線が見られる。白磁Ⅷのｅ期、13世紀前半代の所産と考えられる。91は底部片で内面に施釉が見られ、細片のため時期は特定できないが､90と同時期の所産と考えられるか。92は陶器擂鉢で、内外面に鉄釉を施す瀬戸美濃産である。17世紀の所産である。

ｓ15グリッド出土遺物（93～99） 93は弥生土器広口壺口縁部で、端部には櫛描波状文を、端部下半には刻み目を施す。内面はハケメ調整である。94は弥生土器甕と思われる口縁部で、口縁端部に刻み目を施し、外面にはハケメが見られる。93・94とも弥生時代中期中葉のものと思われる。95は土師器杯で、内面に斜め方向のヘラミガキを、外面はヘラケズリにより調整する。斎宮Ⅰ－３期のものである。96は須恵器杯蓋で、外面に自然釉が見られる。斎宮Ⅰ－１期の所産と考えられる。97は灰釉陶器壺口縁部で、内外面に灰釉が施釉されるがハケヌリかと思われる。斎宮Ⅱ－３期、９世紀後半～10世紀にかけてのものと考えられるか。98は陶器皿で、渥美産の５型式、13世紀前半のものである。口縁部～内面に自然釉が見られ、内面にわずかに黒いタール状のものが付着している。99は砥石で、図の上端・下端は欠損している。残存する４面は全て摺り面で、図の正面とその裏面には線状痕が残る。

ｔ15グリッド出土遺物（100～102・172） 100は土師器杯で、全体に摩滅が著しい。形状から斎宮Ⅰ－３期のものと言えるか。101は須恵器杯口縁部で、やや開き気味に立ち上がる形状である。斎宮Ⅰ－１期のものか。102は土師器杯で､口縁端部が屈曲する。斎宮Ⅱ－３期と思われる。172は須恵器甕体部片を用いた転用硯である。外面はタタキが見られ、分厚い自然釉が乗る。内面は同心円文当て具痕が残るが、摺りにより摩耗している。墨痕も僅かに付着する。

ｑ16グリッド出土遺物（103・104） 103・104は須恵器杯蓋で、103は頂部から口縁端部に向けて丸みを帯び、内面のカエリは端部よりもわずかに浮く形状である。外面に降灰が見られる。104は全体形状がうかがえる残存状況であるが摘み部は欠損する。内面のカエリが口縁端部よりも下に位置する形状である。外面に自然釉が見られる。細部に若干の差異はあるがいずれも飛鳥Ⅲ期に収まるものであろうか。

ｒ16グリッド出土遺物（105～121） 105は弥生土器小型鉢の口縁部片と思われる。口縁端部から頸部にかけての屈曲部に刻み目を施す。弥生時代後期のものか。106は弥生土器甕で、内面全体と体部外面にヨコハケ、口縁部外面はタテハケ後ヨコハケにより調整し、口縁端部には刻み目を施す。外面に煤が付着する。弥生時代後期後葉である。107は土師器の、やや大型の杯である。斎宮Ⅰ－２期の所産である。108は土師器盤の高台部と思われる。橙色で緻密な胎土を持つ。斎宮Ⅰ－２期のものである。109・110は土師器杯で、いずれもオサエ・ナデにより成形・調整される。口縁部形状が109はやや外反し、110は丸みを帯びながら立ち上がるという差異はあるものの､おおよそ斎宮Ⅱ－１期に収まるものと考える。111は土師器皿で、全体をオサエ･ナデにより成形･調整する。外反する口縁部を持ち、斎宮Ⅱ－１期の所産と思われる。112は土師器杯で、前述の109・110に比して深手で、斎宮Ⅱ－３期のものと思われる。113は不明土製品で、側面は図の上部に面取りした後、下部に面取りにより成形する。下面はナデによりやや丸みを帯びた面を持つ。上部が欠損して

おり、何らかの器物の脚部と思われる。114は土師器で移動式竈の破片と推定する。図の左面を外面として、その面はハケメによる調整、内面はオサエ・ナデ、僅かにハケメ状の線刻が残る。側面には面を持つ。上端・下端は欠損している。器壁は薄手であることから、移動式竈であるとしたら小型品と言える。115・116は須恵器杯蓋である。115は口縁部付近にのみ降灰が見られることから、上部に別個体を重ねて窯詰めしたものと推定する。116は残存する外面全体に降灰が見られる。115は頂部から口縁部にかけてやや屈曲し、ロクロケズリの範囲も比較的狭く、116は頂部からなだらかに口縁部へ到り、ロクロケズリも口縁端部まで施すという差異はあるが、時期はおおよそ斎宮Ⅰ－１期新段階～３期、すなわち奈良時代の範疇か。117 ～ 119は須恵器杯である。117は細片のため全体形状を復元できないが、比較的器壁は厚く、端部は細く摘まみ上げて収める。斎宮Ⅰ－１期か。118は117に比べて薄手で、残存部では全体をロクロナデで成形し、口縁端部はやや内傾する。斎宮Ⅰ－２期のもの。119は底部付近にロクロケズリを施すため、口縁部と底部との間がわずかに屈曲する。口縁端部から体部外面に降灰が見られることから逆位で、上部に別個体を重ねて窯詰めしたと思われる。斎宮Ⅱ－２期のもので、平安京右京三条四坊二町ＳＫ10に類例が見られる。120は灰釉陶器壺の口縁部である。口縁端部下半に僅かに無釉部分がある。斎宮Ⅱ－３期のものである。121は土師器杯で全体をオサエ・ナデにより調整し、端部をヨコナデで仕上げる。斎宮Ⅲ－２期の所産である。

ｓ16グリッド出土遺物（122 ～ 128） 122は須恵器杯Ｈ蓋を用いた転用硯である。研磨は弱いが、墨痕が残る（写真図版５－122）。須恵器自体の時期は飛鳥Ⅰ～Ⅱ期に収まるものと思われる。123は土師器高杯脚部で、端部はヨコナデ、外面はオサエ・ナデで、内面はナデにより成形・調整する。斎宮Ⅱ－３期のものであろうか。124は土師器杯で、底部外面にヘラケズリを施す。斎宮Ⅰ－１期新か。125は須恵器杯蓋で、口縁部付近のみの残存であるが外面に僅かにロクロケズリが確認できる。焼き膨れが多数あり、外面と頸部内面には自然釉が見られる。また外面に降灰が見られる。斎宮Ⅰ－２期～３期新段階までに収まるか。126は須恵器樽瓶の体部片で、頸部への立ち上がりがわずかに確認できる。外面は図の右側にロクロケズリが確認できる。これのみで時期を判断するのは難しいが、斎宮Ⅰ－１期新段階～３期、つまりおおよそ奈良時代の範疇と見てよいか。127・128は須恵器甕体部片である。外面はタタキ、内面は同心円文状当て具痕が見られるが、127は当て具痕の後にハケが施される。

ｔ16グリッド出土遺物（129・130） 129は須恵器鉢で、口縁部と外面に自然釉が見られる。細片のため時期決定は難しいが、平安京左京一条三坊十一町、立会17井戸1出土遺物に類例があり、10世紀後半代の所産と考える。130は土師器杯で、口縁部が屈曲しながら開く形状を持つ、斎宮Ⅱ－３期の所産である。

ｑ17グリッド出土遺物（131 ～ 133） 131は土師器杯口縁部片である。斎宮Ⅰ－１期のものか。132は土師器甕口縁部片で、直立気味の体部からくの字に曲がる短い口縁部をもつ。古墳時代の小型の甕であろうか。133は須恵器甕体部片である。外面はタタキ、内面は同心円文状当て具痕が見られるが、内面全体が摩耗し、特に図の下半部が強く摩耗する。ルーペで墨痕付着の有無を確認したが残存部では墨痕は確認できなかったが、ここでは転用硯の可能性があるものとして掲載した。

ｒ17グリッド出土遺物（134 ～ 138） 134は弥生土器甕と見られ、ナデ・オサエにより成形・調整する。135は弥生土器壺底部で、内面はヘラケズリが見られ、底部には工具当たり痕が明瞭である。外面はナデにより成形・調整する。弥生時代後期か。136は弥生土器小型鉢である。外面はヘラミガキにより調整し、内面上半はナデ、下半はヘラケズリ調整である。これについても弥生時代後期と考えてよいか。137は土師器甕で、口縁部から体部にかけて煤が付着する。斎宮Ⅰ―１期の所産である。138は須恵器円面硯の脚部である。長方形透かしを残存部では２カ所あく。

ｓ17グリッド出土遺物（139 ～ 145） 139は弥生土器脚付壺の脚部と思われ、外面をハケとヨコナデ、内面をハケとナデにより成形・調整する。140 ～

142は弥生土器壺の底部である。外面はヘラミガキを施し、内面は140は工具ナデの痕跡が、141・142は摩耗が著しいがナデによる調整が施される。141は底部付近に黒斑があり、体部には煤が付着している。また、底部にはモミ圧痕がみられる。143は石包丁である。おおよそ全体の３分の１が欠損しているが、孔は当初から１カ所であると考えられる。刃部は両刃である。上面･側面も研磨された面を持ち、表・裏面とも研磨による擦痕が見られる。特に刃部では横方向の擦痕は明瞭で、実際の使用を示すと思われる刃こぼれが多数確認できる。大型石包丁について論じた櫻井拓馬氏によると､弥生時代後期の｢当地域（南勢地域※山中が補足）の石包丁との比較から、刃～背部の幅が６㎝、厚さ１㎝を大きく超えるものは、大型石包丁と認定することが可能」とのことである｡今回出土した石包丁は刃～背部の幅が7.5㎝以上、厚さは1.1㎝であり、大型品としてよいかと考える。また背から刃までの平面形は括れがないことから「無側」に分類できる 。144は陶器鉢で渥美産のものと思われる。底部のみであるので時期の判断は難しい。145は青磁椀である。外面に蓮弁の陰刻が見られる。龍泉窯系で、13世紀前半の所産と思われる。

ｒ18グリッド出土遺物（146～153） 146は弥生土器台付甕での台部と思われる。外面上半はやや右下がりのヘラミガキが、下半は板状工具の横方向のナデが見られる。147は弥生土器壺の体部である。外面は横方向のハケの後、上半は簾状文を施す。弥生時代中期の所産である。148は須恵器杯蓋である。全体をロクロナデで成形する。また、外面に降灰が見られることから､正位で窯詰めしたものと言える。飛鳥Ⅱ～Ⅲ期の所産と考えられる。149は土師器杯で、粘土接合痕が顕著である。細片のため時期の特定は難しいが、斎宮Ⅰ－１期と考えてよいか。150は須恵器杯である。底部はヘラ切り後ナデ調整を施し、体部外面～内面はロクロナデ成形である。口縁部～底部外面に降灰が見られることから、逆位で窯詰めされたと言える。斎宮Ⅰ－２期の所産と思われる。151は須恵器水注の注口部である。体部に接続する部分は欠損しており、まだわずかに伸びる可能性はあるが、注ぎ口先はほぼ残存している。棒状具に粘土を巻き付け、ヘラケズリにより成形し、９面の面を持つ。このヘラケズリの方向は同方向ではないが、１面中では一定の方向でケズリを施す。本例のような長い注口部を持つ例を検索できていないが、おおよそ斎宮Ⅱ－１～２期、９世紀前半代の所産と考えられる。152は土師器杯で、口縁部は僅かに外反する。斎宮Ⅱ－２期のものである。153は小型の磨製石斧である｡図の右側面と上部が欠損する。両刃であり、側面に僅かに擦痕が見られるものの、全体に擦痕は見られない。

ｓ18グリッド出土遺物（154～161） 154は須恵器杯蓋で摘みは欠損している。外面は自然釉が厚く付着し調整不明瞭である。飛鳥Ⅱ期か。155・156は土師器皿で、155底部外面はナデ・オサエ、内面はナデにより調整する。内面に線刻状の刻みが見られるが、意図的なものではないと判断した。斎宮Ⅰ－２期の所産と思われる。156は155に比して器壁が薄く、口縁部もやや外反することからやや時期は下がり、斎宮Ⅰ－３期中～新のものと判断した。157・158は土師器甕で、157に比して158は口縁部が強く外反する特徴がある。このことから、158の方が若干新しい時期のものと考えられ、157は斎宮Ⅰ－１期、158は斎宮Ⅰ－２期と推定した。159・160は陶器椀である。159は底部内面が摩耗する。160は口縁部から内面にかけて自然釉が見られ、細片のため摩耗の状況は確認できない。いずれも渥美産の５型式後段階～６型式、12世紀前半代と思われる。161は南伊勢系土師器鍋で、内外面に煤が付着する。伊藤編年第一段階､13世紀前半代の所産と考えられる。

ｔ18グリッド出土遺物（162・163） 162は弥生土器の鉢の口縁部と考えられる。内外面に工具によるナデ調整痕が確認できる。163は陶器椀で、口縁部～内面にかけて自然釉が付着する。摩耗の状況は確認できない。胎土等の特徴から知多産の６型式、12世紀前半代の所産と考える。

ｒ19グリッド出土遺物（164～168） 164は土師器杯で、内面に斜め方向のヘラミガキを施す。口縁端部外面には１条の沈線が巡る。斎宮Ⅰ－２期の所産と考えられる。165は土師器杯で、口縁部がやや外反する。斎宮Ⅱ－２期のものである。166は土師器甕口縁部で､端部は内側に倒しながら丸くおさめる。

斎宮Ⅱ－１期新～２期のものであろうか。167は須恵器鉢底部である。底部はヘラ切り離し後不調整である。体部外面・内面ともロクロナデにより成形・調整する。底部のみのため時期の判断が難しいが、斎宮Ⅰ－２～３期のものか。168は須恵器甕体部片を用いた転用硯である。外面はタタキ調整、内面は研磨のため調整不明であるが、モミ殻圧痕と思われる窪みが確認できる。研磨は全体に渡り、図の上部に墨痕が明瞭である。墨痕付着部の割れ面に墨痕が見られないことから、本来は硯としてはもう少し大きかったと言える。

ｔ19グリッド出土遺物（169～171） 169は土師器杯で底部外面に僅かにハケが見られる。古墳時代から続く系統の杯であり、時期も飛鳥時代までに収まるものと思われる。170は土師器高杯脚部で、当調査区の北西、第197次調査で複数出土した古墳時代の高杯に類似する。古墳時代中期、辻編年 第４段階、陶邑編年ＴＫ23～ＴＫ47型式併行期のものと思われる。171は土師器把手であり、小型の甕のものと思われる。

（６）その他（第Ⅲ－18図）

表土出土遺物（173・174） 表土からの遺物はさほど多くない。173は志摩式製塩土器である。174は須恵器壺底部と思われ、体部外面の上半にタタキが、下半にロクロケズリを施す。内面はナデ、オサエにより調整する。平安時代前期のものか。

攪乱部出土遺物（175・176） 175はＳＢ11620・11621の柱穴６に及ぶ攪乱土坑から出土した須恵器甕体部を用いた転用硯である。比較的薄手の甕で、外面にはタタキ、内面には同心円文状当て具痕が見られるが、研磨により不明瞭である。濃淡はあるもののほぼ全体に墨痕が見られる。割れ面に墨の付着が見られず、研磨が破片の際まで及ぶことから、本来転用硯として利用した破片は更に大きいものと言える。176はＳＢ11621の間仕切り柱の可能性を想定した柱穴13の南辺を削平する攪乱溝から出土した、緑釉緑彩陶器椀である。内面に緑釉により花弁を描いている。９世紀代の所産である。

排土出土遺物（177・178） 177は弥生土器壺口縁部である。内面に瘤状突起が３カ所確認できる。口縁端部には櫛状工具による刺突文が施される。弥生時代中期のものである。178は青磁椀で、外面に縞蓮弁文が陰刻される。龍泉窯系で、13世紀前半代の所産である。

５　まとめ

（１）各時代の遺構変遷

第203次（２区）調査区では、遺構としては弥生時代中期中葉～後期、飛鳥時代、奈良時代、平安時代前期、平安時代末～鎌倉時代のものが確認でき、遺物はそれらに加えて、古墳時代中後期、近世が出土している。それぞれについて簡単に触れていく。

①弥生時代

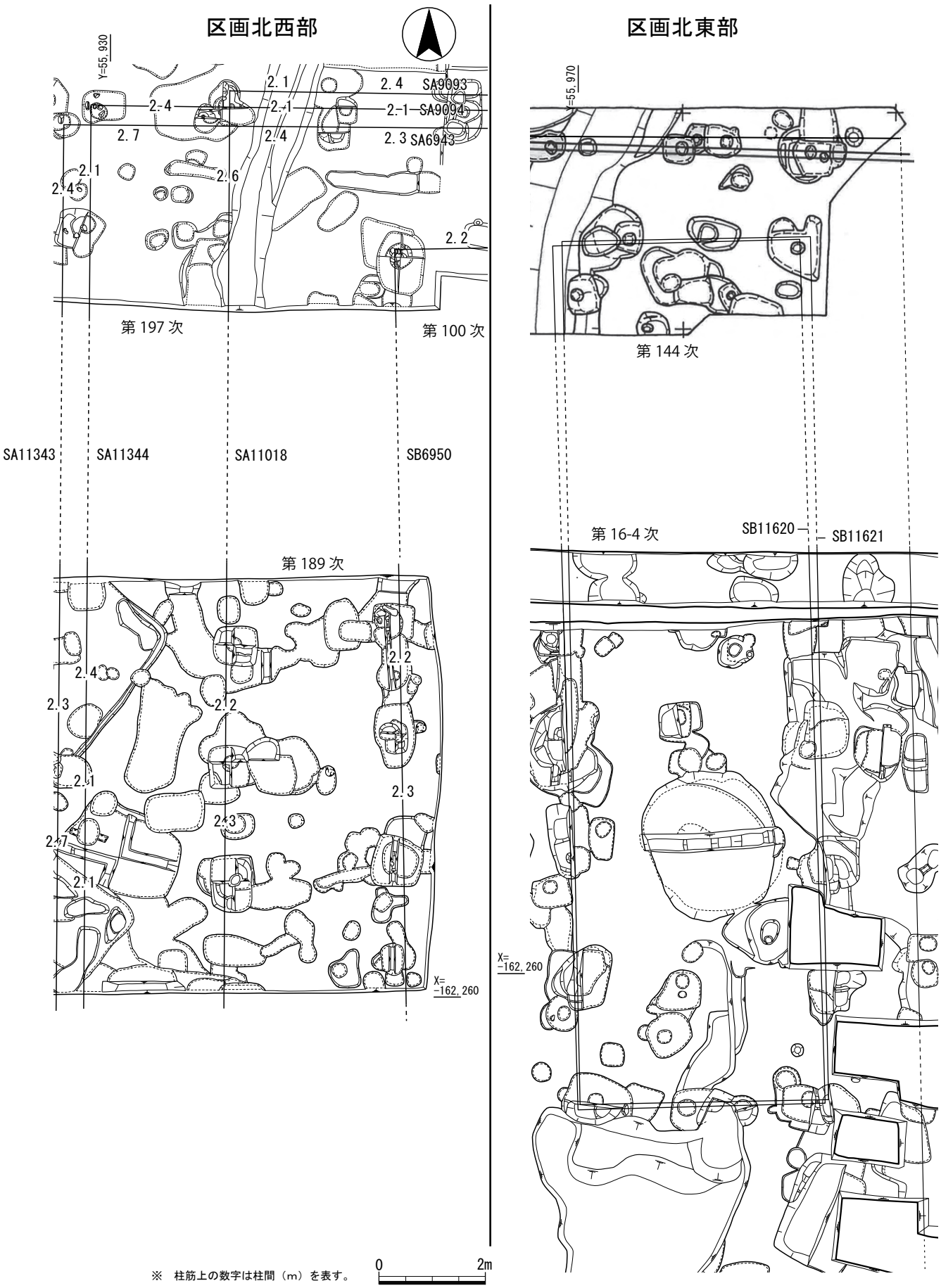
中期中葉のＳＺ11616と後期となるＳＺ11623は出土遺物の時期もあるが、遺構が重複することによりその時期差を捕えることができた。その他、規模や形状は異なるが長方形土坑３基確認している。周辺調査歴で見られるように本調査地周辺は中期中葉の墓域と認識されており、ＳＺ11616はその範囲に収まるが、今回新たに後期の墳墓が確認されたことで、継続的に墓域として認識されていたことを示す。また、遺物包含層から出土した大型石包丁の存在は、近在に集落が存在する可能性を示す[④]。

②古墳時代後期

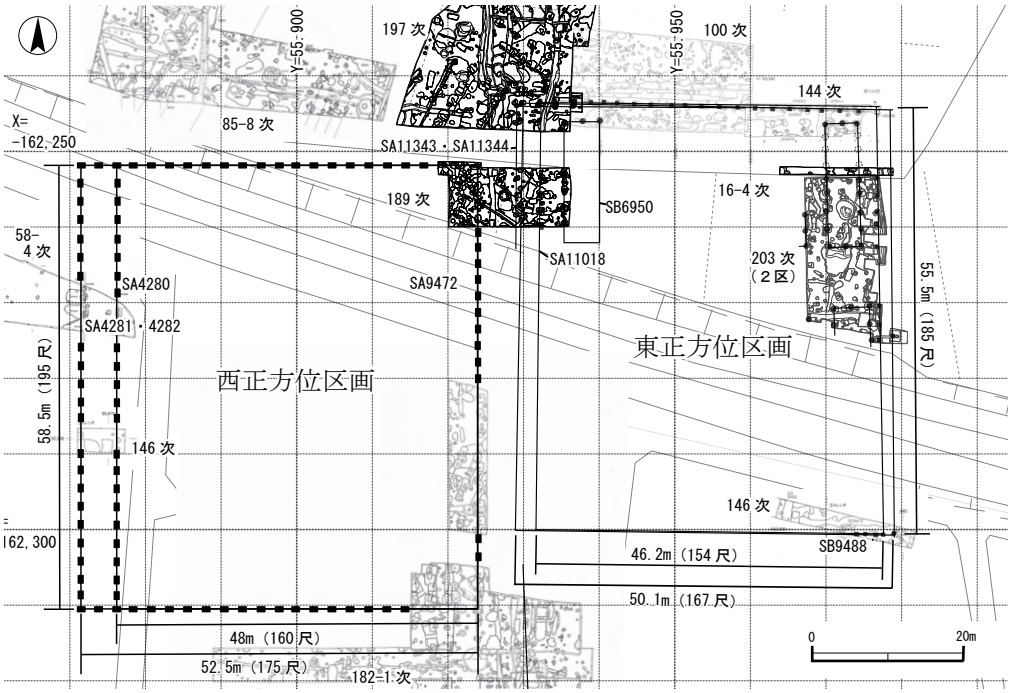
遺構は確認されていないが、第197次調査において出土した土師器高杯と同時期の高杯脚部が出土した。第197次調査では、古墳時代中期の方形土坑や竪穴建物の確認、土師器高杯の複数出土や勾玉形・剣形の石製模造品が出土しており、今回の調査区附近も、段丘縁辺部で行われた祭祀行為の影響下にあったと考えてよいだろう。

③飛鳥時代

ＳＫ11613は主軸方向がN22°Ｅで、飛鳥時代方形区画の主軸方向N33°Ｅとは異なるが、区画から離れていることもあり、さほど規制されていないと考える。これはＳＢ11628も同様で、遺構重複関係や出土遺物からこの段階の遺構と考えざるを得ないが、小型柱穴の建物であるのでさほど規制をされておらず、周辺にはこのような小型掘立柱建物が点在していたと考えてよいか。また、須恵器杯蓋を用いた転



第Ⅲ－19図　調査区北西・北東部の掘立柱塀・掘立柱建物　平面図（1：100）



第Ⅲ－20図　中垣内地区における正方位区画（1：1,000）

用硯（122）の出土も、当地での活動をうかがえる。

④奈良時代

ＳＢ11620とＳＢ11622が南北に並ぶことが分かった。しかし、東正方位区画の東を区切る掘立柱塀は今回の調査区内には存在しない。建物以外の遺構については確認できていないが、平安時代に下る可能性もある円面硯や転用硯の出土等から、公的施設の建物と言えるだろう。

⑤平安時代前期

奈良時代の建物であるＳＢ11620の位置をほぼ踏襲して建てられたＳＢ11621とその東側のＳＡ11629がある。これらから、東正方位区画には平安時代前期にも機能したことが分かった。出土遺物には、ＳＢ11621が位置する調査区北部で遺物包含層からの出土であるが土師器杯の油煙痕の見られる破片が比較的多く出土し、また、奈良時代との判別が困難ではあるが円面硯２片や須恵器甕体部を用いた転用硯３点の出土など、より実務を伴う公的施設として機能していたものと考えられる。緑釉陶器香炉蓋や緑釉緑彩陶器の出土など、史跡東部の方格街区などの調査成果とも共通する。

しかし、８世紀末、光仁朝に史跡東部へと移動し、９世紀前半に離宮院へ移転しながら再度多気郡へと移転したとされる史跡東部の斎宮との関連は今後の課題である。

⑥平安時代末～鎌倉時代

ＳＤ11612とＳＤ11615により区画する屋敷地としての様相を示す。掘立柱建物の柱穴は重複する遺構も多く検討できていないが、ＳＥ11625もあり、一般的な集落としての様相を示していたと考える。それは南勢地域で一般的に出土する南伊勢系土師器鍋等の出土からもうかがえる。

⑦近世

隣接する調査地のように、遺物包含層も含め当該時期の遺物はほとんど見られない。陶器鉢（77）もあり、当該時期の活動の中心からは外れていたと言える。

（２）東正方位区画北東部の構造

今回確認した東正方位区画の北東部の構造を、北西部での調査成果と比較しながら見ていく。

北西部角の調査では、それぞれ柱穴の重複関係を明らかにした。また、北西隅に南北棟の掘立柱建物ＳＢ6950を確認している。ＳＢ6950は第189次調査では南北柱列が確認されており、が、この建物は建替えについては不明であり、どの段階の掘立柱列に伴う建物かは不明である。とりあえずここでは、このＳＢ6950を掘立柱列の位置を論じるための基

準として位置づける。

①第一段階

東西方向ＳＡ9093・南北方向ＳＡ11018の柱列で、ＳＢ6950の北梁行とＳＡ9093間は約2.85m（9.5尺）、ＳＢ6950の西側柱列とＳＡ11018間は約3.3ｍ（11尺）である。掘立柱列の柱穴はＳＡ9093は柱穴が重複するため全体形状は不明であるが、南北方向のＳＡ11018は一辺約0.8ｍの隅丸方形を呈し、柱底の標高は13.15ｍである。

②第二段階

東西方向ＳＡ6943・南北方向ＳＡ11343の柱列で、南北方向の柱列は第一段階から西へ約3.15ｍ移動する。東西方向は南へ約0.6ｍずれる程度である。ＳＢ6950の北梁行とＳＡ6943間は約2.25m（7.5尺）、ＳＢ6950の西側柱列とＳＡ11343間は約6.3m（21尺）である。掘立柱列の柱穴はＳＡ9093では一辺約0.5ｍの楕円形状に近い長方形、南北方向のＳＡ11343は一辺約0.6ｍの隅丸長方形を呈し、柱底の標高は13.0～13.1ｍである。

③第三段階

東西方向ＳＡ9094・南北方向ＳＡ11344の柱列で、南北方向の柱列は第二段階から東へ約0.5ｍ移動するが、ほぼ同位置を踏襲していると言えるだろう。東西方向も北へ約0.35ｍずれ、これもほぼ同位置を志向している。ＳＢ6950の北梁行とＳＡ9094間は約2.6ｍ（約8.7尺）、ＳＢ6950の西側柱列とＳＡ11344間は約5.8ｍ（約19.3尺）である。掘立柱列の柱穴はＳＡ9094では一辺約0.5～0.8ｍの長方形、南北方向のＳＡ11344は一辺約0.6ｍの隅丸方形や円形に近い形状を呈する。柱底の標高は13.2ｍである。

以上の検討から、

・第二段階において西へ拡張していること
・第三段階はほぼ同位置に建替えていること
・柱穴形状は第一段階が比較的大型であり、形状も整える傾向があるが、第二段階以降は柱穴も小さくなり、形状も揃わない。

ということが言える。

（３）東正方位区画の構造復元

東正方位区画は北西部の調査成果から、掘立柱塀は２回の建替えが行われ、３段階であったことが分かっている。今回の調査で、少なくとも平安時代前期、９世紀後半代にこの正方位区画が営まれていた可能性が浮上した。

８世紀前半代には、ＳＢ11620・ＳＢ11622が脇殿状に配置される。ＳＢ11620に対応する区画北西部にはＳＢ6950が位置し、このＳＢ6950は同様に８間×２間の建物の可能性がある。また、南北方向の掘立柱塀は西側はＳＢ6950から約3.3ｍの間隔で設置され、それと東側も同様と考えると、当該時期の東掘立柱塀は調査区外にあり、当調査の南東部の拡張部分で確認した２カ所のピットのいずれかがその柱穴と考えられる。

また、ＳＢ11620の西、調査区壁際では、黄褐色土を充填される柱穴と抜取穴を確認している。この柱穴は、ＳＢ11620に隣接する建物のものと考えられ、その位置はＳＢ11620の南梁行柱と筋が揃い、南東隅柱との間隔は約３ｍである。

９世紀後半代には、区画北東部ではＳＢ11621と約２ｍの間隔でＳＡ11629が設置される。北西部で確認した掘立柱塀と建物と同じ間隔ではなく、飛鳥時代から少なくとも８世紀前半代まで見られた対称的配置はこの時期にはとられていないのかもしれない。

補足として、飛鳥時代方形区画でも特徴的であった柱抜取痕に充填される「白色土」（黄褐色土）について簡単に触れる。これまでの調査で、この「白色土」は飛鳥時代１期の柱抜取痕に混入するが掘方には入らない。そして、２期の柱掘方にはブロック状に入り、柱抜取にも入ることが分かっていた。また、第197次調査で確認した正方位（奈良時代）の遺構では、調査区北部のＳＢ11342・11345では掘方にも抜取痕にも白色土が充填されるが調査区南部の奈良時代掘立柱塀群やＳＢ6950では柱抜取痕にのみ白色土は入り、掘立柱塀に並行するＳＤ6950の最終埋土にも確認できる。以上の状況から、白色土は飛鳥時代1期遺構の廃絶段階には存在し、奈良時代の遺構から、調査区北部では白色土の分布は濃厚で、調査区南東部では少ないことから、飛鳥時代の遺構に伴うものが正方位の遺構に混入したものと考えていた。しかし、今回、飛鳥の方形区画から離

れた当調査区の掘立柱建物においても柱抜取痕等からこの白色土が見られることから、奈良時代、また平安時代前期の建物においても、白色土が何らかの構築物として当地点に持ち込まれていたと考えてよいだろう。

今回の調査では、東正方位区画の奈良時代における東西規模を明らかにすることはできなかった。しかしながら、飛鳥方形区画と同様、南北棟の建物が並列することが確認でき、主軸方向を変えつつも、区画内の構造は前代を踏襲したことが分かった。

また、平安時代前期の掘立柱建物と塀を確認したことで、史跡東部の方格街区との関連の有無等、新たな課題が発生した。これまでの東正方位区画に関わる調査成果や出土遺物を再検討・整理することにより、史跡西部における平安時代の様相についても明らかにする必要がある。

---

① 中野『中世の土器』1995

② 櫻井拓馬2023「弥生時代後期以降に残存する大型石包丁とその評価」(『Mie history』Vol.30 三重歴史文化研究会)

③ 辻美紀1999「古墳時代の中・後期の土師器に関する一考察」(『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』大阪大学考古学研究室)

④ 前掲註２櫻井2023 ８ページより。

遺構名	調査時遺構名		グリッド	長軸	短軸	深さ(検出面から)	完掘・未掘	埋土		時期	出土遺物	備考
SD11612	溝	1	t14・t15・t16・t17	東西8.6m 南北4.6m	幅0.5～0.8m	14cm	完掘	E	円礫混	鎌倉	土師器皿・甕、須恵器杯蓋	
SK11613	土坑	2	s16・s17	1.5m	0.7m	5.5cm	半裁	BかE		飛鳥か	土師器甕片1片のみ	
SK11614	土坑	3	s17	20.2m	幅0.84～1.4m	17.7～17.5cm	未掘	A		弥生	弥生土器、円面硯、陶磁器・瓦、土師器鍋・焙烙、鉄製品包丁	
SD11615	溝	4	q18・r18・s18・q19・r19・s19	0.8m	幅0.4m	5.5cm	完掘	E		古墳～奈良	土師器甕片	
SZ11616	溝	5	s19	3.7m	幅0.95m	0.6m	未掘	A		飛鳥	弥生土器ピアマグ	溝18と組み合う。方形周溝墓
SD11618	溝	6	r17・r18	2.2m	幅0.3～0.45m	4cm	未掘	A		飛鳥・奈良	土師器杯片	方形周溝墓か
SK11619	土坑	7	q18	2.2m	0.8m	22cm	未掘	A		鎌倉	土師器小皿片	
SZ11623	溝	8	r17・r18	東西8.4m 南北5.6m	幅0.3～0.65m	15～22cm	未掘	A		近世	青磁、弥生土器、土師器焙烙、	
SD11624	溝	9	q14・q15・q16	1.6m	1.2m	23cm	完掘	E	円礫混	古墳～古代	剣形石製模造品、土師器高杯・甕体部片	
SE11625	土坑	10	r15・s15				一部断割	E	円礫混			
―	溝	11	r15	2.2m以上	1.84m	9cm	未掘	A		古墳	土師器高杯脚部・甕体部	ピットの連続
―	溝	12	q15・r15・q16・r16				未掘	F	砂混			
―	溝	13	r14	12.6m	58～71cm	9～22cm	未掘	C	白強め	近世	土師器鍋、弥生壺底、須恵器壺・甕、近世陶器	柱抜取痕か
SD11626	溝	14	q15・r15	5m以上	1.9m以上	4～6.5cm	完掘	A		弥生	弥生細頸壺	同一遺構か
SD11617	溝	15	q15・r15・q16・r16				未掘	B・F	砂混			
―	溝	16	q17・r17				一部完掘	A				SZ11624
SD11627	溝	17	r17				?	F				SZ11624
―	溝	18	r18・s18					A	少しFに近い			土器出土(№1)

埋土 A:黒色 B:灰色 C:白色ブロック混 D:薄い黒色 E:薄い茶色 F:黒色に橙色ブロック混 白:白色ほぼ混り無し

第Ⅲ－１表 第 203 次調査（２区） 遺構一覧

遺構名	調査時遺構名	時期	建物平面規模		建物面積(㎡)	柱間寸法(m)	柱穴平面規模		柱底深さ(m)	柱抜取穴	布掘り	方向	建物軸	備考
			柱間(間)	桁行(m)梁行(m)			柱穴掘方(m)	柱痕跡(直径m)	検出面から(標高)					
SA11629	柱列1	平安前期	3+	8.2+	－	2.2/2.4/2.5	0.6～1.0	0.18	0.4～0.6 (12.7～13.1)	×	×	東西	N33° E	拡張部で確認
SB11620	建物1	奈良	10 3+	22.6 6.2+	－	2.4/2.3/2.4/2.1/2.1/2.1/2.4/2.2/2.4/2.2/2.0/2.1/2.1	0.6～1.2	0.14	0.35～0.55 (12.7～13.3)	×	×	南北	N33° E	拡張後の南北方向塀SB11330を伴う,旧SA11120(概報H30)
SB11621	建物1	平安前期	1 2	3.1 3.0	9.3	3.1 1.5/1.5	1.0～1.2	0.18	0.55 (13.0～13.1)	○	×	東西	N33° E	建替え前SB11110と組み合う
SB11622	建物2	奈良	1 2	3.1 2.6	8.1	3.1 1.3/1.3	0.6～1.0	0.18	0.6～0.7 (12.8～12.9)	×	×	東西	N33° E	建替え後SA11310に取り付く
SB11628	－	古墳	6 2	13.5 5.0	67.0	2.2/2.3/2.1/2.3/2.3/2.3 2.5/2.5	0.85～1.2	0.2	0.4～0.5 (13.0～13.2)	○	×	南北	N33° E	

第Ⅲ－２表 第 203 次調査（２区） 掘立柱塀・掘立柱建物一覧

番号	器種	器形	地区 遺構	法量(cm)・重量(g)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	実測番号
1	弥生土器	壺	r18 SZ11623	底径 6.0 残存高 2.1	外面:ﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ	密	良	橙7.5YR7/6	底部3/12	005-04
2	弥生土器	高杯	r17 SZ11624 土器№.1	口径 14.9 器高 12.3 脚径 9.9	外面:ﾐｶﾞｷ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ,ﾊｹ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	浅黄橙10YR8/3	口縁部9/12 底部7/12	002-04
3	弥生土器	高杯	q17 SZ11624 土器№.1	口径 24.7 器高 16.9 底径 12.8	外面:ﾐｶﾞｷ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾐｶﾞｷ,ｼﾎﾞﾘ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙5YR6/6	口縁部2/12 底部ほぼ完存	003-01
4	弥生土器	鉢か	s17 SK11614	残存高 3.1	外面:ﾅﾃﾞ・ｵｻｴ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	灰褐7.5YR6/2	口縁部1/12 未満	003-04
5	弥生土器	壺	r17 SD11627 土器№.2	口径 6.0 器高 23.7 底径 6.7	外面:ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ,櫛描直線文,体部下半煤付着により不明瞭,ﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ,ﾕﾋﾞﾅﾃﾞ,ｵｻｴ	密	良	黄橙10YR8/6	口縁部1/12 底部ほぼ完存	004-01
6	須恵器	杯蓋	s17 SK11613 №.1	口径 7.0 器高 2.6	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ,摘み貼付,降灰 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ	密	良	黄灰2.5Y6/1	口縁部7/12	001-03
7	須恵器	壺か	s17 SK11613 №.1	残存高 4.3	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　降灰	密	良	黄灰2.5Y5/1	口縁部1/12未満	002-01
8	土師器	皿	t15 SP2 SA11630柱穴2	残存高 1.3	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙2.5YR6/8	口縁部1/12	020-01
9	土師器	甕	t19 SP4 SA11630柱穴6	口径 18.4 残存高 4.9	外面:ﾊｹ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾊｹ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	灰黄褐10YR6/2	口縁部1/12 未満	019-06
10	鉄製品	釘か	t18 SP1 SA11630柱穴5	3.3×2.2,厚さ 0.45,重量 4.02		-	-	-	-	020-02
11	土師器	杯	r15 SP1 SB11621柱穴2柱抜取	残存高 2.6	外面:ﾖｺﾅﾃﾞ,ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙5YR6/6	口縁部1/12	023-03
12	土師器	杯	r15 SP12 №.1 SB11621柱穴4掘方	口径 13.2 残存高 3.7	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部9/12	023-04
13	土師器	杯	r15 SP12 №.1 SB11621柱穴4掘方	口径(推定)14.4 残存高 2.5	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙5YR6/6	口縁部1/12	020-10
14	土師器	甕	r16 SP6 SB11621柱穴4柱抜取	残存高 2.7	外面:ﾅﾃﾞ・ｵｻｴ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾊｹ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12	020-09
15	須恵器	高杯	r16 SP6 SB11621柱穴4柱抜取 r16 包	底径 10.7 残存高 2.5	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	不良	橙2.5YR6/6	底部1/12	020-03
16	灰釉陶器	壺	r16 SP6 SB11621柱穴4柱抜取	残存高 2.1	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,施釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,施釉	密	良	釉:威光茶990,素地:にぶい黄橙10YR7/2	口縁部1/12未満	020-08
17	須恵器	杯蓋	r16 SP3 SB11620柱穴5掘方	残存高 1.4	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ　自然釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	黄灰2.5Y6/1	口縁部1/12未満	020-06
18	土師器	甕	r16 SP3 SB11620柱穴5柱痕跡	残存高 2.5	外面:ﾖｺﾅﾃﾞ　摩耗 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ　摩耗	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部1/12未満	023-08
19	土師器	杯	s14 SP1 SB11620柱穴12	残存高 1.7	外面:ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾐｶﾞｷ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙5YR6/6	口縁部1/12	022-04
20	弥生土器	甕	r18 SP3 SB11622柱穴2掘方 北東	残存高 4.1	外面:ﾅﾃﾞ,刻み目 内面:板ﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ	やや粗	良	橙2.5YR6/6	口縁部1/12	020-07
21	須恵器	杯蓋	r19 SP2 SB11622柱穴1	残存高 1.1	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　自然釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	黄灰2.5Y6/1	口縁部1/12	020-05
22	須恵器	杯か	t19 SP7 SB11622柱穴5	残存高 2.0	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	灰白2.5Y7/1	口縁部1/12未満	020-04
23	土製品	不明品	s17 SP1 SB11628柱穴2	残存長 3.2,幅 2.0,厚み 1.0,重量5.71g,ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ		やや粗	やや不良	灰黄褐10YR5/2	-	024-03
24	須恵器	杯	s18 SP1 SB11628柱穴6	口径 9.7 器高 2.9	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛ切り離し後ﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ　自然釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,仕上げﾅﾃﾞ　自然釉	密	良	黄灰2.5Y6/1	口縁部2/12	024-04
25	陶器	小皿	r14 SP4	残存高 1.2	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部1/12	022-03
26	土師器	杯蓋	s14 SP3-2	残存高1.9	外面:ﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ	密	良	橙2.5YR6/8	摘み部ほぼ完存	022-06
27	土師器	甕	s14 SP3-2	残存高 6.8	外面:ﾊｹ,ﾖｺﾅﾃﾞ　薄く煤付着 内面:ﾊｹ,ｹｽﾞﾘ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12	022-07
28	須恵器	甕	s14 SP3-2	残存高 3.8	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	黄灰2.5Y5/1	口縁部1/12未満	022-05
29	須恵器	杯	s14 SP3-3 東	残存高 2.3	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	褐灰7.5YR5/1	口縁部1/12	023-01
30	土師器	杯/皿	q15 SP4	残存高 1.7	外面:ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾐｶﾞｷ?,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙2.5YR6/6	口縁部1/12未満	023-02
31	土師器	杯	s15 SP1	口径(推定)11.8 残存高 1.7	外面:ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部1/12	023-05
32	土師器	杯	r16 SP1 SB11621柱穴13掘方	残存高 2.2	外面:ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙5YR7/6	口縁部1/12～ 2/12	023-06
33	土師器	皿	r16 SP1 柱痕跡	残存高 1.7	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾐｶﾞｷ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙5YR6/8	口縁部1/12未満	023-07
34	土師器	杯	r16 SP4	残存高 1.7	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12	023-09
35	土師器	杯蓋	r16 SP7 柱痕跡	摘み径(推定)2.9 残存高 1.1	外面:ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ	密	良	明赤褐2.5YR5/6	摘み部3/12	024-01
36	須恵器	壺蓋か	r16 SP7	残存高 3.0	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	黄灰2.5Y6/1	口縁部1/12未満	023-10
37	須恵器	杯	r16 SP9	残存高 1.9	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	暗青灰10BG4/1	口縁部1/12未満	024-02
38	土師器	皿	r19 SP1	残存高 1.9	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙5YR6/6	口縁部1/12	021-02
39	土師器	杯	r19 SP1	残存高 3.2	外面:ﾍﾗｹｽﾞﾘ?,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾐｶﾞｷ?,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙2.5YR6/8	口縁部1/12	021-03
40	土師器	皿	s19 SP4	残存高 2.0	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ(ﾐｶﾞｷの可能性があるが不明瞭)	密	良	橙2.5YR7/8	口縁部1/12	021-01
41	土師器	杯蓋	s19 SP5	残存高 2.0	外面:ﾐｶﾞｷ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙2.5YR6/6	口縁部1/12未満	024-06
42	須恵器	小型壺か	t19 SP1	残存高 1.2	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	灰白2.5Y7/1	口縁部1/12	024-05
43	土師器	甕	s15 SE11625	口径 16.8 残存高 3.1	外面:ﾊｹ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾊｹ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12	005-08
44	須恵器	杯蓋	s15 SE11625	残存高 1.6	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	灰白2.5Y8/1	口縁部1/12未満	005-07
45	灰釉陶器	段皿	s15 SE11625	残存高 1.7	外面:ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ,高台貼付 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,施釉(ﾊｹﾇﾘか)	密	良	釉:カーキ色799,素地:灰黄2.5Y7/2	-	001-06

第Ⅲ－３表　第 203 次調査（２区）　遺物観察表１

番号	器種	器形	地区 遺構	法量(cm)・重量(g)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	実測番号
46	土師器	鍋	s15 SE11625	口径 22.5 残存高 3.7	外面:ﾖｺﾅﾃﾞ,ｵｻｴ　煤付着 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ,ｹｽﾞﾘ　煤付着	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部1/12	001-07
47	土師器	鍋	s15 SE11625	口径 30.5 残存高 2.8	外面:ﾖｺﾅﾃﾞ　煤付着 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部1/12未満	001-05
48	陶器	椀	s15 SE11625	口径 15.2 器高 5.3 底径 5.8	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,糸切り後ﾅﾃﾞ,高台貼付　籾殻痕　体部下半～底部煤付着 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,仕上げ位置方向ﾅﾃﾞ　摩耗	密	良	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部5/12 底部完存	001-02
49	陶器	椀	s15 SE11625	口径 16.2 器高 5.0 底径 7.2	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,糸切後ﾅﾃﾞ,高台貼付　籾殻痕　自然釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　見込み部摩耗　内面全体煤付着	密	良	浅黄2.5Y7/3	口縁部1/12 底部6/12	006-01
50	陶器	鉢	s15 SE11625	底径 13.4 残存高 6.5	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ,切り離し後ﾅﾃﾞ,高台貼付 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　摩耗	密	良	黄灰2.5Y6/1	底部3/12	001-01
51	土師器	甕	t16 SD11612	残存高 3.8	外面:ﾊｹ,線刻 内面:板ﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	-	003-03
52	須恵器	高杯	t19 SD11612	残存高 3.5	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　自然釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ｼﾎﾞﾘ　降灰　焼膨れあり	密	良	灰白2.5Y7/1	残存高3.5	003-02
53	土師器	皿	t19 SD11612	口径 11.7 残存高 2.3	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	浅黄橙7.5YR8/4	口縁部10/12	002-02
54	土師器	鍋	t18 SD11612	口径 32.0 残存高 1.5	外面:ﾖｺﾅﾃﾞか　煤厚く付着し不明瞭 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部1/12未満	001-08
55	陶器	椀	t14 SD11612	底径 6.9 残存高 1.9	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,糸切り後ﾅﾃﾞ,高台貼付 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　摩耗	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	底部11/12	001-04
56	陶器	甕	t19 SD11612	底径 17.4 残存高 12.9	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ｽﾀﾝﾌﾟ文,ﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ,ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾕﾋﾞﾅﾃﾞ　自然釉　降灰塊付着	密	良	橙5YR7/6	底部3/12	002-03
57	弥生土器	鉢	q18 SD11615 s17 包	残存高 11.3	外面:ｵｻｴ,ﾅﾃﾞ　煤付着 内面:ﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12	016-02
58	石整品	磨製石斧	r18 SD11615	4.1×3.1 残存最大幅 2.2	重量7.87g 両面・側面に擦痕あり　側面一部に自然面残る	-	-	-	刃部残存	005-03
59	土師器	杯	s18 SD11615	残存高 5.6	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾐｶｷ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部1/12未満	004-04
60	須恵器	杯	r18 SD11615	口径 8.1 器高 2.8	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾍﾗ切り離し後ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ　降灰　自然釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	灰白2.5Y7/1	口縁部3/12	003-05
61	須恵器	壺	r18 SD11615	残存高 3.8	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,沈線,櫛描波状文　自然釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　焼膨れ	密	良	黄灰2.5Y6/1	-	004-02
62	土師器	杯	r18 SD11615	口径(推定)12.6 器高 2.6	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙5YR6/8	口縁部2/12	005-01
63	土師器	把手	s18 SD11615	残存高 6.1	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	把手完存	005-02
64	須恵器	甕	r18 SD11615	残存高 9.9	外面:ﾅﾃﾞ,ﾀﾀｷ 内面:ﾅﾃﾞ　降灰　煤付着	密	良	黄灰2.5Y5/1	底部1/12	004-03
65	土師器	甕	q14 SD11624 №1	残存高3.1	外面:ﾖｺﾅﾃﾞ,摩滅著しく不明 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾊｹ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12未満	005-06
66	須恵器	皿	q15 SD11624	口径(推定)27.4 残存高3.7	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ　底部摩耗 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	灰黄2.5Y7/2	口縁部1/12	005-05
67	土師器	甕	q14 包	口径 15.8 残存高 2.9	外面:ﾊｹ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙5YR7/6	口縁部1/12	006-02
68	土師器	把手	q14 包	残存高 4.8	外面:ﾅﾃﾞ・ｵｻｴ,工具当たり痕 内面:ﾊｹ,ｵｻｴ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	把手完存	006-04
69	須恵器	皿	q14 包	底径 16.6 残存高 1.7	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾍﾗ切後ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	灰白5Y7/1	口縁部1/12	006-03
70	須恵器	甕	r14 包	残存高 3.7	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,波状文,自然釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,波状文	密	良	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部1/12	006-05
71	弥生土器	甕	s14 包	残存高 5.0	外面:ﾊｹ,刻み目,ﾅﾃﾞ,煤付着 内面:ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12未満	006-06
72	土師器	高杯か	s14 包	残存高 2.4	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ,黒斑 内面:ﾊｹ,ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12	006-07
73	土師器	杯	s14 包	残存高 2.7	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部1/12未満	006-08
74	陶器	鉢	s14 包	残存高 2.7	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　自然釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　自然釉	密	良	灰黄褐10YR6/2	口縁部1/12～2/12	006-09
75	須恵器	壺	t14 包	頸部径 3.8 残存高 5.5	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,沈線,ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ　自然釉 内面:ｼﾎﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　自然釉	密	良	黄灰2.5Y6/1	-	007-01
76	須恵器	壺脚部	t14 包	残存高 2.6	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	灰黄2.5Y6/2	口縁部1/12未満	007-03
77	陶器	鉢	t14 包 t15 包	口径 21.1 残存高 9.7 底径 14.6	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,削り出し高台,施釉(貫入あり) 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,施釉(貫入あり)	密	良	釉:抹茶色838,素地:にぶい橙10YR7/2	口縁部6/12	007-02
78	土製品	不明品	t14 包	3.1×2.0 厚さ 1.3	重量6.35g 二面研磨　角部面取り	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	-	007-04
79	須恵器	杯	q15 包	口径 9.6 残存高 3.0	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾍﾗ切後ﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ　降灰 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,仕上げ多方向ﾅﾃﾞ	密	良	黄灰2.5Y6/1	口縁部2/12	007-06
80	須恵器	杯蓋	q15 包	残存高 2.1	外面:ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ,摘み貼付　自然釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ｵｻｴ・多方向ﾅﾃﾞ	密	良	灰黄褐10YR6/2	摘み部完存	007-07
81	須恵器	杯	q15 包	残存高 3.6	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ　降灰 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	黄灰2.5Y6/1	口縁部1/12	007-05
82	須恵器	杯	r15 包	器高 4.3	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾍﾗ切後ﾅﾃﾞ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ　煤付着	密	良	黄灰2.5Y5/1	口縁部1/12	008-02
83	須恵器	皿	r15 包	残存高 3.4	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	灰白2.5Y7/1	口縁部2/12	008-03
84	土師器	杯	r15 包	口径 12.9 残存高 2.9	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙2.5YR6/6	口縁部5/12	007-09
85	土師器	杯	r15 包	口径 13.8 器高 2.9	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部3/12	007-08
86	土師器	把手	r15 包	残存高 5.0	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ 内面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	把手完存	008-01
87	須恵器	円面硯	r15 包	残存高 3.4	外面:カキメ,方形透かし2か所　自然釉 内面:ﾅﾃﾞ　自然釉	密	良	灰白2.5Y7/1	-	008-05
88	緑釉陶器	香炉蓋	r15 包	口径 9.2 残存高 1.4	外面:陰刻花文,施釉 内面:施釉	密	良	釉:象牙色789,素地:浅黄橙10YR8/4	口縁部1/12	008-06
89	灰釉陶器	椀	r15 包 s16 包	口径 16.8 器高 4.9 底径 7.6	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ,糸切痕,高台貼付,施釉(ﾊｹﾇﾘ) 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,施釉(ﾊｹﾇﾘ)	密	良	釉:抹茶色838,素地:灰白2.5Y7/1	口縁部1/12 底部6/12	008-04
90	白磁	皿	r15 包	残存高 2.2	外面:沈線,施釉 内面:施釉	密	良	釉:水縹993,素地:灰白7.5Y8/1	口縁部1/12	008-08

第Ⅲ－４表　第 203 次調査（２区）　遺物観察表２

番号	器種	器形	地区 遺構	法量(cm)・重量(g)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	実測番号
91	白磁	皿	r15 包	底径 4.8 残存高 1.1	外面:ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ 内面:施釉	密	良	釉:利休白茶812,素地:灰白2.5Y7/1	底部1/12	008-07
92	陶器	鉢	r15 包	残存高 8.2	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,施釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,摺り目,施釉	密	良	釉:しゅろ色765,素地:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部1/12	009-01
93	弥生土器	広口壺	s15 包	残存高 2.5	外面:ﾅﾃﾞ,櫛描波状文,刻み目 内面:ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	やや密	良	明赤褐5YR5/6	口縁部1/12	009-03
94	弥生土器	甕か	s15 包	残存高 2.7	外面:ﾊｹ,ﾅﾃﾞ,刻み目 内面:ﾅﾃﾞ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12	009-02
95	土師器	杯	s15 包	口径 15.5 器高 2.3	外面:ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾐｶﾞｷ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙5YR6/6	口縁部2/12	009-04
96	須恵器	杯蓋	s15 包	口径 13.3 残存高 1.2	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ　自然釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	灰白2.5Y7/1	口縁部1/12未満	009-05
97	灰釉陶器	壺	s15 包	残存高 2.9	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,施釉(ﾊｹﾇﾘか) 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,施釉(ﾊｹﾇﾘか)	密	良	釉:瑞寛茶983,素地:灰黄2.5Y7/2	口縁部1/12	009-06
98	陶器	皿	s15 包	口径 8.6 器高 2.3 底径 5.0	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,糸切痕　自然釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　自然釉　黒いタール状物質付着	密	良	灰黄2.5Y7/2	口縁部9/12 底部完存	009-07
99	石整品	砥石	s15 包	長さ 5.1,幅 4.4,厚み 1.5,重量48.0g,,四面摺り面,擦痕あり		-	-	-	-	009-08
100	土師器	杯	t15 包	残存高 3.1	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ?,ﾖｺﾅﾃﾞ　摩滅著しい 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ　摩滅著しい	密	良	橙5YR6/6	口縁部1/12	010-02
101	須恵器	杯	t15 包	口径(推定) 12.0 残存高 2.7	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	灰7.5Y5/1	口縁部1/12	010-03
102	土師器	杯	t15 包	残存高 2.0	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙5YR6/6	口縁部1/12	010-01
103	須恵器	杯蓋	q16 包	残存高 1.2	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　自然釉　降灰 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	灰白2.5Y7/1	口縁部1/12	010-05
104	須恵器	杯蓋	r16 包	口径 9.9 残存高 1.5	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ,摘み貼付　自然釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,仕上げ多方向ﾅﾃﾞ	密	良	黄灰2.5Y6/1	口縁部4/12	011-09
105	弥生土器	壺	r16 包	残存高 1.7	外面:ﾅﾃﾞ,刻み目 内面:ﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12	010-07
106	弥生土器	甕	r16 包	残存高 3.5	外面:ﾊｹ,刻み目,ﾅﾃﾞ　煤付着 内面:ﾊｹ,ﾅﾃﾞ,ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12	010-06
107	土師器	杯	r16 包	残存高 3.4	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙5YR6/6	口縁部1/12	011-04
108	土師器	盤高台	r16 包	残存高 1.9	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	橙2.5YR6/6	底部1/12	011-05
109	土師器	杯	r16 包	口径(推定)11.9 器高 3.0	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	浅黄橙10YR8/4	口縁部2/12	011-01
110	土師器	杯	r16 包	口径(推定)12.2 器高 2.9	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部2/12	011-02
111	土師器	皿	r16 包	口径 17.9 器高 2.1	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙2.5YR6/6	口縁部2/12	010-08
112	土師器	杯	r16 包	口径 13.7 残存高 3.7	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部3/12	010-09
113	土製品	不明品	r16 包	残存高 2.2	重量8.31g 側面:面取り,底部:ﾅﾃﾞ	密	良	明赤褐2.5Y5/6	-	011-06
114	土師器	移動式竈か	r16 包	残存高 5.3 残存幅 3.8	外面:ﾅﾃﾞ,ﾊｹ 内面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR7/6	-	011-07
115	須恵器	杯蓋	r16 包	口径(推定)18.3 残存高 1.4	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ　降灰 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,仕上げﾅﾃﾞ	密	良	灰黄褐10YR6/2	口縁部1/12	012-02
116	須恵器	杯蓋	r16 包	口径(推定)19.0 残存高 1.8	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ　降灰 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	灰黄褐10YR6/2	口縁部1/12	012-01
117	須恵器	杯	r16 包	残存高 2.7	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	黄灰2.5Y6/1	口縁部1/12	012-04
118	須恵器	杯	r16 包	口径 9.4 残存高 3.5	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	灰5Y6/1	口縁部3/12	011-08
119	須恵器	杯	r16 包	口径(推定)12.6 残存高 3.1	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ　降灰　口縁部に自然釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　口縁部に自然釉	密	良	灰黄褐10YR6/2	口縁部1/12	012-03
120	灰釉陶器	壺	r16 包	残存高 1.3	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,施釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,施釉	密	良	釉:鶯茶814,素地:灰白10YR7/1	口縁部1/12	012-05
121	土師器	杯	r16 包	残存高 2.2	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙5YR6/6	口縁部1/12	011-03
122	須恵器	転用硯	s16 包	残存高 2.1 7.5×6.0	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾍﾗ切後ﾅﾃﾞ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,仕上げﾅﾃﾞ　やや研磨　墨痕	密	良	褐灰10YR5/1	-	012-09
123	土師器	高杯	s16 包	底径 11.4 残存高 1.0	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	浅黄橙10YR8/4	底部4/12	012-07
124	土師器	杯	s16 包	残存高 2.8	外面:ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙2.5YR6/6	口縁部1/12	012-06
125	須恵器	杯蓋	s16 包	口径(推定)16.6 残存高 1.3	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ　降灰 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	灰白2.5Y7/1	口縁部1/12	012-08
126	須恵器	横瓶	s16 包	残存高 3.1	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,注口部貼付ﾅﾃﾞ　自然釉　焼膨れ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　頸部内面に自然釉　焼膨れ	密	良	黄灰2.5Y6/1	-	013-01
127	須恵器	甕	s16 包	残存高 6.0	外面:ﾀﾀｷ 内面:当て具痕,ﾊｹ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	-	013-03
128	須恵器	甕	s16 包	残存高 7.0	外面:ﾀﾀｷ 内面:当て具痕	密	良	黄灰2.5Y5/1	-	013-02
129	須恵器	鉢	t16 包	残存高 4.5	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　自然釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　口縁部に自然釉	密	良	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部1/12	013-05
130	土師器	杯	t16 包	口径(推定)15.4 残存高 3.5	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙5YR7/6	口縁部1/12	013-04
131	土師器	杯	q17 包	残存高 2.3	外面:ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙5YR6/6	口縁部1/12	013-06
132	土師器	甕	q17 包	残存高 2.6	外面:ﾅﾃﾞ,ﾊｹ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:板ﾅﾃﾞ,ﾊｹ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12	013-07
133	須恵器	転用硯か	q17 包	残存高 4.9 4.9×8.5	外面:ﾀﾀｷ 内面:当て具痕　研磨　墨痕なし	密	良	灰黄褐10YR6/2	-	014-01
134	弥生土器	甕	r17 包	残存高 5.2	外面:ﾅﾃﾞ・ｵｻｴ 内面:ﾅﾃﾞ・ｵｻｴ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12	014-02
135	弥生土器	壺	r17 包	底径 6.1 残存高 5.0	外面:ﾅﾃﾞ 内面:ﾍﾗｹｽﾞﾘ,工具当たり痕	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	底部7/12	014-03

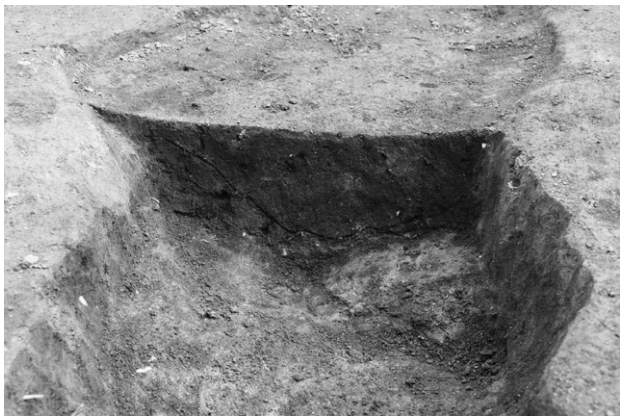
第Ⅲ－５表　第 203 次調査（２区）　遺物観察表３

番号	器種	器形	地区 遺構	法量(cm)・重量(g)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	実測番号
136	弥生土器	小型鉢	r17 包	口径 8.8 器高 9.5 底径 5.2	外面:ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ,ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙5YR6/4	口縁部6/12 底部完存	014-04
137	土師器	甕	r17 包	口径 17.0 残存高 5.4	外面:ﾊｹ,ﾖｺﾅﾃﾞ　煤付着 内面:ﾊｹ,ﾖｺﾅﾃﾞ,工具当たり痕　口縁部に煤付着	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部3/12	014-05
138	須恵器	円面硯	r17 包	残存高 3.2	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,長方形スカシ2か所 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	灰N4/	-	014-06
139	弥生土器	脚付壺	s17 包	底径(推定)6.8 残存高 3.0	外面:ﾊｹ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ,ﾊｹ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	浅黄橙10YR8/4	底部2/12	015-03
140	弥生土器	壺か	s17 包	底径 5.1 残存高 2.4	外面:ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ 内面:工具ﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	底部完存	016-01
141	弥生土器	壺	s17 包	底径 6.1 残存高 4.1	外面:ﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ　底部に籾殻・植物圧痕　黒斑　煤付着 内面:ﾅﾃﾞ　摩滅	やや密	良	にぶい赤褐5YR5/4	底部ほぼ完存	015-02
142	弥生土器	壺	s17 包	底径 8.4 残存高 2.7	外面:ﾊｹ,ﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ　摩滅	やや粗	良	にぶい橙7.5YR6/4	底部完存	015-01
143	石整品	石包丁	s17 包	縦 7.5 残存最大幅11.3 厚 1.1	重量103g 1孔か　両側穿孔　両面に擦痕あり　刃部に使用による刃こぼれあり	-	-	-	1/3が欠損か	015-04
144	陶器	鉢	s17 包	底径(推定)10.0 残存高 2.9	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	にぶい黄橙10YR6/3	底部2/12	015-06
145	青磁	椀	s17 包	残存高 3.3	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ?,蓮弁文,施釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ?,施釉	密	良	釉:鶯茶814,素地:灰白2.5Y7/1	口縁部1/12未満	015-05
146	弥生土器	台付甕	r18 包	底径 10.4 残存高 2.6	外面:ﾐｶﾞｷ(摩耗),板ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙7.5YR6/6	底部4/12	016-03
147	弥生土器	壺	r18 包	残存高 7.3	外面:ﾊｹ,簾状文 内面:工具ﾅﾃﾞ	やや粗	良	にぶい橙7.5YR6/4	-	017-07
148	須恵器	杯蓋	r18 包	口径(推定)9.6 残存高 1.9	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　降灰 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	灰白2.5Y7/1	口縁部1/12	016-06
149	土師器	杯	r18 包	残存高 3.3	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙5YR6/6	口縁部1/12	016-05
150	須恵器	杯	r18 包	口径 14.0 器高 3.4	外面:ﾍﾗ切後ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ　降灰 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,仕上げ多方向ﾅﾃﾞ	密	良	黄灰2.5Y6/1	口縁部1/12	016-07
151	須恵器	水注か	r18 包	残存長 9.1 残存高 2.0	外面:ﾍﾗｹｽﾞﾘ　面取り9面　面取り削りは同方向ではない 内面:芯となる棒状具抜取ご不調整	密	良	灰10Y6/1	注口部ほぼ完存	016-08
152	土師器	杯	r18 包	残存高 2.2	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙5YR7/6	口縁部1/12	016-04
153	石整品	磨製石斧	r18 包	縦 3.9 残存最大幅 3.6 厚 1.4	重量20.34g 3面研磨　刃部あり　擦痕はさほど見られない	-	-	-	片側面、上部欠損	017-01
154	須恵器	杯蓋	s18 包	口径 9.3 残存高 2.3	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,摘み貼付痕　自然釉厚く付着し調整不明瞭 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	褐灰10YR6/1	口縁部1/12	018-02
155	土師器	皿	s18 包	残存高 2.2	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ　見込みに線刻があるが意図的なものか不明	密	良	橙5YR6/6	口縁部1/12未満	017-03
156	土師器	杯	s18 包	残存高 2.1	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12	017-02
157	土師器	甕	s18 包	残存高 3.5	外面:ﾊｹ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:工具ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部1/12	017-04
158	土師器	甕	s18 包	残存高 4.9	外面:ﾊｹ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾊｹ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12	017-05
159	陶器	椀	s18 包	口径 14.6 器高 5.0 底径 5.9	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,糸切り後ﾅﾃﾞ,高台貼付 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　見込み部摩耗	密	良	灰黄褐10YR6/2	口縁部1/12 底部完存	018-03
160	陶器	椀	s18 包	残存高 5.8	外面:糸切り後ﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,高台貼付　口縁部自然釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　自然釉	密	良	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部1/12 底部1/12	018-04
161	土師器	鍋	s18 包	口径(推定)24.5 残存高 4.0	外面:ﾅﾃﾞ・ｵｻｴ,ﾖｺﾅﾃﾞ　煤付着 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12	018-01
162	弥生土器	鉢	t18 包	残存高 4.3	外面:ﾊｹもしくは工具によるﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ 内面:ﾊｹもしくは工具によるﾅﾃﾞ,ｵｻｴ,ﾅﾃﾞ	密	良	褐灰10YR4/1	口縁部1/12	017-06
163	陶器	椀	t18 包	口径 13.7 器高 6.3 底径 6.0	外面:糸切痕,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,高台貼付　籾殻痕　口縁部に自然釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,仕上げ一方向ﾅﾃﾞ　自然釉	密	良	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部11/12 底部6/12	018-08
164	土師器	杯	r19 包	残存高 2.6	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,沈線,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾐｶﾞｷ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部1/12	018-05
165	土師器	杯	r19 包	残存高 2.3	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙5YR7/6	口縁部1/12	018-07
166	土師器	甕	r19 包	残存高 2.4	外面:ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12	018-06
167	須恵器	鉢	r19 包	底径 8.8 残存高 3.6	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,切離し後不調整 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	密	良	暗灰黄2.5Y5/2	底部5/12	019-01
168	須恵器	転用硯	r19 包	13.3×7.5	外面:ﾀﾀｷ 内面:研磨　明瞭な墨痕　籾殻圧痕か	密	良	灰N4/1	-	019-02
169	土師器	杯	t19 包	残存高 3.6	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾊｹ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部1/12	019-03
170	土師器	高杯	t19 包	底径 11.5 残存高 1.7	外面:ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ 内面:ﾖｺﾅﾃﾞ	密	良	橙2.5Y6/6	底部1/12	019-04
171	土師器	把手	t19 包	残存高 2.7	外面:ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ 内面:ｵｻｴ	密	良	にぶい黄橙10YR6/3	把手先端欠損	019-05
172	須恵器	転用硯	t15 包	6.8×4.7	外面:ﾀﾀｷ　分厚い自然釉 内面:当て具痕　研磨　墨痕あり	密	良	灰黄褐10YR6/2	-	010-04
173	土製品	製塩土器	t14 表土	残存高 2.0	外面・ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ	やや粗	良	橙2.5YR6/6	底部1/12	021-06
174	須恵器	壺	t14 表土	底径 14.7 残存高 5.0	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾀﾀｷ,ﾛｸﾛｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ 内面:ﾅﾃﾞ,ﾖｺﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ・ｵｻｴ　自然釉	密	良	灰黄褐10YR6/2	底部3/12	021-07
175	須恵器	転用硯	s16 カクラン2	6.0×7.0	外面:ﾀﾀｷ 内面:当て具痕,研磨,墨痕	密	良	灰黄褐10YR6/2	-	022-02
176	緑釉緑彩陶器	椀	r16 カクラン2	底径 7.7 残存高 1.8	外面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,糸切痕,高台貼付　施釉 内面:ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,施釉,緑彩	密	良	施文釉:松葉色851,釉:青白橡989,素地:灰白2.5Y7/1	底部3/12	021-04
177	弥生土器	壺	排土	口径(推定)11.1 残存高 3.3	外面:ﾊｹ,ｵｻｴ,ﾖｺﾅﾃﾞ,刻み目 内面:ﾊｹ,ｺｺﾅﾃﾞ,突起貼付	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部2/12	022-01
178	青磁	椀	排土	残存高 2.8	外面:鎬蓮弁文,施釉 内面:施釉	密	良	釉:海松茶817,素地:灰白2.5Y7/1	口縁部1/12	021-05

第Ⅲ－６表　第 203 次調査（２区）　遺物観察表４

SZ11623 弥生土器（３）出土状況（南から）

SZ11623 弥生土器（２）出土状況（南から）



SZ11623 土層断面（西から）

SK11614（南から）

SK11613　半截状況・土層断面（南西から）

写真図版３

SA11630・SD11612（北から）

SA11630（南から）

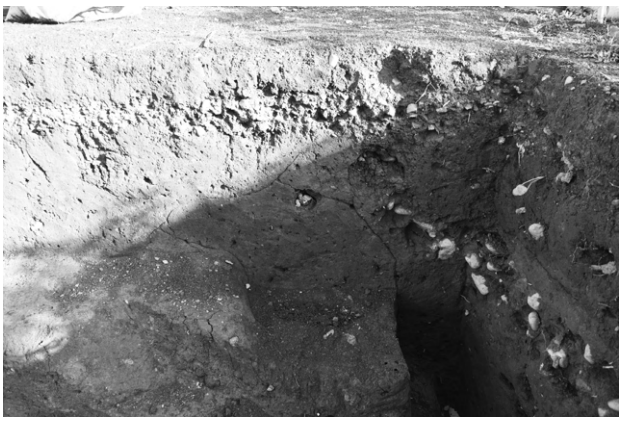
SB11620・SB11621（北から）

SB11620・SB11621 柱穴２土層断面（西から）

s14 pit３土層断面（南東から）

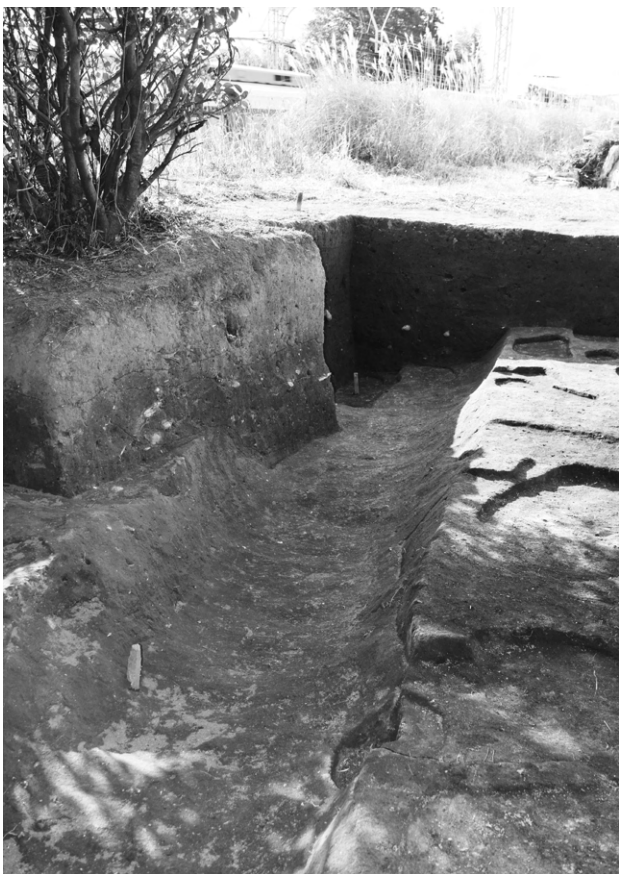
SB11622 柱穴３土層断面（北から）

SB11622 柱穴２土層断面（西から）



SD11612 土層断面（南から）

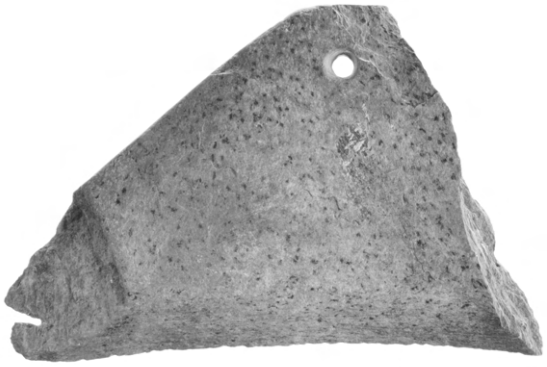
SE11625 土層断面（南西から）



SD11615（北東から）

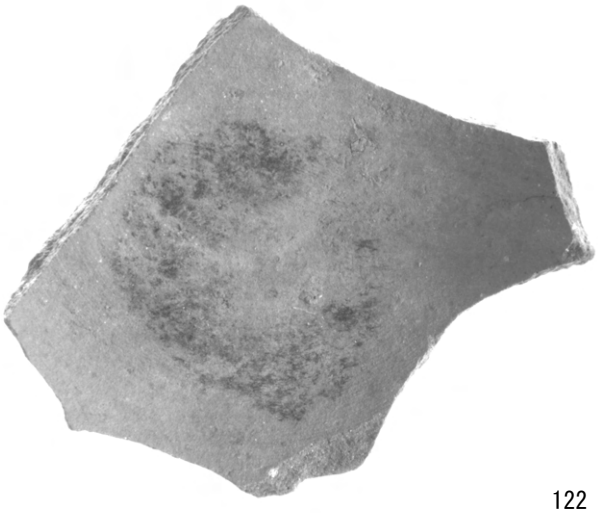
写真図版５

136



143

6



122

24

176

151

第 203 次調査（２区）出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	しせきさいくうあと　れいわよねんどはっくつちょうさがいほう
書名	史跡斎宮跡　令和４年度発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	川部浩司・山中由紀子・小原雄也
編集機関	斎宮歴史博物館
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL0596-52-3800
発行年月日	西暦　2024年3月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
さいくうあと 斎宮跡	たきぐん めいわちょう 多気郡明和町 さいくう たけがわ 斎宮・竹川	24442	210	34° 31′ 55″ ～ 34° 32′ 30″	136° 36′ 16″ ～ 136° 37′ 37″	1区 20220728 ～ 20221212 2区 20221007 ～ 20230317	1区 25.3㎡ 2区 200㎡	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
斎宮跡 第203次 （1区）	官衙	飛鳥・奈良・ 平安・鎌倉	掘立柱建物・ 掘立柱塀・ 溝・土坑	土師器・中世陶器	飛鳥時代の斜方位区画内の西第三堂
斎宮跡 第203次 （2区）	官衙	弥生・古墳・ 飛鳥・奈良・ 平安・鎌倉・ 江戸	方形周溝墓・ 掘立柱建物・ 掘立柱塀・ 溝・井戸・ 土坑	弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・青磁・白磁・陶器・土製品・石製品・金属製品	奈良時代の東正方位区画北東部

要約

１区
　飛鳥時代の斜方位区画内部の建物配置を明らかにすることを主眼とし、特に区画南西角の様相をはじめ西第三堂の構造と規模の把握を目的と調査である。飛鳥時代の斜方位区画内には中心建物（正殿）と外周建物（東・西脇殿各３棟）がロ字型の建物配置をとることが判明した。

２区
　奈良時代の東正方位区画での発掘調査において、掘立柱塀で構成される方形区画とその内部に南北棟の掘立柱建物２棟を確認した。このうち北側の掘立柱建物は１回の建替えが見られ、建替え後の建物は平安時代前期に建築・廃絶したとみられる。また、その東側で確認した掘立柱塀についても平安時代前期の建物に付随するものと考えられる。奈良時代末には斎宮の中心は史跡東部の鍛冶山西地区へと移動することがこれまでの発掘調査で明らかにされており、今回確認した掘立柱塀と南北棟の掘立柱建物は、飛鳥時代から斎宮の中心であった中垣内地区が平安時代前期にあっても重要な役割を担っていた可能性を提示し、今後史跡東部の方格街区を伴う遺構群との関係という新たな課題を提示することとなった。

史跡　斎 宮 跡
令和４年度

発 掘 調 査 概 報

2024 年３月 19 日
編集・発行　斎 宮 歴 史 博 物 館
印　　刷　有限会社ミフジ印刷